北杜市埋蔵文化財調査報告　第35集

山梨県北杜市

市内城館跡詳細分布調査報告書

2011
北杜市教育委員会

山梨県北杜市

市内城館跡詳細分布調査報告書

2011
北杜市教育委員会

例　言

1　本書は、北杜市教育委員会が北杜市内で実施した市内城館跡詳細分布調査の報告書である。
2　調査は、平成18年度から平成22年度まで国宝重要文化財等保存整備費補助金、山梨県文化財保存事業費補助金の交付を受けて実施した。
3　調査にあたって、市内城館跡詳細分布調査指導委員会を設置し、指導助言を受けた。
4　本書に掲載した城館跡縄張図の作成にあたって、甲斐市教育委員会山下孝司氏、関関俊明氏の指導を受けた。

例言

目次

第1章　調査の目的と経緯……1
　第1節　調査の目的と経緯……1
　第2節　調査指導委員会……2
　第3節　調査内容と方法……3
第2章　市内城館跡の現況……15
　第1節　北杜市の地理・歴史環境と城館跡の概況……15
　第2節　市内城館跡の現況……16
第3章　主要な城館跡……54
　第1節　獅子吼城跡……54
　第2節　大渡の烽火台跡……58
　第3節　信州峠の砦……61
　第4節　若神子北城……64
　第5節　旭山砦跡……67
　第6節　史跡谷戸城跡……71
　第7節　深草館跡……73
　第8節　長坂歴歌跡……75
　第9節　笹尾砦跡……77
　第10節　中山砦跡……80
第4章　調査された城館跡……84
　第1節　中尾城跡……84
　第2節　屋代氏館跡……86
　第3節　若神子城跡(古城)……87
　第4節　長泉寺の砦……89
　第5節　小和田館跡……90
　第6節　谷戸氏館跡……92
　第7節　教来石民部館跡……93
第5章　総括……96
写真図版……99～122

第１章　調査の目的と経緯

第１節　調査の目的と経緯

中世戦国時代の甲信国境に位置する北杜市には、第２章第１節に紹介するとおり山城跡、狼煙台跡が多く分布する。かつては「城山」などと呼ばれ特別の場所として認識され、また林業の場として活用されてきた山城跡、狼煙台跡であるが、近年、開発の及ぶところとなることが多くなってきた。

たとえば若神子古城は、明治時代に若神子集落の火災復興のために土砂採取が行われて大規模に破壊されたが、昭和59年、60年には甲斐源氏の里として農村公園が建設された。笹尾墓跡も歴史豊かな地域のシンボルとして公園整備がたびたび行われ、また園場整備が実施されるなどして曲輪が破壊されてきた。平成18年にも遺構の保護に配慮のないまま公園の駐車場、遊歩道が整備されている。獅子吼城跡は、平成17年に駒ヶ人集落道の拡幅改良工事に伴い曲輪の一部と山腹が失われている。

このように開発の種類、破壊の規模は異なるものの、山城跡、狼煙台跡も山頂に所在するからといって安心していられない状況になってきている。

一方、北杜市と近隣自治体に所在する山城等では、史跡指定による保護も図られている。甲斐源氏の居城と伝えられる史跡谷戸城跡は、平成５年に国史跡に指定され、平成19年度には史跡整備が完了した。戦国大名武田氏の最後の居城となった韮崎市新府城跡は、昭和48年に国史跡に指定され、同じく白山城跡は平成13年に国史跡指定を受けている。また、甲府市の躑躅ヶ崎館跡、新府城を起点として甲信国境へと延びる狼煙台群、山城群を武田氏関連遺跡群として史跡指定を図る構想も検討されていたという。

以上のような状況から、北杜市では市内に分布する城館跡等の現状を把握し基礎資料を整備して、将来の開発協議と保護活用に備えることを目的として市内城館跡詳細分布調査を実施することとした。

調査は平成18年度から国庫補助金、県費補助金の交付を受けて、主要な城館跡の現況平面図、地形測量図を作成することを中心に実施し、平成22年度に5ヵ年に及ぶ分布調査の成果を本書にまとめて刊行した。各年度の主な調査内容と調査経費は次のとおりである。

平成18年度　大渡狼煙台跡地形測量　2,800,000円
平成19年度　若神子北城地形測量、地中レーダー探査、航空写真撮影　5,206,742円
平成20年度　旭山墓跡、中山砦、深草館跡、長坂氏館跡の地形測量及び地中レーダー探査　10,806,792円
平成21年度　信州峠の防塁地形測量　9,875,000円
平成22年度　信州峠の防塁試掘調査、分布調査報告書刊行　1,107,000円

なお、上記の分布調査とは別に、平成17年度には集落道改良工事に伴い獅子吼城跡の一部曲輪の発掘調査と地形測量、平成18年度には中山間地域総合整備事業に伴う笹尾墓跡の駐車場建設、公園整備に伴い事業者負担により笹尾墓跡の発掘調査、地形測量等を実施している。

第２節　調査指導委員会

本調査を実施するにあたり専門的な見地から指導助言を受けるため、平成18年度に市内城館跡詳細分布調査指導委員会設置要綱を策定し、調査指導委員会を設置した。設置要綱と委員会の構成は以下のとおりである。

市内城館跡詳細分布調査指導委員会設置要綱

平成19年3月2日
北杜市教育委員会

（目的）

第１条　国庫補助事業「市内城館跡詳細分布調査」（以下「分布調査」という。）について、専門的な指導助言を得るために、市内城館跡詳細分布調査指導委員会（以下「指導委員会」という。）を設置する。

（任務）

第２条　指導委員会は、分布調査の方法及び結果について、検討し、これらの事項について北杜市教育委員会（以下「教育委員会」という。）に対し、指導及び助言をする。

（組織）

第３条　指導委員会は、別表に掲げる者をもって組織する。

２　委員は、教育長が委嘱する。

３　委員の任期は、分布調査が終了するまでとする。

４　指導委員会に、委員長および副委員長各１名を置き、委員の互選によりこれらを定める。

５　委員長は、指導委員会の会務を総理し、委員会を代表する。

６　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその職務を代理し、委員長が欠けたときはその職務を行う。

（参与）

第４条　指導委員会に参与を置く。

２　参与は、別表に掲げる機関を充てる。

３　参与は、指導委員会に出席し、補助事業と確認調査の実施に必要な助言を行う。

４　参与の任期は、分布調査が終了するまでとする。

（指導機関）

第５条　文化庁文化財部記念物課を指導機関とする。

（会議）

第６条　指導委員会は、委員長が召集する。

２　会議の議長は、委員長があたる。

（意見の聴取等）

第７条　指導委員会は、必要があると認める場合は、委員以外の者を会議に出席させ、説明または意見を聴くことができる。

（旅費等）

第９条　教育委員会は、指導委員会の委員並びに前条で意見を聴取する者に、謝金及び旅費を支給することができる。

（庶務）

第10条 指導委員会の庶務は、教育委員会において処理する。

附則

この要綱は、平成19年３月２日から施行し、分布調査が終了したときは、その効力を失うものとする。

別　表

指導委員会（五十音順）

委　員　秋山　敬（武田氏研究会理事・元山梨県史編纂室長）

委　員　谷口一夫（山梨県考古学協会長）

委　員　萩原三雄（山梨郷土研究会理事）

委　員　八巻與志夫（山梨県立考古学博物館学芸課長　当時）

参　与

参　与　山梨県教育庁学術文化財課

参　与　山梨県埋蔵文化財センター資料管及課長

指導機関

文化庁文化財部記念物課

指導委員会は、平成19年11月22日と平成21年３月24日に開催し、調査方針、調査内容の検討、課題の指摘などの指導助言を受けた。

第３節　調査内容と方法

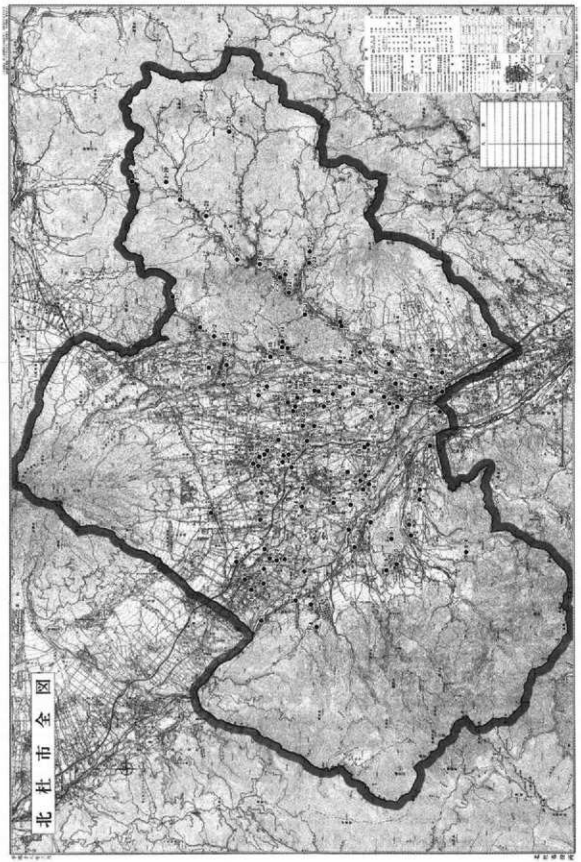
分布調査では、主要な城館跡の地形測量図と縄張図の作成、地中レーダー探査による地下遺構の推定、航空写真撮影、試掘調査、第２章に記す市内城館跡の全ての現地踏査と現況確認を行った。

地形測量は、特に山城跡、狼煙台跡は広範に及ぶため、曲輪等の遺構が分布する範囲のみを詳細に実測して、現存する北杜市管内図、合併以前の旧町村の都市計画図、管内図に重ね合わせる形で作成した。これにより比較的安価に主要部分の正確な地形測量図を作成するとともに、周辺集落との正確な位置関係を表示することができた。

縄張図は、上記の地形測量図をもとに、『日本城郭大系』、『定本山梨の城』などに掲載された先学の縄張図を参照しながら、北杜市職員が現地踏査しながら作成した。この際、韮崎市教育委員会山下孝司氏に同行を求め、指導を仰いだ。

地中レーダー探査は、専門業者に委託して行った。探査測線は北杜市職員と受託業者とで検討のうえ決定した。その成果は第３章で報告する。航空写真撮影も委託による。

試掘調査は信州峠の防塁のみで実施した。人力で堀跡と思われる凹地に試掘溝を発掘し、遺構の有無、構造を調査した。その成果は第３章に報告する。



第1図　市内城館跡分布図(1/200,000)

第1表　市内城館跡一覧

番号	名称	種別	所在地		甲斐国志ほか	その他文献	現況	遺構
1－1	小笠原氏屋敷	居館	明野	小笠原原芝	小笠原長清館跡小笠原村誌ニ組 今祝地ト小ノ郷城分タズ猛烈院ノ北東 建中ニ長清頃トテ五輪石塔ニ四基アリ又西都筑調製集生ニモ同名ノ村故跡等存セリ山梨ノ中郡小瀬村ノ条ニ本屋ニ出ヅ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山梨県の城 日本城郭大系 山城探訪第15集		堀・土塁？
1－2	二井氏屋敷	屋敷	明野	上手北組	三井市兵衛　上手村　校村ニ井組ト云処ノ早正トナリ今モ村民ヤリ　昔時ノ屋敷ノ田トテル王下お清宝ニ同氏ノ云ヒタルヒリ後氏ヲ似ヒ地名ノヲカル北通神社大水中ノ傍れニ日向氏被官ニ井宮内右衛門尉ノル者見ダリ又本村ニ永井組ト云処アリ長井氏ノ条ハ小石和部ニ記ス（甲斐国志　巻之四二　古跡部第十一）	山梨県の城 山城探訪第15集	水田	消滅
1－3	栗代氏館跡	居館	明野	上神取諏訪原	栗代越中守定時　上神取村　古ノ一町許ノ地ナリ稀文アリ附録巻又以上殿長中ノ地頭就還ニ皆上衆ナリ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十） 栗代氏　村上頼氏食禄料都栗代新善　省略　天文・弘治ノ頃徳守守正地勇志摩守正国ホ栗代ニ属ス　省略　栗代左衛門尉勘ホ　省略　天正十年春府ニイヘ以功加封元和九年八月二日ホ　省略　急度城上神取村ニ建勝久寺勝永寺為開所此処建禅ノ跡存セリ但ク本州ニ仕セシ後ヤリ慶長検地帳ニモ知行高ヲ記セリ　省略　本州甲斐領郷帳知高ノ時所帳ニハ一得着ナリ云（甲斐国志　巻之九十八　人物部第七）	山梨県の中世城館跡 山梨県の城 日本城郭大系 山城探訪第15集	水田・畑・宅地	土塁・単郭式
1－4	堤城跡	居館	明野	浅尾堤	藤作原　浅尾村　浅生氏家臣見ユ又古文書朝生・明足ニモ作ル今浅尾村也小笠原牧ニ統ヲ区別ス云天正七年御刻録ノ内　神祖大乗院ノ知ク浅尾原ニ御出馬アリルアルハ此地ナリ神祖ノ乗ニ化ヲ其意ハ慶応遠ヲ若御子ハ西北ノ方一里ニハ近シ左モ其際ニ堤河原即ク隣ク取ニ渡原スベキ地ナリ今御陣場・旗立松ト云ヲリ当時権現ノ松迄ヘモ御出机ヲ立ラルト云（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山城探訪第15集	畑・宅地	土塁？
1－5	小笠御前神社	民館？	明野	上手小笠			神社境内	
1－6	御前平の墓	居館	明野	下神取			荒廃宅地	土塁
2－1	大豆生田砦	砦	須玉	大豆生田	大豆生田砦　若神子ノ東南一過ト町中間ニモ同ヲ隔ツ丁字形ノ台地ニアリ　雪ヲ横ヘタル処ハ土塁塁ノ形ヲ作シヲ僅城広ク内ニ村民アリ里人云当館ニモ記載ト云アリ其一ニテ此所ハ勝忠ヲ伊予守富ノ居ト云ニ間違ヒ他ニナド云モ又存シタリ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	須玉町史 山梨県の城 日本城郭大系 山城探訪第15集	水田・畑・宅地	消滅
2－2	藤巻氏屋敷	民館	須玉	大豆生田	藤巻伊予守　大豆生田村　村内ニ伊予守屋敷ト云処アリ且同氏者多ク里長所蔵ト条ノ文書ヲ二冊ホ城ノ累原筋下神内川村早正属ス其文ニ百貫文神取城、七拾五文銭弓鉄、天文一正一人・延数　弐百七十五正十年午十月朔日頃和伯書守栄之藤巻弥介右衛門殿、又於惣社領内支給貫文致下之云々同上　一年六月六日トアレバ天年ノ後モ猶北条家ニ属シ上野ニ手柔候ヲ給ヘルヤラン藤巻ハ古頃ヨリ村名中郡筋ニ在リ彼処ニテ大正年ヨリ云村里伝シテ此見筋へ移リタル由人口ニ伝ヒ・ヘタリ又藤巻氏以変ヲ姉ヤテ此ニ移リシカ書板跡部ヲ見併スベシ（甲斐国志巻之百十二　古跡部第上）	須玉町史 山梨県の城 山城探訪第15集	水田・畑・宅地	消滅
2－3	真田氏屋敷	居館	須玉	人蔵	真田隠岐守宅跡　大蔵村　今本村ノ神主某同ク（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	須玉町史　山梨県の城 日本城郭大系　山城探訪第15集	畑・宅地	消滅
2－4	丸茂右衛門尉屋敷	屋敷	須玉	上小倉上小屋	丸茂右衛門尉　小倉村　丸茂氏ハ小笠原長清ノ後ヨリ出ヅ依器中ニ見エタリ身延道古帳ニ於道、逸見ノ小倉丸茂右衛門尉トアル是ナリ今ノ孫ノ家ニ古文書ノ写ヲ蔵ム古本寺院蔵譜ヲ蔵ムト云丸茂氏右衛ノ由緒ハ万力筋ニアリ（甲斐国志　巻之百十二　古跡部第十一）	須玉町史 山城探訪第15集	宅地	
2－5	中尾城	城	須玉	小倉中尾	中尾城　小倉村　方二十二歩平地ニ塁アリ高ニ間許早人清水時代ノ城ナリト云伝ニ因ニ曽モ倉守蔵ン処カ又天正七年時ニ福島セシナラン小笠原ノ支城小倉氏アリ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山梨県史　須玉町史 山梨県の城　日本城郭大系 北山平部誌　山城探訪第15集	畑・宅地・工場敷	堀・堀立柱建物・井戸

番号	名称	種別	所在地		甲斐国志ほか	その他文献	現況	遺構
2－6	小林茂種古衝門屋敷	民舘	須玉	東向		山梨県の城	宅地	
2－7	三枝氏屋敷	居館	須玉	東向中屋敷	三枝氏宅跡　東向村　伊豆守守昌枝元院ヲ創ス建興今廃シテ信光寺被有ス十仏守昌吉此辺ヲ知行セシナリ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	須玉町史　山梨県の城 日本城郭大系　北巨摩郡誌 山城探訪第15集	水田・畑・境内	屋敷区画・絵図
2－8	岩下弥三郎屋敷	居館	須玉	塚之沢	岩下弥三郎　塚ノ沢村　里長藏ム天正壬午十一月八日御朱印ニ塚之沢郷五拾貫文云々トアリ弥三郎墳墓ハ間ム郎兵衛門屋敷ニアリ（甲斐国志　巻之四十二　土産部第十一）	須玉町史 山梨県の城	宅地	
2－9	若神子城跡（古城）	城	須玉	若神子古城	若神子　若神子村　多摩庄ニ属ス天正七年八月ヨリ北条氏直本陣ヲ居エシ処ナリ中略同遺臺根今モ此処ノ都合ナリ逸見筋ノ堅メ　駅使ヲイ勢ム伴ヲ警ノ如ロト云又四河ノ北正覚寺ノ後ニ一所アリ其東北ハ鑓手掘切ヲ隔遠ノ南縁ノ北ニモ一所、下村ノ上ニモ一所アリ何モ由上広ク陵ニ備リ堆屋処々ニイヒシタリ中略義信・信光以造見氏ヨリシ太郎信義時ニ或ンデ東國ニ逸見山ノ城ト記スルモ居城ノ後ニ聞エタリ谷戸ノ要害ノ城壁ニテ居館ハ此処ナラン中略屋敷ノ村内ヒ居屋造ノ名ナリ現場・殿平・屋敷等ノ地名アリ宮脇村入坪組ノ下観手掛板ノ上ニモ一構ノ型アリ若神子ニ統キ間ニ雲雀塚ヲ隔ツルノミ天正五年時北条氏旧臣ニ勝ヲ陣取場需セシコトナルベシ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山梨県の城 山梨県の中世城館跡 須玉町史 日本城郭大系 山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	公園 山林	土塁・空堀・郭 土塁
2－10	若神子北城	城	須玉	若神子小手指				
2－11	若神子南城	城	須玉	若神子諏訪沢又白		山梨県の城 山梨県の中世城館跡 日本城郭大系 須玉町史 山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	山林・境内	消滅
2－12	長泉寺の塁	寺院	須玉	若神子	当山之儀者往古者真言宗ニ御座候処武田晴信朝臣郎君新羅公御病気之御当村諏訪ニ山堅ク候処ニ当寺中僧頓野禅現社中より湧出泉汲ても入湯半座之御義清公御墓塗舟建立依之御宗山義御院長泉寺与申候大よりえ田家累代御尊牌ニて歎百歩之有附地被下置候…、竹藪　壱ヶ所　長弐拾間　巾三間　但し境内第二御座候（甲斐国志記事引　山城雪踏記　山良寺寺）	甲斐国社記考記	農地・境内	土塁・堀
2－13	源太ヶ城跡	烽火台	須玉	上津金人和矢介	源太城址　上津金村　ノ西北十数町海岸寺ノ山ヘ統タル最高峯ヲ云里諸峰最ナリ其ニ源太アリ今登リ人ノ子供ベシ東方海岸寺山界ヘ山等ヲ遥ヲ遥ヲ絶ツシテ下ヲ浦水ヲ引其ヘハ広ヲ／地ナリ北辺ニヲ遺構等ヲ掘ルに東南ハ堅無・諸人・絶沢・庭山／請山嶋ヘト登ニ北ヨリ西ヘ玉川／諏ヲ帯被竜川・関屋坂古／関脇仕嶋鬼塚ナドに監ロアリ山頂ニ望レバ遠見ヲ及ホ様跡・信州界マデ眼下ニ一覧スベシ望人ハ清光ノ城ナリト云伝フ按ニ古文ノ証頼ニシテ此処ハ烽火ノ要害ナリシニヤ又烽火台ニ用スベシ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山梨県の城 山梨県の中世城館跡 日本城郭大系 須玉町史 山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	山林	堀切・テラス・帯
2－14	雑念口留番所	番所	須玉	下津金		山梨県史		
2－15	古宮城	城	須玉	下津金御所	古宮城遺　上津金村　諏訪明神社地ナリ広百十八間、横八十五間、内高・外溝・土手形存セリ其輪長城寺記云文亀元年三月信虎嫡氷猶ヨリ就鎌シテ於ニ次ス依作御所又殿村ト云処モアリ津金覚ノコトハ上原部ニ委シ禽遷守又十郎・清水越殿助モ址アリ上村南ハ堀江北ノ裾ヨリ西南玉川ノ流註ナリ此玉川ト一緒ノ間ヲニシテ境内又次ハニアラズ誠ニ御ヲノ城ノ後ノ屋ナカランカ鬼モノ話モ年御対陣ノ時若神子ヨリ北ノ北条方侵入ラレト雖モ神金・小尾・小池以下ノ一党勝シテ此要害ニ籠リ遊襲後ニ夜ヲ例ニモ意ニ起テ江原衆ヲ抜ク於是他援路川上ロ狭ケヲ信州ノ通路宜シカリシト云云今其ノ城ニ臨ムニ其説殊ニ信ズベシ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山梨県の城 須玉町史 山梨県の城 日本城郭大系 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	水田・畑・境内	複郭式・空堀
2－16	又十郎屋敷	居館	須玉	下津金下原	古宮城遺　上津金村　省略　津金覚ノコトハ上原部ニ委シ禽遷守又十郎・清水越殿助モ址アリ省略（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十） 津金又十郎　屋敷ノ下ヨリ甲長ノ家領ト云伝ヘ津金覚ノコトハ上原部ニ委シ禽遷守又十郎・清水越殿助モ址アリ省略（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	須玉町史 山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	畑・宅地	方形地割

番号	名称	種別	所在地		甲斐国志ほか	その他文献	現況	備考
2－17	清水氏屋敷	居館	須玉	下津金和田	古宮城連 上津金村 省略 津金党ノコトハ上巻部二委シ芝薬守又十郎・清水縫殿助宅址ヲ指ス(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十)	須玉町史 山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	宅地	
2－18	馬場口留番所	番所	須玉	江草馬場	小森得監墓 同村岩ノ下 省略 本村城内広ヲ鏡邑ニシテ口留番所ニ処ニアリ一ハ横古屋北志・小尾ニ往ク重関ナリ 一ハ馬場、津金ニ出ヅ一ハ岩下、北山筋御岳・芦沢小屋等ニ通ズ 省略 一村内ニ関門三所マデ属タレドモ其界ニ係ル処ニモ非ザレバ御改ノ遣某ナラン事ヲ疑ヘリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十) 江草村 比志ノ南十五六町但シ八巻・平組ト云二組ハ塩岡ノ西ニ在リ若神子村ノ東北ニ当レリ城内ニ口留番所三所アリ馬場・根古谷・岩下ト云隅人ノ殷邑ナリ(甲斐国志 巻之十二 村里部第十)	山梨県史 山城探訪第15集	宅地	
2－19	獅子吼城跡	城	須玉	江草城山	獅子吼城城 江草村根古屋 武田系図ニ安芸守信満ノ二男江草兵庫助信重アリ是ヲ本村ニ於ル小名ノ人ナリ某性等ニ関アリ属ノ城ハ塩川ノ東岸上ニアリ険阻ノ孤山ナリ麓ヲ浪ト云塩川西ニモ人戸多ク東岡・小倉・大倉等ノ聚落皆神子ニ遠ス城所ヨリ一里許凡ソ東山ノ尾ヲ北路ナリ甲斐誌ニ昔川上ニ怪物アリ城陥ル時帆声如獅子飛ヒ来ル塩川ノ深潭ニ投ス因ヲ今ノ名アリ俗世獅ノ舞ト云者里中ニ入ヨリヲ歴ス獅子頭ノ呪霊ノ数物ニモ為ザス石混ストキハ必ズ疾風暴雨ト云伝アリ前列今村獅子神ノ口ニテモ亦此霊数アリ従是東ニ遠ル山内ニシテ遊カラニ牟午時ハ北生ノ奇兵小尾口ヨリ入者此嬉ニ勉テ若神子本陣ニ羽翼ス後ニ本州ノ先手乗取リ露緑ニ江草小屋トアルハ是ナリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十)	山梨県史 山梨県の中世城館跡 須玉町史 日本城郭大系 山梨県の城 甲世城郭事典 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	山林・荒内	十塁・堀景・堀切・郭
2－20	根古屋口留番所	番所	須玉	江草横古屋	小森得監墓 同村岩ノ下 省略 本村城内広ヲ鏡邑ニシテ口留番所ニ処ニアリ一ハ横古屋北志・小尾ニ往ク重関ナリ 一ハ馬場、津金ニ出ヅ一ハ岩下、北山筋御岳・芦沢小屋等ニ通ズ 省略 一村内ニ関門三所マデ属タレドモ其界ニ係ル処ニモ非ザレバ御改ノ遣某ナラン事ヲ疑ヘリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十) 江草村 比志ノ南十五六町但シ八巻・平組ト云二組ハ塩岡ノ西ニ在リ若神子村ノ東北ニ当レリ城内ニ口留番所ニ所アリ馬場・根古谷・岩下ト云隅人ノ殷邑ナリ(甲斐国志 巻之十二 村里部第十)	山梨県史 山城探訪第15集	山林	
2－21	大蔵の烽火台跡	烽火台	須玉	江草大蔵	鳥居猶 比志・江草二村ノ界ニ在リ金峯山ノ第一峰表ノ立ツ又此以候開通ニ金ノ字峯柳ノ創ケアルニ依大台数所ヲ置ク甲斐国志 巻之二十九 山川部第十) 烽火台 比志村 二所江草村界ニ一所アリ古穂坂路ナリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十)	山梨県史 山梨県の中世城館跡 須玉町史 日本城郭大系 山梨県の城 山城探訪第15集	山林	上盛・堀切・テラス・帯
2－22	小森山烽火台	烽火台	須玉	江草			山林	
2－23	岩下口留番所	番所	須玉	江草岩下	小森得監墓 同村岩ノ下 省略 本村城内広ヲ鏡邑ニシテ口留番所ニ処ニアリ一ハ横古屋北志・小尾ニ往ク重関ナリ 一ハ馬場、津金ニ出ヅ一ハ岩下、北山筋御岳・芦沢小屋等ニ通ズ 省略 一村内ニ関門三所マデ属タレドモ其界ニ係ル処ニモ非ザレバ御改ノ遣某ナラン事ヲ疑ヘリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十) 江草村 比志ノ南十五六町但シ八巻・平組ト云二組ハ塩岡ノ西ニ在リ若神子村ノ東北ニ当レリ城内ニ口留番所ニ所アリ馬場・根古谷・岩下ト云隅人ノ殷邑ナリ(甲斐国志 巻之十二 村里部第十)	山梨県史 山城探訪第15集		
2－24	比志城跡	烽火台	須玉	比志	烽火台 比志村 二所江草村界ニ一所アリ古穂坂路ナリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十)	山梨県史 須玉町史 山梨県の城 山城探訪第15集	山林	テラス・帯
2－25	五軒屋番屋跡	番所	須玉	比志		山梨県史		
2－26	前の山烽火台	烽火台	須玉	小尾塩川	烽火台 比志村 二所アリ甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十) 烽火台 比志村 二所アリ古穂坂路ナリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十)	山梨県史 山梨県の城 山城探訪第15集	山林	テラス・帯

番号	名称	種別		所在地	甲斐国志ほか	その他文献	現況	遺構
2－27	神戸烽火台	烽火台	須玉	小尾神戸		山梨県史　原始古代 山梨県の城　山城探訪第15集	宅地	消滅
2－28	和田烽火台	烽火台	須玉	小尾和田		山梨県史　山梨県の城 山城探訪第15集	山林	テラス・掘切・畝
2－29	黒森烽火台	烽火台	須玉	小尾黒森		山梨県史　山城探訪第15集	山林	
2－30	小尾口留番所	番所	須玉	増富小尾	小尾古跡　小尾村　省略　黒森ト云処ニ四界ノ口留番所アリ(甲斐国志　巻之十二　村里部第十) 小尾村　鹿山村ト本村ト州ノ極北ニシテ韮内成ク金峰ノ西北ニ界ヘリ信州ノ川上側所アヘニ里、黒森ト云処ニ口留番所アリ(甲斐国志　巻之十二　村里部第十)	山梨県史 山城探訪第15集		
2－31	信州神防壇	壇	須玉	小尾黒森		山梨県史	山林	土塁
2－32	金山金山	生産	須玉	小尾		第上町史	山林	
3－1	火の見山烽火台	烽火台	高根	浅川		定本山梨県の城	山林	堀切
3－2	浅川砦	砦	高根	浅川		山梨県の城　山城探訪第15集	山林・畑	
3　3	浅川陣敷	居館	高根	浅川	上様御城跡　浅川村　村ノ巾位道通ト云処ニ廿間許ノ平地ナリ里伝ニテツキノカミト云人居ト云ホ知何人ト云事ヲ知ラス(甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十)	山梨県の城 山城探訪第15集	山林	消滅
3－4	浅川口留番所	番所	高根	浅川	上様御城跡　浅川村　省略　本村ニ口留番所アリ下浜口ノ別荘ナリ(甲斐国志　巻之四十七古跡部第十) 初鉾坂　横山村　浅川村北境嶺山ヲ登数十丈ノ断崖アリ下ニ渓沢川ノ急流ヲ帯ブ其地図ニ近キ処ニ土時仏入都所ノ上路アリ駄馬ヲ云所ニ関門遠ノセリ後今ノ路ヲ開キ浅川ニ番所アリ(甲斐国志　巻之四十七古跡部第十) 浅川村　横金村ノ北、長沢村ノ東ニ当レリ信州平沢村ヘハ一里八町本村ニ口留番所アリ(甲斐国志　巻之十二　村里部第十)	山梨県史 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	宅地	
3－5	黒山口留番所	番所	高根	浅川東原			宅地	
3　6	伝仁王面敷	居館	高根	清里三軒屋	念場原　念又作根　省略　信州佐久郡平沢ヘ出ノ路ナリ　省略　天文八年閏八月廿日飯富兵部此処ニテ村上ガ兵ヲ防戦ヒ勝利ヲ獲ル事ナ記ス　省略　権兵ブ此原ヘ小仮ニ清次ト云者アリ新田ヲ開キ建人戸繁栄シテ急権千軒許モシ由　省略　後ニ村居跡シテ処々ヘ移戸　省略(甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十)	山城探訪第15集		
3－7	大坪砦	砦	高根	箕輪		山梨県の中世城館跡 山梨県の城　日本城郭大系 北巨摩郡誌　山城探訪第15集	山林・畑	消滅
3－8	大林屋敷	居館	高根	箕輪		山梨県の城　山城探訪第15集	山林・宅地	土塁・区画
3－9	中尾根屋敷	居館	高根	箕輪		山梨県の城　山城探訪第15集	山林・畑・宅地	土塁
3－10	権ノ木屋敷	居館	高根	箕輪		山城探訪第15集	宅地	土塁
3－11	大坪塁	居館	高根	箕輪大坪	八巻ト総介　箕輪村　里長家記ノ正四年上総介年老除屋シテ箕北城ヲ創シ八巻山ト号ス同年五月晦日築制ヘ一通ヲ給ヘリ総北蔵ヨリアリ上総介ノ名ヲ仮ニ称スト云ル巻ノ地名ハ江草村ニアリ　省略　(甲斐国志　巻之百十二　土匪部第十一)	日本城郭大系 山梨県の中世城館跡 高根町誌 山梨県史 山梨県の城 山城探訪第15集	山林	土塁・空堀
3－12	清水氏屋敷	居館	高根	箕輪久保	清水左大夫　箕輪村　(一条相続シテ今モ里正ナリ家蔵ニ大正十二年乙酉九月十日康国印秀松平修理大夫由井左衛門ヘ田口ニ於テ合戸於貴文州盧ク越ナリ由井氏ヘ家蔵ニ在陶門ノ位牌ニ見ユダリヨロノ地ヘ水州ノ所領ナシ　一通ハ天文十年壬寅月七日武田家ノ印書名アテナシ(甲斐国志　巻之百十二　土匪部第十一)	高根町誌 山梨県の城 山城探訪第15集	山林・宅地	水路

番号	名称	種別	所在地		甲斐国志ほか	その他文献	現況	周構
3 13	日輪屋敷	居館	高根	箕輪十騎屋敷	若神子 若神子村 省略 箕輪村ノ坪掘ノ下龍手指坂ノ上ニモ一構ノ屋ア リ若神子型ニ続キ関ニ箕峯流ヲ隔ツルノミ天正壬午時北条氏直ヨリ遣ア 陣取場箱セシコトナルベシ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	県史町史 高根町誌 山梨県の城 日本城郭大系 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	山林・畑	堀郭・井戸
3 14	上蔵原砦	砦館	高根	上蔵原		山梨県史 山梨県の中世城館跡 高根町誌 山梨県の城 山城探訪第15集	山林・宅地	土塁
3 15	米倉氏屋敷	居館	点在	下黒沢	米倉酒造之忌宅跡 下黒沢村志今 今呂トナル林泉ノ遠ト少巨石アリ屋敷内ニ屋敷外・又用場ト云処ニ大ナル石落アリ其下ニ五輪石塔小者数百基ア 理慶カ云伝フ壬午起請文ニ透通之忌ハ武田ノ近習ナリ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県の城 山城探訪第15集	山林・畑	土塁
3 16	新井館	居館	高根	村山北割		日本城郭大系 山梨県の城 山城探訪第15集	山林・畑・宅地	土塁・区画
3 17	白倉氏屋敷	居館	高根	村山北割		県指定	宅地	土塁
3 18	西横森墓	墓館	高根	村山北割		山梨県の城 山城探訪第15集	水田・畑・宅地	土塁
3 19	旭山墨跡	城	点在	村山北割字古城	朝日山墨跡村山北ノ割村 高十余町ノ突峯ナリ頂ニ墨痕ノ様存セリ遠ク四方ヲ隔ルヿ丘処アリ壬午ノ時北条氏直ノ所領ト云ヒ又北ニ接武田ノ領ニ対シテ当村ヲ警セシヿナリ人物ニ委シ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県史 山梨県の中世城館跡 日本城郭大系 中世城郭事典 高根町誌 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	山林	土塁・空堀・郭・虎口
3 20	川内氏屋敷	居館	高根	村山北割鈴小路	日向大神宮民地同村 御小路ト云所ニ在リ又北志村諸地ノ内ニ同人ノ神屋迹ト云処アリ北志神社大永中棟札ニモ足ニ当村ヲ警セシヿナリ人物ニ委シ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十） 坂本清二郎 村山北割村 木村ハ日向氏ノ別邑ナリ里民所蔵成宮権月十八日鳥元花押ノ書アリ寛永十五年ニ当ル日向氏ノ書ト見タリ文中ニ木村ノ旧邑ニ復スハ一般ノ記ト云ヒアント ノ書ナリ五年超越スニハ家本後ニ配ハ青沼助兵衛衆図式兵衛ハサム衆頭也（甲斐国志 巻之百十二 士庶部第十一	高根町誌 山梨県の城 山城探訪第15集	山林・畑・宅地	土塁
3 21	小宮山氏屋敷	居館	高根	村山西割	小宮山忠遠宅址 村山西割ニアリ十佐守忠房男源都左衛門忠遠浪人シテ中群小河原ヨリ移リ村人大柴浄安ノ娘ヲ娶シテ居ヒト云小宮山氏ノ事ハ人物部ニ委シ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十） 小宮山内都左衛門忠遠 村山西割村 昌泉寺ノ古碑及泉竜寺過去帳ヲ按ルニ丹後守ノ弟士佐守忠房ハ遠江野ニ属シテ壬午後中部小河原村ニ蟄居遂出家ノ法ヲ省略 其男忠遠ハ源四郎ト称ス天正十年後中部小河原村ニ於テ母大石氏ノ為ニ水宿アリ因テ村名ヲ水宿ト改ム 省略 忠遠妻ハ村山ノ人大柴遠蔵ケル妻ノ女タルヲ以テ舅ト云 省略（甲斐国志 巻之百十二 上庶部第十一）	山梨県の城 山城探訪第15集	城内	消滅
3 22	大柴氏屋敷	居館	高根	村山西割	小宮山忠遠宅址 村山西割ニアリ十佐守忠房男源四郎左衛門忠遠浪人シテ中群小河原ヨリ移リ村人大柴浄安ノ娘ヲ娶シテ居ヒト云小宮山氏ノ事ハ人物部ニ委シ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十） 大柴遠蔵 村山西割村 泉竜寺開基心急浄安定慶乍廃十七月十五日寛永七年ノ銘アルベシ浄安ハ大柴源左衛門ノ娘子遠去帳等ニ見ユタリ（甲斐国志 巻之百十二 士庶部第十一）	山梨県史 山城探訪第15集	畑・宅地	
3 23	五町田御所	居館	高根	五町田		山梨県の城	畑	
3 24	反省屋敷	居館	点在	横占屋敷		北巨摩郡誌 山城探訪第15集	水田	土塁？

番号	名称	種別	所在地		甲斐国志ほか	その他文献	現況	遺構
3－25	長沢口留番所跡	番所	高根	長沢	長沢村 東井出 高原 宿略 逸見路ノ駅場著神ノ村ヨリ二里半連連スロ留番所アリ府ヨリ八里（甲斐国志 巻之十二 村里部第十）	山梨県史 山城探訪第15集		
4－1	塚川堰	堰堰？	長坂	塚川		山梨県の城	山林	土塁
4－2	守屋民屋敷	屋館	長坂	塚川		山城探訪第15集	宅地	土塁
4－3	深草館跡	居館	長坂	大八田字南新田	深草屋址 大八田村南新屋 相伝ア昔光ノ臣滝内其屋之子孫猶内下統守ノ子下殿助ノ時始築邸宅地セント云ヘ屋造全ク存セリ 甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十） 堰内下統守 大八田村 深草城館ト云処アリ相伝ア統主下統守ハ衣ヘ主殿助、宮内左衛門ナリト云今屋長其氏皆ス（甲斐国志 巻之百十二 士庶部第十一）	山梨県史 山梨県の中世城館跡 日本城郭大系 甲州城郭事典 山梨県の城 山城探訪第15集	山林	土塁・空堀・郭
4－4	東原館	居館	長坂	大八田字東原		山梨県の城 山城探訪第15集	山林	土塁
4－5	南新居屋敷	屋館	長坂	大八田字南新居		山梨県の城 山城探訪第15集	宅地	土塁・空堀
4－6	旧中氏屋敷	居館	長坂	日野	旧中士佐守居趾 日野村 方四十間許東向ナリ古事ヲ言ヘリ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県の城 山城探訪第15集	宅地	土塁
4－7	向井氏屋敷	居館	長坂	日野	石光山及法寺 日野村 日蓮宗身延末 省略 相伝文永十一年三月日蓮依説ヨリ鎌倉ニ還ル時信州下高木ヨリ此ニ来リ日野井後ノ宅ニ宿シ 省略 日野井後ニ向井氏ヲ与ヘ （甲斐国志 巻之八十三 仏寺部第十一）	山梨県史 山梨県の城 山城探訪第15集		
4－8	植松氏屋敷	居館	長坂	長坂下条	相吉屋敷・植松屋敷・三井屋敷同下条村 共ニ方三四十間ヅツ、古事伝ハラズ又京屋・福千貨屋・富士屋アリニ堰ト云一本村ニ堰川村交界ニ信州路ヲ炎ミ東西ニ鼎峙ス相距ルコト各廿歩許六尺余周廻七八歩精小者アリ皆古墳ト見エタリ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県の城 山城探訪第15集	畑	消滅
4－9	三井氏屋敷	居館	長坂	長坂下条	相吉屋敷・植松屋敷・三井屋敷同下条村 共ニ方三四十間ヅツ、古事伝ハラズ又京屋・福千貨屋・富士屋アリニ堰ト云一本村ニ堰川村交界ニ信州路ヲ炎ミ東西ニ鼎峙ス相距ルコト各廿歩許六尺余周廻七八歩精小者アリ皆古墳ト見エタリ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県史 山梨県の城 山城探訪第15集	山林	土塁
4－10	相吉氏屋敷	居館	長坂	長坂下条	相吉屋敷・植松屋敷・三井屋敷同下条村 共ニ方三四十間ヅツ、古事伝ハラズ又京屋・福千貨屋・富士屋アリニ堰ト云一本村ニ堰川村交界ニ信州路ヲ炎ミ東西ニ鼎峙ス相距ルコト各廿歩許六尺余周廻七八歩精小者アリ皆古墳ト見エタリ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県の城 山城探訪第15集	畑・宅地	消滅
4－11	長圓屋敷跡	居館	長坂	長坂上条	長坂屋敷 長坂上条村 村東曠原中ニ在リ東西百間、南北七十間許、上古乾濕等存ス甲人ニアラ長坂長圓斎ノ宅跡ナリト云其原中ニテ遺跡ヲ拾フトアリ此モ北条勢ノ修ンテ営トナセンナルベシ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十） 長坂上衛門尉 城鑑ニ云ル衛門尉伽羅髪ンテ号長坂長閑是軽躁得罵両四十、長坂四十五人ナリ 長坂上衛門 省略 長坂氏ハ栗原ノ支族ナリト云衣冠ニ圃内斜菱ヲ用ユ系譜未分明ト雖長坂上条竜泉寺ニ竜智俊公屋士ノ牌ナアリ省略（甲斐国志 巻之九十七 人物部第六）	山梨県史 山梨県の中世城館跡 日本城郭大系 長坂町誌 山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	山林	郭・堀切・土塁・虎口
4－12	井出氏屋敷	屋館	長坂	中丸字鳥久保			宅地・畑	
4－13	中丸砦	砦	長坂	中丸	中丸旧塁 中丸村 村内ニ三方断ニタル孤山アリ其行ヅマリ方一町許ノ処即本丸ナリ北ノ原野ニ縦十余間歴然タル要害甲人ノ造見消光ノ塁ト云伝フ中丸云ヒ村名故建ニ由リ現ハト見タレバ旧造クランコト勿論アレドモ今ヤノ御対陣百余日ノ間北条勢数万打入ノ折神子以上ニ布陣タル事ナシバ処々ノ旧塁モ此時構築セシヤラン所詮思ク今様ニ見ダリ（甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	日本城郭大系 山梨県の城 山城探訪第15集	山林・畑	堀切
4－14	天白砦	砦	長坂	中丸		山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	墓地	消滅

番号	名称	種別	所在地		甲斐国志ほか	その他文献	現況	遺構
4－15	菅沼氏屋敷	居館	長坂	白井沢	菅沼隼人宅迹 白井沢村 小山ノ上ニ在リ小荒間ノ衛士カ （甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県の城 山城探訪第15集		消滅
4－16	大井ヶ森口留番所	番所	長坂	大井ヶ森	大井森村 小淵沢村ヨリ上笹尾村ヲ隔テ一里余ナリ中棒道口留番所アリ大八田二村ニテ衛之 （甲斐国志 巻之十二 村里部第十）	山梨県史 北巨摩郡誌 山城探訪第15集		消滅
4－17	小荒間口留番所	番所	長坂	小荒間	小荒間古戦場小荒間村 信州路大門嶺へ出ヅ上棒道ト云本村ニ口留番所ヲ置ク若神子ヨリ三里許村東ニ中屋敷ト云処即本陣ナリ 省略 小荒間ハ大門嶺口ニテ信州小県郡ニ出ヅ 省略 （甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十） 菅沼隼人宅迹 白井沢村 小山ノ上ニ在リ小荒間ノ衛士カ （甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十） 旧墟二所 大井ガ森村 一ハ横山ト森山ノ間 一ハ森山ノ麓ニ石浮図アリ本村口留番所ノ衛士ナルベシ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十) 小荒間村 大井森村ノ北、小淵沢村・上笹尾村ノ東、各一里許ニ在リ上棒道口留番所アリ （甲斐国志 巻之十二 村里部第十）	山梨県史 北巨摩郡誌 山城探訪第15集		消滅
4－18	小和田館	居館	長坂	大八田		山梨県史 小和田遺跡調査概報告 小和田館跡調査概報	水田	消滅
5－1	下井出塁	居館	大泉	西井出下井出		山梨県の城 山城探訪第15集	宅地	土塁
5－2	寺所塁	居館	大泉	西井出寺所		山梨県の城 山城探訪第15集	宅地	土塁・地下式坑
5－3	谷戸氏館	居館	大泉	谷戸御所		山梨県史 山梨県の城 山城探訪第15集	水田	消滅
5－4	城下方形地割	居館	大泉	谷戸城下			宅地	
5－5	城下屋敷	居館	大泉	谷戸城下		山城探訪第15集	宅地	土塁
5－6	城下塁	居館	大泉	谷戸城南		山梨県の城 山城探訪第15集	宅地	土塁
5－7	谷戸城	城	大泉	谷戸城山	谷戸城迹 谷戸村 山高数十丈北ハ八岳ノ麓ツヅキ東ニ泉川流レ西ニ町屋トテ人戸アリ南ヲ城腰ト云山足ヲ都テ城下ト唱ヘ御所村ト呼ベリ本丸方五六十歩ニ丸・三丸曲折アリ溝塁粗存ス逸見郷中最高処ニテ数里ヲ下視スベシ遠ク望バ茶臼ノ形ニ似タリトテ茶臼山トモ名ク土中ヨリ兵器・鉄具等ヲ獲ル事アリ今村人ノ所蔵古硯一面縁ニ両鶯書ヲ刻セリ鏡一枚裏ニ両月花菱紋アリ牙城ノ土中ニハ米麦粟ノ焦タルヲ得ル古伝ニ逸見源他太清光此城ニテ建久六年六月ヨリ病ミ正治元年六月十九日逝ス乃城内鎮守八幡宮ヘ配祀シ開源明神ト号ス子孫尚拠之相続ケリト清光塚ハ城山ノ西麓ニ在リ畳築ノ高一丈余上五輪石塔 基高五尺許頗ル古様ナリ人若シ触之時ハ必祟アリトテ敢近ヅク者ナシ大八田村清光寺ニ牌子ヲ置ク東鑑治承四年九月十五日武田太郎信義・一条次郎忠頼已下討得信濃国中凶徒去夜帰甲斐国宿于逸見山而今日北条殿到着其所給被示仰趣於客等云々廿四日北条殿并甲斐国源氏等去逸見山来宿于石禾御厨之処トアリ今特逸見山ト唱ル処ハ無シ地ノ惣名ヲ指テ云ナリ古時険ニ倚テ要害ヲ構ヘ本城トシテ平日居館ハ便ヨキ地ニ設ク其間一里ニ里余ヲ隔ル処モアリ所在存スル者皆爾リ殊ニ本州ハ信玄時ニ逮デ州中ニ城櫓ノ設ナキヲ以テ相誇リ他ニ武威ヲ示スノ一端トナス風俗ナレバ今時塁造ノ乾トシテ存シタルハ大抵千年以来ニ修理ヲ加ル所ナリト云ムレバ逸見山館モ谷戸ハ本城ナレドモ地僻ナル故若神子ノ通衢ニ居館ヲ構ヘシナラン(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十)	山梨県史 山梨県の中世城館跡 中世城郭事典 大泉村誌 山梨県の城 日本城郭大系 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	公園	土塁・空堀・郭
5－8	谷戸淡路守宅跡	居館	大泉	谷戸町屋	谷戸淡路守宅跡 谷戸村 道喜院ト云仏寺ノ境内是ナリ竪一町横二町即牌子モアリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十)	山城探訪第15集	境内・荒地	
6－1	島氏屋敷	居館	小淵沢	上笹尾	島屋敷上笹尾村 長廿五間横廿間島備前ナル者ノ宅迹ト云 （甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	水田・宅地	消滅
6－2	茅野氏屋敷	居館	小淵沢	上笹尾	茅野越後宅址同村久補 長二十間横十八間 （甲斐国志 巻之四十七 古跡部第十）	山梨県の城 山城探訪第15集		

番号	名称	種別	所在地		甲斐国志ほか	その他文献	現況	遺構
6－3	今井氏屋敷	居館	小淵沢	上笹尾	今井加賀守址同村福間田　長三十間横廿五間蓋国界警固ノ士ナルベシ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山梨県の城　北巨摩郡誌 山城探訪第15集	水田	消滅
6－4	笹尾岩見守屋敷	居館	小淵沢	上笹尾		山梨県の城	水田	
6－5	笹尾遠見番所	番所	小淵沢	上笹尾	篠尾塁跡　下笹尾村　本村ハ片嵐ノ北半里ニ在リ小淵沢・小荒間両道ノ番所ヘ各一里上笹尾村ニ遠観番所アリ　省略　（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十） 上笹尾村　下笹尾村ノ北十町ニ在リ従是小淵沢村・小荒間村・武川筋ノ教来石宿等ヘ各一里許大井森村ヘ十四五町此路ニ遠見番所アリ上下""村衛之（甲斐国志　巻之十二　村里部第十）	山梨県史 棒道 北巨摩郡誌 山城探訪第15集		
6－6	笹尾塁跡	城	小淵沢	下笹尾	篠尾塁跡　下笹尾村　本村ハ片嵐ノ北半里ニ在リ小淵沢・小荒間両道ノ番所ヘ各一里上笹尾村ニ遠観番所アリ大井森番所ト抗衡ス西方ハ武川筋鳥原ノ亭候ニ相並ンデ教来石ノ番所ヘモ一里余皆諏訪口・大門嶺口ノ警衛ハ応ノ西ナリ此塘ハ七里岩上ニ在リ東西ハ深山峨々ト峙チ南モ高岩壁立シ下ニ釜無川アリ北方僅ニ平地ニ接ス湟塁二三重ニシテ甚広カラズ左右ノ山腹ニモ塁形存ス本城高処五六十歩南ニ下ルコト十五六歩ニシテ洞穴アリ数十人ヲ容ルベシ鐘ツリ穴ト名ヅク此ニテ鳴鐘セバ鳥原ニテ太鼓ヲ打テ相応ズト云伝フ又加賀美遠光造立ノ薬師如来ト云ヘルハ塘ノ北二町許ニ存リ塘ノ上ヨリ西南ニ望メバ駒岳・鳳凰諸山神秀霊区尾白河・濁川糞瀬ヨリ流ドル白砂如雪白須・鳥原ノ松林布地デ青ク駅路ハ迤邐トシテ其中ニ互レリ実ニ北辺ニ最タル佳境ナリ　（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山梨県史 山梨県の中世城館跡 日本城郭大系 中世城郭事典 山梨県の城 山城探訪第15集	山林・公園・畑	上塁・空堀・郭
6－7	御所屋敷	居館	小淵沢	下笹尾		山梨県の城　山城探訪第15集	山林	
6－8	西屋敷	居館	小淵沢	下笹尾		山梨県の城　山城探訪第15集	山林	
6－9	小淵沢口留番所	番所	小淵沢	小淵沢	小淵沢村　上笹尾村ノ西ナリ信州ノ界下ノ棒道口留番所アリ　（甲斐国志　巻之十二　村里部第十）	山梨県史　北巨摩郡誌 山城探訪第15集		
6－10	殿平屋敷	居館	小淵沢	小淵沢	殿平　小淵沢村　里人伝ヘテ馬場美濃守本村番所ヲ護リシ時ノ居址ナリト云　（甲斐国志　巻之四十七古跡部第十）	山梨県の城　北巨摩郡誌 山城探訪第15集		
6－11	平井氏屋敷	居館	小淵沢	小淵沢	平井出同村　湧泉アリ其西ニ方二百歩許ノ屋敷跡存セリ里人ハ平井四郎清隆ノ居跡ト云地名ニ因リテ附会セルカ大石和筋平井村ニ清隆ノ事アリ（甲斐国志　巻之四十七　古跡部第十）	山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集		
7－1	山口口留番所跡	番所	白州	山口	上教来石村　山口　下教来石村ノ続キニテ官道ニ係レリ山口ト云処ニ口留番所アリ北十町許ニシテ甲信ノ堺ナリ釜無川ヲ隔ル本村ニモ教化石ト云アリ（甲斐国志　巻之十三　村里部第十一）	山梨県史 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	竹林	
7－2	教来石氏屋敷	居館	白州	下教来石		山梨県の中世城館跡 山梨県の城　山城探訪第15集	宅地	消滅
7－3	教来石民部館跡	居館	白州	鳥原	馬場美濃守信春　軍鑑云天文十五年武河衆教来石民部ヲ擢デ五十騎ノ士隊将トシ改馬場氏民部少輔ト称ス　馬場民部少輔　省略　馬場氏本州ニ旧有之　省略　教来石・白須・台原・二吹・逸見小淵沢等伝領ス民部信春ナル者ヲ擢用シテ命軍将ノミ元来ノ馬場氏ト見コタリ　（甲斐国志　巻之九十六　人物部第五）	山梨県史 山梨県の城 山城探訪第15集	畑	堀
7－4	鳥原城山	烽火台	白州	鳥原城山	鳥原塁　鳥原村　蓋烽火台ナリ逸見筋笹尾ノ塁ニ抗衡シテ円境ニ備フト云（甲斐国志　巻之四十八　古跡部第十一）	山梨県の中世城館跡 山城探訪第15集	山林	単郭・堀切
7－5	馬場氏屋敷	居館	白州	白須	馬場氏宅迹　白須村　字ヲ大庭ト云其下ニ厩町ト云処アリ梨柏ノ老樹アルヲ園樹ナリト云伝フ　（甲斐国志　巻之四十八　古跡部第十一）	白州町誌　山梨県の城 日本城郭大系　北巨摩郡誌 山城探訪第15集	水田・境内	消滅
7－6	根古屋	集落	白州	台ヶ原		白州町誌　山梨県の城 山城探訪第15集	畑	

番号	名称	種別	所在地		甲斐国志ほか	その他文献	現況	遺構
7 7	曲淵氏城敷	居館	白州	花水	曲淵氏古跡 片蔵村 堅百間横六十間許、東ソ堀門ニス西ハ釜無川ノ輪ニ臨ミ北ニ小深沢ト云河アリ 水ノ会スル所曽曲シテ深澤トナル此澤ノ名出此ト云曲淵氏ノ家ハ土居郎ニアリ(甲斐国志 巻之四十七 古跡郡第十)	白州町誌 山梨県の城 山城探訪第15集	宅地	消滅
7－8	深沢砦	砦	白州	花水押野		山梨県の城 日本城郭大系 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	山林	土塁
7－9	横手の関	番所	白州	横手			不詳	不詳
7－10	横手氏屋敷	居館	白州	横手古御所(御殿原)	御殿原 横手村 若池東西七町南北十六町許又殿屋敷・放御所・馬場トモアリ神古事ア伝ヘズ横手氏ノ屋敷ナルベシ(甲斐国志 巻之四十八 古跡部第十一)	白州町誌 山梨県の城 日本城郭大系 山城探訪第15集	宅地	消滅
8－1	中山砦跡	城	白州・武川	中山	中山原 三峡ノ古村ノ内ニ在リ其要ハ横手村ナリ北ニ尾白川南ニ大武川ヲ帯クル高山嶮ニ方四五十歩是形ノ如キ半地ニ降平ニシテ地又水攻堅ト云処ヨリ望ロリル三十町許ノ原路ナリ 中砦 横古屋・古町・古屋敷・走水ナド古名ヲ存ス 天正壬午陣対陣ノ時ハ武川衆留固之(甲斐国志 巻之四十八 古跡部第十一)	日本城郭大系 武川村誌 白州町誌 山梨県史 山梨県の城 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	山林	土塁・空堀・郭
8－2	金氏屋敷	居館	武川	柳沢		山梨県の城 山城探訪第15集	宅地	畑
8－3	柳沢氏屋敷	陣館	武川	柳沢	柳沢氏宅址 柳沢村 中原ト云処ニアリ(甲斐国志 巻之四十八 古跡部第十一)	山梨県の中世城館跡 武川村誌 山梨県の城 日本城郭大系 北巨摩郡誌 山城探訪第15集	水田	消滅
8－4	黒山古城	白小屋	武川	柳沢	黒山城城 同村 城沢ト云ニ在リ何人建ヤルヲ不知又寄候ニ所アリ統中紀行等柳沢村口有黒山城城左側泰田中、柳竹表識処(甲斐国志 巻之四十八 古跡部第十一)	山梨県史 山梨県の城 山城探訪第15集	山林	
8－5	鍛鬼峰	山小屋	武川	柳沢	鍛鬼峰 同村 村ノ西少シ南山中ニ在リ柳沢長篠ガ兵ヲ以テ避ケシ処ト云中略 天正工午織田勢長人ノ峠ニ及ラ泰山忽敵ノ江河ノ盛スル如ク恐レ慎キ意ヲ分散シ中深山嶺ニ御篭ル高嶺四郭・東郭・北郭版ノ入曾自陳シテ山小城ニ入ト有ハ是ナリ 中略 武士ドモ妻子足弱ヲバ峻山中ニ隠置クコトヲ定メ柳沢氏ニハ隠ルベカラズ避ル方里人ノ証レシ小屋場ナドト云処他ノ山中ニ六間ヤ有之船ニヤルベシ(甲斐国志 巻之四十八 古跡部第十一)	北巨摩郡誌	山林	テラス
8－6	実相寺屋	居館	武川	山高		山梨県の城 山城探訪第15集	境内	二重土塁
8－7	山高氏城敷	居館	武川	山高	山高氏宅址 山高村 今ニ殿屋敷ト云ニ在リ殿屋敷北地内ヘ入ル峡中紀行山高屋敷名種等ナリ(甲斐国志 巻之四十八 古跡部第十一)	日本城郭大系 山梨県の城 山城探訪第15集	宅地	堀切・土塁
8－8	牧ノ原氏屋敷	居館	武川	牧原		山梨県の城	不詳	消滅
8－9	米倉左太夫宅跡	居館	武川	宮脇大特原	米倉左太夫宅址 宮脇村 今呼ク畠ナリ(‥‥)(甲斐国志 巻之四十八 古跡部第十一)	山梨県の中世城館跡 武川村誌 山梨県の城 北巨摩郡誌	畑	消滅

参考文献

秋山敬　2003『甲斐の荘園』　甲斐新書刊行会

伊藤公明　1995『谷戸氏館跡・甲ッ原遺跡第5地点』　大泉村教育委員会

大柴弘子　2010『甲州・檜山村の歴史と民俗』　鳥影社

笹尾窯跡発掘調査団　1979『笹尾窯跡』　小淵沢町教育委員会

佐藤八郎校訂　1968『大日本地誌大系 44 甲斐國志 第1巻』　雄山閣

須玉町教育委員会　1984『須玉町埋蔵文化財調査報告第2集 中尾城遺跡・塚田遺跡』

須玉町史編さん委員会　1998『須玉町史 資料編 第1巻』　須玉町

須玉町史編さん委員会　2002『須玉町史 通史編 第1巻』　須玉町

長坂町誌編纂委員会　1990『長坂町誌 上巻』　長坂町

中山砦発掘調査団　1984『武川村中山砦発掘調査報告書』　武川村誌編纂室

萩原三雄編　1991『定本・山梨県の城』　郷土出版社

萩原三雄監修　2000『図説 韮崎・巨摩の歴史』　郷土出版社

白山城跡学術調査研究会　1999『白山城総合学術調査報告書 白山城の総合研究』　韮崎市教育委員会

白州町　1986『白州町誌』

白州町教育委員会　1989『教来石民部館跡 発掘調査報告書』　白州町教育委員会

白州町教育委員会　1990『教来石民部館跡 第二次発掘調査報告書』　白州町教育委員会

畑大介　1999「第六節『風流使者記』にみる青木氏・柳沢氏の動向と白山城」『白山城の総合研究』　韮崎市教育委員会

平山優　2011『天正壬午の乱 本能寺の変と東国戦国史』　学研パブリッシング

宮坂武男　2006『図解 山城探訪 第15集 山梨・峡北地区資料編』　長野日報社

武川村　1986『武川村誌 上巻』

村田修三編　1987『図説中世城郭事典 第二巻』　新人物往来社

山梨県　2004『山梨県史 資料編7 中世4 考古資料』

山梨県　2007『山梨県史 通史編2 中世』

山梨教育会北巨摩支会　1976『北巨摩郡誌（全）』　名著出版

山梨県教育委員会　1986『山梨県の中世城館跡―分布調査報告書―』

山梨県教育委員会　1987『山梨県歴史の道調査報告書第10集 棒道』

湯本軍一・磯貝正義編　1980『日本城郭大系 第8巻 長野 山梨』　新人物往来社

第２章　市内城館跡の現況

第１節　北杜市の地理・歴史環境と城館跡の概況

山梨県北西部の長野県境に位置する北杜市は、周囲を赤石山脈（南アルプス）、八ヶ岳、秩父山系、茅ヶ岳に囲まれた面積 602.89 平方 km、人口 4 万 9 千人程度の自治体である。主要産業は農業で主要道路沿いと JR 中央本線駅周辺で若干の商業地がみられる。市内には釜無川と須玉川、塩川が流れ、この流れに沿って主要幹線道路である国道 20 号線、141 号線、県道韮崎増富線が長野県諏訪、佐久小諸方面、甲府盆地へと走っている。

古代から近世に至る歴史的古道も知られている。古代甲斐国の国衙と信濃とを結ぶ主要道穂坂路は、現在の甲府盆地から茅ヶ岳山麓を横断して北上し、塩川沿いに信州峠を超えて現在の長野県川上村へと抜ける。穂坂路は近世には、甲信国境の小尾村を通過することから小尾街道とも呼称された。穂坂路あるいは小尾街道には塩川沿いのルートと茅ヶ岳山麓の標高の高い地点をたどるルートとがある。

中世から戦国期には、3 筋の主要街道が追加される。その第一は、須玉川、川俣川沿いに八ヶ岳東麓を抜けて長野県南牧村へと抜ける佐久往還で川沿いと丘陵地との 2 ルートが知られる。第二は釜無川沿いの甲州街道で、釜無川に沿った主要ルートとは別に八ヶ岳南麓をたどるルート、南アルプス、巨摩山地の丘陵上をたどるルートの 3 ルートが知られている。第三は武田信玄が開いたと伝えられる軍用道路「棒道」で、須玉町若神子付近で佐久往還から分かれ、八ヶ岳南麓を南東から北西へ貫いている。棒道には標高の高い地点から順に「上ノ棒道」「中ノ棒道」「下ノ棒道」の 3 筋があり、長野県富士見町へと続いている。これらの諸街道をつなぐ枝道も多く発達し、以下に報告する城館、烽火台、口留番所はこうした街道、枝道沿いの要衝あるいは開発地に分布する。

北杜市の城館等の特徴を年代ごとに概観する。もっとも古い伝承をもつ谷戸城跡は、当地を支配した平安時代末の甲斐源氏の一族、逸見清光の居城とされ、吾妻鏡にみえる「逸見口」を谷戸城跡に比定する説もあり、城下遺跡では 12 世紀代の遺物が出土している。14 ～ 15 世紀に使用されたことがわかっているが、現存の遺構は天正壬午の乱の際、後北条勢により修築されたものとする説もある。若神子古城も「逸見山」の比定地で、若神子古城を居城、谷戸城を要害城とする説もある。昭和 59 年に発掘調査も実施されたが、築城期を示す証拠は今のところ知られていない。

鎌倉時代には執権北条氏に近い御家人、二階堂氏などが地頭として大八田庄を知行している。しかし、この時期に遡る居館跡は知られていない。長坂町大八田周辺は八ヶ岳南麓のなかでも平坦な地形で水利に恵まれ、「八王」の地名が示すとおり中世には盛んに開発が行われたと推測される。大八田の最奥部の要に位置する谷戸城は、大八田の開発と不可分の関係にあったものと思われるし、小和田遺跡などの中世遺跡も知られている。

文献資料などで在地上層門の騒乱が知られる南北朝期に遡る城郭、居館も不明であるが、市内の小規模城郭には、14 世紀から 15 世紀台に築かれたものが案外多いと推測される。先述した谷戸城は、史跡整備に伴う調査の過程でこの時期の遺物が出土している。

戦国大名武田氏が甲斐国を統一し、さらに信濃攻略に取り組む 16 世紀になると、多くの城郭、居館が出現する。笹尾墨跡のようにこの時期に築城されたことが分かる例もある。

甲斐府中を中心に発達した烽火台による通信網のうち、信濃方面からの主要な通信は北杜市内の烽火台を経由したものと想定される。烽火台通信網は、主要街道に沿った山で日常の管理が可能な集落近くの峰が選ばれている。その多くが万燈火山、城山と呼ばれ、現在でも秋葉山権現が祀られているのは興味深い。須玉町東向には、地元で「マンドリヤマ」と呼ばれる山がある。「塁山」と表記し、岩場が城状に分布することに由来すると説明されることが多く、また南北朝期に甲斐国で発達した山岳信仰との関わりで曼荼羅山あるいは摩陀羅神を起源とする説もあるが、山名は「万燈火」に由来するのかもしれない。

この時期、城館跡と並んで重要な遺跡に金鉱山跡が挙げられる。城館跡の範疇から外れるために本書では詳述しないが、須玉町小尾の秩父山地には金山（かなやま）金山、須玉町東向には塁山金山が知られている。金山金山では学術調査が実施されたが、塁山金山とも戦国期の遺構、遺物ははっきりしない。

武田氏滅亡後の天正壬午の乱では、獅子吼城などの城郭が後北条氏、徳川氏の手により修築されたといわれる。若神子北城、加助屋など北条勢によって築かれたと伝えられる城郭もある。

古内には数多くの屋敷跡が知られるが、ほとんどは16世紀代から近世初頭にかけての在地領主、土豪層に関係するものである。そのなかで屋代氏、真田氏、三枝氏の屋敷跡は徳川氏家臣の遺構として注目され、規模も大きい。

第２節　市内城館跡の現況

平成23年２月から３月にかけて市内に分布する城館跡を踏査し、現況を確認した結果を市内８町に区分して報告する。各城館跡の歴史的背景などは多岐にわたるため、主に甲斐国志の記述を引用するにとどめ、参考文献は城館跡一覧にまとめておくこととする。また、知見等を記述する際にはその出典を括弧書きで表記する。

なお、城館跡の推定範囲図は、PDF型式のデータにして本書に添付したコンパクトディスクに保存してあるので参照していただきたい。図示した位置、範囲は、現存する遺構から確認されるもの、公図などで想定したもの、およその範囲しか分からないものなど、その精度はさまざまであることを記しておく。図は、北杜市地理情報システム上の筆界図、都市計画図、地形図などを基に作成している。市民の財産保護の観点から城館跡が所在する土地の地番等の情報は掲載していない。したがって、調査研究の目的で正確な位置などを知りたい場合には、北杜市教育委員会に照会していただきたい。

1-1　小笠原氏屋敷（明野町小笠原）

厚芝集落の北東端の宅地内に比定される。小笠原長清は甲斐源氏の一族、加賀美氏から分かれた小笠原氏の始祖で、源頼朝に重用された平安時代末から鎌倉時代にかけての人物である。当地には小笠原の地名が残り、平安時代後半には後院牧小笠原牧も置かれたことから、小笠原長清との関わりも想定されるが、当地に居館を構えた確証はない。中世戦国期に当地に住した土豪等の伝承もなく、詳細は不明である。

比定地の北西角、荒廃した宅地には低く幅も狭い土塁が残されているほか、居館跡を猫

わせる遺構はない。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「小笠原長清館跡小笠原村原芝組　今税地トナリ疆域分タズ福性院ノ山荒樔中ニ長清墳トテ五輪石塔ニ四基アリ又西都筋加賀美庄ニモ同名ノ村故跡等存セリ由梨ノ中郡小瀬村ノ事ハ東鑑ニ出ヅ」とある。福性院は比定地から北西へ1kmほどにある真言宗寺院で中型の五輪塔があり、隣接する長清寺にも小笠原長清墓所と伝えられる五輪塔があるが、小笠原氏との関わりは確認されない。

1-2　三井氏屋敷(明野町上手)

北組集落の北端に比定されているが、屋敷跡を窺わせる遺構は確認できない。公図上では道路で囲まれた方形地割が残る。

甲斐国志巻之百十二古蹟部第十一には、「三井市兵衛　上手村　枝村二手組ト云処ノ里正トナリ今モ村民ナリ、昔時ノ屋敷ハ用トナル千年起請文ニ同氏ノ者多ク見エタリ蓋氏ヲ似テ地名ヅクルカ比志神社大永中ノ棟札ニヨリ庶氏被官二井宮内右衛門ナル者見タリ又本村ニ永井組ト云処アリ長井氏ノ事ハ小石和筋ニ記スト記される。

1-3　屋代氏館跡(明野町上神取)

塩川左岸段丘上に位置する上神取集落は大きく東北に分かれるが、北側に位置する住宅地は、慶長年間にこの地に居住した屋代秀正(のち越中守勝永に改称)の居館とその家臣団が形成した屋敷群を踏襲したものである。屋代越中守勝永は、武田氏に属し、武田氏滅亡後は、上杉氏、徳川氏に属した。慶長十九年、巨摩郡六千石を宛行され上神取に居館を構えた。所一路氏宅には屋代越中守勝永文書が伝えられている。

上神取の臨済宗勝永寺は、勝永の菩提寺である。勝永寺は、寛永年間にこの地に農業用水堰が相次いで建設され水田に開発される際に現在地に移動したと推測され、現在の勝永寺には勝永の墓所がない。旧寺地に供養塔があるが、これは寛延三年に勝永から六世後の後裔、屋代越中守忠国が建立したものである。

嫡子忠正は勝永を継ぎ一万石を知行したが、寛永九年、駿河大納言忠長の失脚に連座して知行を失い、この地を去っている。したがって上神取の居館は、わずか18年間存続したに過ぎないこととなる。家臣の多くも屋代忠正に従い移住したとされ、土着した家臣の子孫が現在の集落を形成しているとされる。おそらく、居館跡は江戸時代前期から農地化され現在に至るものと思われる。

屋代氏居館跡は、現在宅地と水田、畑地となっているが、西側土塁の一部はほぼ原形をとどめ、北西から北辺の土塁は、畑地としてその存在を伺うことができる。居館跡は、方一町の規模と推測され、さらに北側には武家屋敷もしくは家臣団屋敷跡が付属する可能性もうかがえる。

平成23年度には居館跡を含む水田で区画整理事業が計画されており、平成20年度に実施した試掘調査では、北辺の土塁跡に沿って堀が存在することが確認されている。東辺は農地の区画と水路から推測され、南辺は道路とやや高めの石垣で区画されている。虎口は、土地区画から南辺中央部に想定され、これに合わせて南に伸びる土塁跡が残る。虎口から

主郭中央へやや入った農地は、「馬場」であったと伝承されている。虎口西側にあたる石垣はやや奥まっているが、昭和30年代後半まで塀が残っていて、地元では馬を洗うのに利用していたという。土塁の残る西辺に沿って市道が通っている。平成元年とその後に拡幅改良されたが、それ以前の道路は主郭の南西と北西の角で鉤の手状に折れ曲がっていた。

家臣団屋敷は、現在までほぼ宅地となっていて詳細は不明であるが、鍛冶屋屋敷があったと伝えられている。

居館跡から北へ1.5kmの水田中には、屋代氏が勧請したと伝えられる諏訪神社旧社地があり、「諏訪原」の小字が残る。この諏訪原には縄文時代、平安時代の集落跡があるが、平成年間の発掘調査では、近世初頭の陶器等を伴う溝跡などが検出されていて、屋代氏の入植と開発に係る可能性がある。また、居館跡と家臣団屋敷群の南にあたる勝永寺旧寺地周辺の水田は、上地改良事業に伴い平成11年度と12年度に発掘調査が実施され、多数の竪穴状遺構、土坑墓、掘立柱建物跡が検出されている。なかでも勝永寺旧寺地の北側の水田では配石墓が検出されており、勝永墓所と考えられるかも知れない。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「屋代越中守宅跡　上神取村　方一町許ノ地ナリ礎文アリ附録載スル以上慶長ロノ地頭此処ハ皆土着ナリ」、甲斐国志巻之九十八人物部第七に「屋代氏　村上源氏倉坂科郡屋代郷者 … 天文・弘治ノ頃能登守正重男志摩守正国本州ニ属ス … 屋代左衛門尉勝永 … 天正壬午幕府ニ仕へ以功加封元和九年八月三日卒 … 逸見郷上神取村ニ勝建永寺為牌所此処堡障ノ跡存セリ旧ク本州ニ住セシ趣ナリ慶長検地帳ニモ知行高ヲ記セリ … 本州甲府殿御館知渡ノ時乃洲梶山へ得替ナリト云」とある。

1-4　堤屋敷（明野町浅尾）

浅尾集落内に堤の小字と方形の地割があり、西端に土塁跡らしき篠竹林がある。応永二年に山小笠原莊朝屋郷下村図を知行された伊東祐範の名もみえ、土豪屋敷などがあっても良いと思われるが、ここに想定する屋敷跡が該当するかは現時点では不明である。ちなみに付近には、天正壬午の乱の折に徳川勢が布陣したと伝えられる陣場の地名がのこる。

1-5　小袖御崎神社（明野町上手）

小袖集落の東にある御崎神社境内は、公図でみると典型的な小規模屋館跡のような地割を残している。屋敷跡などの伝承は一切ないが、土豪屋敷が神社や寺院となる事例もあるので、ここに報告しておく。短冊状の土塁、堀跡のような地割は、現状では土塁などは確認できない。

1-6　御領平の塁（明野町下神取）

御領平集落の中央にある荒廃した宅地に東西30mほど、高さ1.2m、基底部幅2mの土塁が残る。荒廃して永らく藪になっていたが最近、集落住民により刈り払われ、踏査中に偶然発見したものである。宅地の西側で土塁が屈曲するようである。在地土豪などの伝承はないが、方形地割もおぼろげに確認される。

2-1　大豆生田砦（須玉町穂足）

大豆生田集落の南端に比定される。塩川と須玉川の合流点に近く、すぐ東側を佐久往還が通る。現在は、大豆生田集落の共同墓地と穂足地区下水道終末処理場となっており、砦跡を窺わせる遺構は確認できないが、須玉川を挟んで韮崎市藤井平の水田地帯を望むことができる岬状の高台の地形はまだ残されている。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「大豆生田砦　若神子ノ東南一四五町中間ニ玉河ヲ隔ツ壬午時北条方ヨリ砦ヲ構ヘタル処也土堤堀ノ形多存シテ疆域広ク中ニ村居アリ里人云当筋ニ七屋敷ト云アリ其一ニテ北所ハ藤巻伊予守居之今ニ間鎖井・他屋ナド云名ヲ存シタリ」とある。

2-2　藤巻氏屋敷（須玉町穂足）

大豆生田集落の多目的共同利用施設の北側に田屋、多屋前の地名が残り、この一帯に比定されている。現在は宅地と畑地になっていて、屋敷跡を窺わせる遺構は確認できない。

甲斐国志巻之百十二土庶部第十一には「藤巻伊予守　大豆生田村　村内ニ伊予守居趾ト云処アリ且同氏者多シ里長所蔵北条家ノ文書写二章本紙ハ栗原筋下神内川村里正蔵之其文ニ百貫文神取郷、七拾貫文徳行郷、夫丸一疋一人・屋敷一間云々天正十年午十月朔日堺和伯耆守奉之藤巻市右衛門殿、又於惣社領内弐拾貫文被下之云々同十一年六月六日トアレバ壬午ノ後モ猶北条家ニ属シ上野ニテ釆地ヲ給ヘルナラン藤巻ハ奈胡庄ノ村名中群筋ニ在リ彼処ニテ大豆生田ト云村里廃シテ逸見筋ヘ移リタル由人口ニ相伝ヘタリ疑ラクハ藤巻氏其党ヲ帥キテ此ニ移リシカ猶故跡部ヲ見併スベシ」とある。

2-3　真田氏屋敷（須玉町穂足）

大蔵集落内に比定される。比定地は宅地と畑地になっていて、居館西辺の土塁の一部が畑地に残されている。武田氏滅亡後に徳川氏に属し、屋代越中守勝永、三枝土佐守昌吉らとともに巨摩郡を知行した。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「真田隠岐守宅跡　大蔵村　今本村ノ神主某居之」とある。

2-4　丸茂右衛門尉屋敷（須玉町小倉）

比定地は上小倉集落内の住宅地で屋敷跡を窺わせる遺構は確認できない。比定地南に隣接した地点での住宅建築の際に工事立会いも行われているが、中世戦国期の遺構、遺物は検出されていない。

甲斐国志巻之百十二土庶部第十一に「丸茂右衛門尉　小倉村　丸茂氏ハ小笠原長清ノ後ヨリ出ヅ彼譜中ニ見エタリ身延過去帳ニ妙道、逸見ノ小蔵丸茂右衛門尉トアル是ナリ今子孫アリ身延ノ古本尊曼荼羅ヲ蔵ムト云丸茂弥兵衛ノ由緒ハ万力筋ニアリ」とある。

2-5　中尾城（須玉町小倉）

下小倉の南端、須玉川と塩川に挟まれた細長い丘陵地の高台に比定される。現在は、水田と工場となっていて、遺構は残されていない。昭和58年に水田の区画整理事業に伴い

発掘調査が実施され、掘立柱建物跡、幅9mの箱堀などが検出されている。当地から徒須玉川沿いの若神子から穂足、若神子城、塩川沿いの獅子吼城跡、茅ヶ岳山麓、韮崎市藤井平、新府城などが一望でき、砦跡には好適地と思われる。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「中尾皇塚　小倉村　方三十二歩平坦ニ築アリ高ニ間許里人清光時代ノ築ナリト云村名ニ因ニ昔毛倉ヲ置シ処カ又天正壬午時ニ増築セシナラン小笠原ノ支流小倉氏ナリ」とある。

2-6　小林茂理右衛門屋敷(須玉町東向)

甲斐国志巻之百十二古蹟部第十一に「守屋荘之勁・・・此志村ノ里長有井氏ナリ所蔵ノ巨記ニ穴山殿御娘四人由本勘介殿・守屋荘之助・小林茂理右衛門殿・有井新兵衛等ノ内儀トナル守屋荘之助殿嬪女ハ後ノ小林茂理衛門ノ内儀トナル知行三百七拾石屋敷甲州東向村ナリ・・・」とある。東向集落に屋敷跡の伝承地はなく、比定地は不明である。

2-7　三枝氏屋敷(須玉町東向)

三枝土佐守昌吉、伊豆守守昌父子は、屋代越中守勝永、真田隠岐守信幸とともに徳川氏に属し、甲斐国巨摩郡に知行地を得、須玉町東向集落に居館跡を構えた。比定地は、塩川右岸河岸段丘上、八幡神社から信光寺の間の水田とされ、八幡神社境内の北端には土塁跡が残る。須玉町史は居館跡の北辺、信光寺の東側に土塁跡があると記しているが、踏査時点では確認できなかった。三枝氏は、屋代氏と同様に寛永九年の駿河大納言徳川忠長事件に連座して失脚、改易されているから、居館の経営期間は20年に満たないものと思われる。甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「三枝氏宅跡　東向村　伊豆守守昌枝元院ヲ創ム建碑今猶シテ信光寺兼有ス土佐守昌吉此辺ヲ知行セシナリ」とある。

2-8　岩下弥三郎屋敷(須玉町境之沢)

現在の境之沢集落に囲まれた水田が比定地とされているが、屋敷跡を窺わせる遺構は確認できない。甲斐国志巻之百十二古蹟部第十一に「岩下弥三郎　境ノ沢村　里長藏ム天正壬午十一月八日御朱印ニ境之沢郷五谷其文云々トアリ弥三郎墳墓ハ同八郎兵衛門屋敷ニアリ」とある。

2-9 若神子城跡(古城)　(須玉町若神子)

若神子宿の西側、現在はふるさと農村公園になっている。「若神子大城」とも呼ばれる。

甲斐国志巻之四十七古蹟部第十に「若神子　若神子村　多麻末ニ属ス天正壬午八月ヨリ北条氏直本陣ヲ居エシ処ナリ中路四達要枢今モ此筋ノ都会ナリ逸見筋ノ駅役ヲモ勤ム相伝テ新羅三郎義光ノ城跡ナリト云・・・村西ノ山上ニ旧墨二所アリ中央ヲ大城ト称ス北ニ西河廻リ南ニ湯渓ソノ後ハ黒沢村・蔵原村ヘ続キ麓ヲ辰口ト云又西河ノ北ニ覚寺ノ後山ニ一所アリ其東北ハ籠ヲ指坂ナリ湯渓ノ南鮎河ノ北ニモ一所、下村ノ上ニモ一所アリ何モ山上広ク険ニ倚リ逸見処々ニ存シタリ・・・義清・清光以逸見氏ヲトシ太郎信義時ニ及ンデ東鑑ニ逸見山ノ館ト記スルモ居城ノ趣ニ聞エタリ谷戸ハ要害ノ城壁ニテ居館ハ此処ナラン・・・藏

原ノ村内モ皆塁湟ノ迹ナリ陣場・殿平・鐘堂等ノ地名アリ箕輪村大坪組ノ下籠手指坂ノ上ニモ一構ノ塁アリ若神子塁ニ続キ間ニ雲雀渓ヲ隔ツルノミ天正壬午時北条氏旧塁ニ拠テ陣取増築セシコトナルベシ」とあり、ここを甲斐源氏逸見清光の居城、谷戸城を要害城とみている。

昭和60年竣工の公園工事に先立ち発掘調査が実施され、浅い薬研堀が検出され、天正壬午の乱の折に北条勢により修築されたものと考えられているが、甲斐源氏の居城かどうかの情報は得られていない。若神子古城は明治時代に若神子宿を襲った大火の復興のために土取りが行われ、この時点でかなりの遺構が破壊消滅している可能性がある。

現在、公園となっている範囲の南側は松林なっていて、土塁の痕跡と思われる土手などがみられるが、縄張りを明確に把握するのは困難である。

2-10　若神子北城（須玉町若神子）

天正壬午の乱の折、北条氏直が本陣を置いたとされる城郭である。第3章に詳述する。

2-11　若神子南城（須玉町若神子）

若神子古城の南、平川を挟んだ対岸の峰上に比定される。甲斐国志「若神子」の記述にある三所のひとつで「湟塁」もあったのだろうが、昭和57年に違法な土砂採取が行われて主要な遺構は失われてしまっている。土砂採取前には、鯨沢に面した斜面に現在も残る縦堀の上に二段の平坦地があり、さらに上部に空堀により区画された二面の平坦地があったという。土砂採取後の踏査で茶臼、常滑産陶器などが採集されているという（須玉町史史料編）。現在は、山林と寺院境内になっている。

2-12　長泉寺の塁（須玉町若神子）

時宗寺院長泉寺の周辺に土塁跡、堀がある。第4章に詳述する。

2-13　源太ヶ城跡（須玉町上津金）

大和集落の北にある双峰の山頂部が城郭跡で、山頂部が市史跡に指定されている。山の北側は大門ダム湖となっている。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「源太城墟　上津金村　村ノ西北十数町海岸寺ノ山ヘ続タル最高峯ヲ云登路嶮悪ナリ頂ニ双峯アリ各数十人ヲ置ベシ東方海岸寺山界ハ山脊ヲ鑿テ道ヲ絶ツ少シ下リテ湧水アリ其下ハ広平ノ地ナリ此辺ニテ遺鏃等ヲ得ルト云東南ハ笠無・謎人・乾沢・斑山ノ諸山峨々ト聳ニ北ヨリ西ハ玉川ノ険ヲ帯波竜川・関屋坂古ノ関跡也餓鬼喉ナド云隘口アリ山頂ニ攀レバ逸見中及念場原・信州界マデ眼下ニ一覧スベシ里人ハ清光ノ城ナリト云伝フ按ニ古宮ハ居館ニシテ此処ハ要害ナリシニヤ又烽火台ニ用スベシ」とある。

双峰の山頂部は西側が源太山、東側が石尊山と呼ばれて、それぞれ平坦地と平場が開かれ、両者をつなぐ細い尾根筋には尾根切の堀が掘られている。西側の山頂には烽火台が復元されているが、現在は木材が朽ちかけている。東側の山頂には秋葉神社、石尊権現が祀られている。

2-14　津金口留番所（須玉町下津金）

下津金養泉院境内の北西角付近と思われる。この地点は佐久往還沿いの津金から塩川筋の小尾街道、江草馬場集落、比志集落へと抜ける旧道の起点にあたる。現在、口留番所の遺構はみられない。

2-15　古宮城（須玉町下津金）

下津金字御所の諏訪八幡神社境内と北側の山林、南側の旧学校敷地一帯が比定地とされる。神社境内の西辺には堀を挟んで二重の土塁が残るが、その他は遺構がはっきりしない。南側は明治時代以降、学校校舎と校庭として造成され旧状を留めていないが、平成９年に校舎を解体し農業体験交流施設を建設した際に実施した発掘調査で、神社境内西辺の堀から南へ連続する堀跡が確認されている。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「古宮城迹　上津金村　諏訪明神社地ナリ竪百十八間、横六十五間、内湟・外湟・土手形存セリ箕輪養福寺記云文亀元年三月信虎碓氷嶺ヨリ凱旋シテ於ニ次ス依称御所又殿村ト云処モアリ津金党ノコトハ士庶部ニ委シ美濃守又十郎・清水縫殿助宅址アリ本村南ハ斑山北ハ栂嶺西南玉川ノ嶮涯ナリ樫山・浅川共ニ一構ノ要害ニシテ境内又狭小ニアラズ険ニ倚テ衛ラバ外侵ノ憂ナカランカ里老ノ話壬午御対陣ノ時若神子以北ハ北条方侵入ラルト雖モ津金・小尾・小池以下ノ一党潜ンデ此要害ニ籠リ避難後ニ夜ヲ伺ヒ不意ニ起テ江草砦ヲ抜ク於是穂坂路川上コ啓ケテ信州ノ通路宜シカリシト云云今其ノ境ニ臨ムニ其説殆ンド信ズベシ」と記されている。

2-16　又十郎屋敷（須玉町下津金）

下津金下原集落の北端に比定される。現状は宅地と畑地で、屋敷跡を窺わせる遺構は確認できない。比定地の北辺に竹林があり土盛と溝があるが、これは竹林の拡大を防ぐための根切溝とその排土である。甲斐国志巻之百十二士庶部第十一には「津金又十郎　胤時ノ三男ナリ里長ノ家譜曰継跡部勘五郎名跡後号勘兵衛法名秋安浄本居士、下津金ニ長泉院ヲ建ツ石碑ニ天正八庚辰年トアリ月日ヲ刻マザルハ逆修ナリ同十八年武州岩槻ニテ又十郎戦死ノコト諸録ニ見エタリ」とある。

2-17　清水氏屋敷（須玉町下津金）

下津金和田集落、金比羅神社（藤岡神社）を祭った山の南裾に比定される。比定地には他説があるが、養泉院の清水家墓所には現当主が建立した養泉院殿天室常最居士の戒名を刻んだ清水縫殿助の供養塔があり、清水家の家伝に基づいた建立であるとすれば、屋敷跡の比定地は図示した地点となる。

2-18　馬場口留番所（須玉町江草）

江草馬場集落から下津金へと抜ける旧道の起点に伝承地がある。番所の番小屋が伝承地の南 50m ほどに移築されている。番所は移築された番小屋北側の畑地と竹林付近と思われる。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「小森将監墓　同村岩ノ下・・・本村域内広キ饒邑ニ

シテ口留番所三処ニアリーハ根古屋比志・小尾ニ往ク重関ナリーハ馬場、津金ニ出ヅーハ岩下、北上筋御岳・芦沢小屋等ニ通ズ　中略　一村内ニ関門三所マデ置タレド国界ニ係ル処ニモ非ザレバ御牧ノ遺基ナラン事ヲ疑ヘリ」とあり、また甲斐国志巻之十二村里部第十には「江草村　比志ノ南十五六町但シ八巻・平組ト云二組ハ塩河ノ西ニ在リ若神子村ノ東北ニ当レリ城内ニ口留番所三所アリ馬場・根古谷・岩下ト云彊大ノ殷邑ナリ」とある。

須玉町遺跡分布図では、馬場集落に烽火台を想定している。江草馬場集落の北にある秋葉神社を祭った山が推定地である。ここからは馬場集落が眼下にひろがり眼前に獅子吼城跡を臨むことができる。山頂部は平坦に造成され、秋葉神社の社殿、拝殿が建てられていて、烽火台跡の遺構は確認できない。

2-19　獅子吼城跡・根古屋（須玉町江草）

天正壬午の乱の折には徳川・北条の攻防戦が繰り広げられた城郭跡で、麓には根古屋集落がある。第3章に詳述する。

2-20　根古屋口留番所（須玉町江草）

江草根古屋集落の南端に比定される。根古屋集落は獅子吼城跡の西裾にあたる。現在は宅地と両組生活改善センターとなっている。比定地は、明野町浅尾集落で塩川沿いと茅ヶ岳山麓へと分岐する二筋の小尾街道をつなぐ旧道の分岐点にあたるが、口留番所跡を窺わせる遺構は確認できない。

2-21　大渡の烽火台跡（須玉町江草）

旧江草村と旧比志村の境に置かれた烽火台跡である。第3章に詳述する。

2-22　小森山の烽火台（須玉町江草）

江草岩下集落の東側、小森川が途中沢に分流する地点の山が推定地である。岩下集落からこの山の西側の細い尾根筋をたどると山頂部分には狭い平場が設けられているが、土塁、堀切はみられない。

2-23　岩下口留番所（須玉町江草）

江草岩下集落の南端が推定地である。ここは茅ヶ岳の北側をまわり観音峠を経由して、現甲斐市平見城へと抜ける山道、さらに木賊峠を経由して甲府市黒平、さらには山梨市牧丘町方面へと抜ける山道の起点にあたるが、口留番所跡を窺わせる遺構は確認できない。

2-24　比志城跡（須玉町比志）

比志集落の東側、徳泉寺北の山が「城山」と呼ばれる比定地である。徳泉寺から山道を登ると平場状の幅広い尾根筋となり山頂に至る。平坦な山頂には秋葉山の石祠と覆屋、テレビのアンテナ塔がある。山頂平坦部には低く断片的な土塁状の高まりがあるが、これが土塁の痕跡かどうかは判然としない。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「烽火台　比志村

二所江草村界ニ一所アリ皆穂坂路ナリ」と記され、二所とは大渡の烽火台と北志の城山を指すと思われる。

2-25　五軒屋番屋跡(須玉町比志)

比志神社の北側、旧道が塩川を渡る橋のたもと付近に地元で「番屋田」と呼ばれる水田があり、比定地とされる。ここから旧道をたどって斑山北側の大尾根峠を越えると下津金集落の口留番所跡に至るが、現在は自動車では通行できないほどに荒廃している。番屋跡は付近では比較的広い水田となっていて、遺構は確認できない。

2-26　前の山烽火台(須玉町比志)

塩川ダムの南側、ダム湖であるみずがき湖ビジターセンターの西側の山が比定地とされる。塩川ダム建設に伴い水没して移転した塩川集落の南にそびえる小山である。山の北側はダム建設に伴い大きく削り取られ山腹工事が施されていて、工事に伴い平成3年に山頂部の発掘調査が実施され、焼土粒子を含む土坑などが検出されたが烽火台、城郭の性格を明らかにするには至らなかった。

残る山頂部は、狭い平坦面があり、小御岳太神と浅間大神の石碑が建立されている。平場の周囲には石垣が積まれている。山頂から南の塩川筋の烽火台、北の神戸烽火台跡、黒森烽火台跡、信州峠方面を見通すことができる。

2-27　神戸烽火台(須玉町小尾)

神戸集落の南西に接する山が比定地とされる。山頂部には狭い平坦面があり天狗社の石祠が並び、その下には平場の可能性がある狭い緩斜面も認められる。神戸の烽火台跡比定地にはほかに旧増富中学校が挙げられているが、天狗社のある山からは前の山烽火台、獅子吼城跡が遠望できる。

2-28　和田烽火台(須玉町小尾)

和田集落の南の山が比定地である。和田集落から湯上ノ沢沿いに林道を上がると比定地の山の南裏に回りこみ、この林道から緩く幅広の尾根筋をたどり二つ目のピークが烽火台のある山頂である。途中、切切と思われる尾根を遮る凹地がある。山頂には狭い平坦面があるが土塁などは確認できない。和田集落には「和田の五輪塔」と呼ばれる大型の五輪塔があり、市文化財に指定されていて、在地豪族の存在がうかがえる。和田集落内には方形区画の地割も認められるが、屋敷跡の伝承はない。

2-29　黒森烽火台(須玉町小尾)

黒森集落の北側にそびえる尖り立つ三角の山が比定地とされるが、烽火台跡を窺わせる遺構は確認されない。信州峠の烽火台から和田の烽火台までの間はやや距離を隔て、見通しが確実でないため、中継地点として黒森集落内に烽火台が想定されるところである。

2-30　小尾口留番所(須玉町小尾)

黒森集落を通る旧道沿いにある巨石の付近が比定地とされる。番所を窺わせる遺構は確認できない。黒森集落を抜けて小尾街道を北へ進むと信州峠に至る。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「小尾古跡　小尾村・・・黒森ト云処ニ国界ノ口留番所アリ」とあり、甲斐国志巻之十二村里部第十には、「小尾村　樫山村ト本村ト州ノ極北ニシテ甕ノ内広ク金峰ノ西北ニ界ヘリ信州ノ川上御所平へ三里、黒森ト云処ニ口留番所アリ」とも記される。

2-31　信州峠防塁・信州峠烽火台(須玉町小尾)

穂坂路あるいは小尾街道の甲信国境、信州峠にある長大な土塁跡と、この付近に想定される烽火台跡である。第3章に詳述する。

3-1　火の見山烽火台(高根町清里)

平成3年に高根郷土研究会清里支部の有志により烽火台と確認されたという（萩原1991）。高根町浅川の東原集落と長野県南牧村との県境、樫山牧場北側の尾根上にあたる。源太ヶ城跡の眺望は良好で、南牧村平沢の平沢城付近の烽火台へと烽火通信網がつながっていったのであろう。前掲書によると浅川集落に秋葉神社烽火台があるとされているが、確認できなかった。情報提供した地元住民が浅川砦あるいは源太ヶ城跡と混同した可能性もあろうか。

3-2　浅川砦(高根町浅川)

浅川集落の北東の山頂に比定されるが、土塁、堀等の施設はみられない。

3-3　浅川屋敷(高根町浅川)

浅川口留番所跡から大門川を渡り、念場原の佐久往還へと通じる旧道沿いの畑地に比定される。比定地の南端には墓地があり、土塁状の高まりがみられ、その下の山林斜面には帯段状の平場が残る。平場が荒廃した農地か屋敷跡の付属施設かは不明である。墓地には戦国期以前と思われる宝篋印塔、五輪塔もあり、付近に土豪が存在したことを窺わせる。

3-4・3-5　浅川口留番所・樫山口留番所(高根町浅川)

旧佐久往還は、須玉町二日市場集落から分岐し、一方は小手指坂を登り笠輪、長沢の集落を通過し、弘法坂から念場原に至る。片方は二日市場から穴平を通過して津金へ至り、海岸寺東側の峠を越えて浅川、平沢の集落へと通じる。浅川口留番所は、この海岸寺峠ルートに設けられた。現在は住宅裏手の小さな畑地となっていて、その角に石造物が立っているのみである。この位置は、もう一方の佐久往還をつなぐ旧道の分岐にあたっている。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「上様御城跡　浅川村・・・本村ニ口留番所アリ平沢ヨノ別道ナリ」と伝え、また「柏崎牧　樫山村　浅川村北瑞籬山トテ高数十丈ノ断崖アリ下ニ深沢川ノ急流ヲ帯ブ其絶頂ニ近キ処ニ古時佐久郡河上路アリ船窪ト云所ニ関門遺存セリ後今ノ路ヲ開キ浅川ニ番所ヲ移ス」とある。甲斐国志巻之十二村里部第十に「浅川村　津金村

ノ北、長沢村ノ東ニ当レリ信州平沢村ヘ一里八町本村ニ口留番所アリ」とある。

現在伝えられる浅川口留番所の以前には「船窪」に関門があったという。樫山集落では、西久保川と東久保(窪)川の合流点付近にかかる関屋橋あたりが関所跡であると伝えられている（大柴 2010)。佐久往還から樫山東原集落を通り東へ山道をたどると須玉町小尾御門へと至り、小尾街道に連絡する。樫山口留番所はこの枝道をも監視したのであろう。現在は番所の遺構は確認できない。

3-6　伝仁王屋敷(高根町清里)

国道 141 号線の弘法坂を上りきって念場原の台地に入ると西側が屋敷跡の比定地である。かつて高根町郷土研究会が多数の五輪塔を発見したというが、現在は畑地と山林になっていて屋敷跡の面影はない。ただし、清里ハイランドホテルに通じる路の北側の山林には、山林の北辺と西辺に沿って土塁状の高まりが連続して見られる。その幅、高さは一定ではなく、屋敷跡の土塁とみなせるか検討が必要ではあろう。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「念場原　念又作根・・・信州佐久郡平沢へ出ヅ路ナリ・・・天文八年閏六月廿日飯富兵部此処ニテ村上ガ兵ヲ防戦ヒ勝利ヲ獲ル事ヲ記ス・・・相伝フ此原ハ中世ニ清次ト云者アリ新田ヲ開キ建人戸繁栄シテ念場千軒ト称セシ由・・・後ニ村居廃シテ処々ヘ移戸・・・」とある。

3-7　大坪砦(高根町箕輪)

西川と、その旧河道と思われ現在は箕輪堰が通り水田となっている谷とに挟まれた尾根の先端にあたるが、現在は宅地開発により砦跡の姿をとどめていない。尾根の先端部は西川と谷に挟まれて急激に痩せ尾根となり、西川沿いの侵入を監視する砦としては好適地である雰囲気を残している。

3-8　大林屋敷(高根町箕輪)

大林集落の北端の宅地に土塁が残る。かつては古民家があったようだが、踏査時点では取り壊されていた。また取り壊し、宅地整備工事のために土塁の一部が破壊され、重機の進入路がつくられていた。土塁に沿って用水路が通っているが、用水路は土塁を崩し、かつ隧道を通しているので、土塁よりも新しいものであろう。土塁北側には堀があったとされるが、現状は平坦に整地されヒノキが植林されている。

3-9　中尾根屋敷(高根町箕輪)

中尾根集落内に比定され、かつては土塁があったとされるが、現在、屋敷跡を思わせる遺構は確認できない。ほぼ方一町の方形区画の地割が認められる。

3-10　梅ノ木屋敷(高根町箕輪)

梅ノ木集落公民館から北側に比定され、集落北端の２ヵ所の宅地内に土塁が残っている。

3-11　大坪墨(高根町箕輪)

大坪集落北側の荒廃した山林と竹林に複雑に配置された土塁と堀が残っている。また住宅西側の山林には八幡社が祀られている。八幡社の北側、住宅の西側の土塁で囲まれた区画は建部神社旧社地とも伝えられているという。

この一帯は、八巻氏屋敷跡とも伝えられ、甲斐国志巻之百十二土庶部第十一に「八巻上総介　箕輪村　里長家記天正四年上総介年老除髪シテ葉光庵ヲ創シ八巻山ト号ス同年五月晦日禁制一通ヲ給ヘリ総佐藏主トアリ上総介ノ名ヲ仮ニ称スト云八巻ノ地名ハ江草村ニアリ」とある。

3-12　清水氏屋敷(高根町箕輪)

久保集落内に比定される。高低差のある土手があるが、土塁、堀は確認されない。甲斐国志巻之百十二土庶部第十一に「清水左大夫　箕輪村　子孫相続シ今モ里ニアリ家蔵ニ天正十三年乙酉九月十日康国印書松平修理大夫由井采女助ヘ与ヨニ於テ合戦拾貫文出置ク趣ナリ由井氏ハ軍鑑ニ左衛門ノ佐衆ニ見エタリ口口ノ地ハ本州ノ所謂ナシ　一通ハ天文十年極月七日武田家ノ印書名アテナシ」とある。

3-13　十騎屋敷(高根町箕輪)

韮崎市から北杜市清里方面に向かう国道141号線の通称、小手指と呼ぶ坂の西側、若神子北城へと続く八ヶ岳南麓の縁辺部に旧道跡がある。この旧道のさらに上方の山林中に平坦地が数段確認される。

3-14　上蔵原墨跡(高根町蔵原)

武田氏家臣中村氏の屋敷跡とされ、上蔵原集落の北端と西側に、集落のほぼ全体を囲い込むように土塁が残っている。北西角には、中村氏の古墓地があり、付近からかつて天文二十一年銘をもつ経筒も出土している。

3-15　米倉氏屋敷(高根町下黒沢)

志合集落集会所の北東の住宅地に想定されるが、屋敷跡の遺構は確認できない。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「米倉酒造之丞宅跡　下黒沢村志合　今呂トナル林泉ノ迹ヲテ巨石アリ屋敷内・屋敷外・又馬場トス処ニ大ナル石塔アリ其ドニ五輪石塔小者数百箇ヲ埋置クトス云伝フ壬午起請文ニ酒造之丞ハ武田ノ近習士ナリ」とあり、また甲斐国志巻之百十二土庶部第十一には「米倉造酒充　下黒沢村　志合トス処ニ屋敷跡アリ古跡部ニ出ツ壬午起請文ニ近習衆トアリ子孫幕府ニ奉仕ス」ともある。

3-16　新井館(高根町村山北割)

新井集落内の住宅地に比定される。生宅裏側の竹林には、それぞれの宅地を画するように複数本の土塁が残っていて、一体的な屋敷跡というよりも屋敷群のようである。

3-17　白倉氏屋敷(高根町村山北割)

北杜市営高根団地北西の住宅地に想定される。村山北割から長沢へ通じる道路沿いの宅地には東辺と北辺に土塁状の高まりが確認される。

3-18　西横森塁(高根町村山北割)

横森集落集会所西側の住宅地裏側に土塁が残る。二軒の宅地をまたいで宅地北辺に延びる土塁は、延長100m近く、途中で南に分岐する土塁もある。東辺土塁の横を通る市道を拡幅する際に土塁外側の堀が確認されたというが、これは誤認で付近に地下式土坑が確認されているという。

3-19　旭山塁跡(高根町村山北割)

天正壬午の乱の折、徳川勢と和議を結び佐久方面に撤退する北条勢が築いたとされる城郭である。第3章に詳述する。

3-20　日向氏屋敷(高根町村山北割)

北杜市役所高根総合支所北側、於小路の集落内に比定されるが、屋敷跡の遺構は確認できない。甲斐国志巻之百十七古跡部第十に「日向大和守居址同村　御小路ト云所ニ在リ又比志村林地ノ内ニ同人ノ陣屋迹ト云処アリ比志神社大永中棟札ニモ見ユ当村ヲ領セシ人ナリ」とある。

現在の屋敷跡比定地には坂本姓が多いが、甲斐国志巻之百十二士庶部第十一には「坂本清三郎　村山北割村　本村ハ日向氏ノ封邑ナリ里長所蔵戊寅極月十八日昌元花押ノ書アリ寛永十五年ニ当ル即日向某ノ書ト見タリ又中ニ本村ノ旧封ニ復ラバー騎前給ニ宛テントノ趣ナリ壬午起請文ニハ坂本清三郎ハ青沼助兵衛衆同武兵衛ハ七人衆頭也」とある。

3-21　小宮山氏屋敷(高根町村山西割)

宮本集落内の北端、小高い位置にある住宅付近に想定されるが、屋敷跡を思わせる遺構は残っていない。甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「小宮山忠道宅址　村山西割ニアリ土佐守忠勇男四郎左衛門忠道浪人シテ中郡小河原ヨリ移リ村人人柴浄安ノ娘ヲ嫁シテ居之ト云小宮山氏ノ事ハ人物部ニ委シ」とある。南北にやや長方形の一町程度の方形地割が認められる。

小宮山氏は、甲斐国志巻之百十二士庶部第十一に「小宮山四郎左衛門忠道　村山西割村　昌照寺ノ古碑及泉竜寺過去帳ヲ按スルニ丹後守ノ弟土佐守忠勇ハ逍遙軒ニ属シ天正壬午後中郡小河原村ニ蟄ス蓋旧封ノ地ナリ…其男四郎左衛門忠道ナリ法名推定、本村ニ居ヲ移ス此頃小河原村水害アリ因テ村居皆移転セリ…忠道妻ハ村山ノ人大柴道林ナル者ノ女タルヲ以テ倚之ト云」とある。

3-22　大柴氏屋敷(高根町村山西割)

赤刺集落の南端付近と思われるが、屋敷跡の遺構は確認できない。小宮山氏に娘を嫁した大柴浄安のほか、甲斐国志巻之百十二士庶部第十一に「大柴道林　村山西割村　泉竜寺

開基心翁浄安定庵主庚午七月十五日寛永七年ナルベシ大柴彦兵衛卜牌子過去帳等ニ見エタリ」とある。小宮氏屋敷で引用した甲要国志の記述にある大柴道林も同一人物らしい。

3-23　五町田御所（高根町五町田）

地名から中世の居館跡が想定される。御所集落の稲荷神社の南側の宅地裏、竹林内に土塁らしい遺構がみられる。地割からみると稲荷神社北側にまとまった区画がある。双方ともに確証、伝承はない。五町田公民館の南側の県道改良工事の際に平安時代の多数の緑釉陶器が出土しているが中世遺物は出土せず、御所地名に関係するのか不明である。公民館東側の念仏供養塔は天正五年の小荒間合戦の戦死者を供養したものという。

3-24　長者屋敷（高根町堤）

旭山墓地のある旭山とその北側の堤山の間の谷筋の谷頭付近の小字名は古屋敷といい、長者屋敷と伝えられる。現在はヒノキの植林地となっていて、屋敷跡の遺構は確認されない。

3-25　長沢口留番所跡（高根町長沢）

現在の国道141号線、佐久往還が長沢集落を迂回する西側の旧道沿いに比定される。口留番所を窺わせる遺構はないが、番所の門が付近の宅地に移築され保存されている。現在の国道沿いに口留番所跡を伝える表示板がある。甲斐国志巻之十二村里部第十に「長沢村　東井出　高原　省略　逸見路ノ駅場若神子村ヨリ二里半通送スロ留番所アリ府ヨリ八里」とある。

4-1　塚川塁（長坂町塚川）

塚川集落の北端、塚川の公民館の北側に東西に走る土塁が残る。高さ1.5mほどの土塁で、市道により東西に分断されている。土塁西端は塚川に下る斜面上端で南に折れて終わり、東端は畑地で恐らく消滅している。この土塁を北辺として一辺140mほどの方形地割をみることができるが、土塁が居館に伴うものかを含めて不明である。

『定本山梨県の城』は、土塁は集落の東にも南北にあったといわれ、その規模は200mを超えていたと推測される、としている。同じ塚川集落の守屋氏屋敷跡の北側にある土塁がその一部であろうか。

4-2　守屋氏屋敷（長坂町塚川）

塚川の土塁から南へ200mほど、市道が鉤の手に屈折する地点に宅地と荒廃した宅地と竹林があり、土塁が残っている。塚川塁との関係は不明である。

4-3　深草館跡（長坂町大八田）

武田氏家臣の在地豪族、堀内下総守居館跡とされる。第3章に詳述する。

4-4　東原塁（長坂町大八田）

深草館跡の南東、泉川右岸の住宅地裏の竹藪と畑原に、宅地を囲むように二重の土塁が

残る。家人の話では泉川の氾濫に備えた施設ではないかというが、付近には上の棒道、中の棒道が通り、土豪屋敷の可能性もあろう。原村屋敷、入戸野氏屋敷とも呼ばれる。

4-5　南新居屋敷(長坂町大八田)

薬草館跡南東、南新居集落東端の住宅地裏側にL字状の土塁が残る。東衣川の氾濫に備えた施設とみる向きもあるが、詳細は不明である。一方、地割をみると土塁から想定される屋敷より一回り大きい方形の地割、土塁か堀跡を思わせる短冊状の地割が認められる。

4-6　田中氏屋敷(長坂町日野)

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「田中土佐守居趾　日野村　方匝十間許東向ナリ古事ヲ實ナヘリ」と記される。甲州街道から日野集落へと通じる道路を、釜無川から八ヶ岳南麓の丘陵地へ登りきった地点に上日野集落が展開し、その一角に田中氏屋敷跡が比定されている。宅地の北と西辺にL字状に土塁が残るが、北辺の土塁は県道により削られている。

4-7　向井氏屋敷(長坂町日野)

日蓮宗石光山見法寺の境内に比定されているが、土塁、堀は確認されない。甲斐国志巻之八十二仏寺部第十一には「石光山見法寺　日野村　日蓮宗身延末・・・相伝文永十一年三月日蓮佐渡ヨリ鎌倉ニ還ル時信州下葛木ヨリ此ニ来リ日野丹後ノ宅ニ宿シ・・・日野丹後ニ向井氏ヲ与ヘ・・・」とある。

4-8　植松氏屋敷(長坂町長坂下条)

長昌院北東の小高い竹林中に長さ80mほどの土塁が残り、この辺りが屋敷地と思われるが、土塁以外に遺構は確認されていない。土塁跡から北側は大きく下がり、屋敷跡があるならば土塁跡よりも南側と思われるが、地割にも屋敷跡と思しき区画は見当たらない。

4-9　三井氏屋敷(長坂町長坂下条)

新居集落の最も高い地点に竹林があり、そのなかに土塁と堀らしい凹地、土塁に囲まれた平地が残る。北端の土塁は堀らしい凹地を挟んで二重に巡るようにも見える。地割をみても屋敷らしい方形区画は見出せない。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「相吉屋敷・植松屋敷・三井屋敷同下条村　共ニ方二四十間ヅツ、古事伝ハラズ・・・」とある。

4-10　相吉氏屋敷(長坂町長坂下条)

長坂町公民館下条分館の西側の住宅地に比定されているが、土塁、堀などは確認できない。

4-11　長閑屋敷跡(長坂町長坂上条)

武田勝頼の重臣、長坂長閑斎の屋敷跡と伝えられる。第3章に詳述する。

4-12　井出氏屋敷（長坂町鳥久保）

東向き斜面の畑地に土塁が残る。屋敷跡と思われる範囲は宅地と畑地となっていて、南辺に土塁が残り、東辺は畑地の高低差のある上手、北と西辺は道路で囲まれている。

4-13　中丸砦（長坂町中丸）

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「中丸旧塁　中丸村　村内ニ三方断ユタル孤山アリ其行ヅマリ方一町許ノ処即本丸ナリ北ハ原野ニ続キ濠壘歴然タル要害里人ハ逸見清光ノ墨ト云伝フ中丸ト云村名城濠ニ由リ起ルト見タレバ旧迹タランコト勿論ナレドモ壬午ノ御対陣百余日ノ間北条勢数万打入リ若神子以北ニ布陣タル事ナレバ処々ノ旧塁モ此時増築セシヤラン所築悉ク今様ニ見タリ」とある。大深沢川右岸の丘陵先端に比定されているが、現在、土塁などは確認できず、畑地と山林、住宅地になっている。城山の小字が残る。

4-14　天白砦（長坂町中丸）

大深沢川右岸の丘陵端の墓地に比定され、土塁が確認できる。

4-15　菅沼氏屋敷（長坂町白井沢）

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「菅沼隼人宅迹　白井沢村　小山ノ上ニ在リ小荒間ノ衛士カ」とあり、大井ヶ森の口留番所に至る中の棒道を望む高台に比定されている。現在は道路に囲まれた広い略方形の宅地と畑地になっており、土塁、堀などは確認されない。

4-16　大井ヶ森口留番所（長坂町大井ヶ森）

現在は、大井ヶ森地区公民館の敷地となっている。中の棒道沿いにあり、かつ下の棒道をつなぐ古道の交差点付近に当たるが、口留番所の遺構は残されておらず、現在は口留番所の説明板と石碑がある。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「旧墳二所　大井ガ森村　一ハ横山ト森山ノ間一ハ森山ノ麓ニ石淳図アリ本村口留番所ノ衛士ナルベシ」と記され、また甲斐国志巻之十二村里部第十にも「大井森村　小瀬沢村ヨリ上笹尾村ヲ隔テ一里余ナリ中棒道ニ留番所アリ大八日二村ニテ衛之」とある。

4-17　小荒間口留番所（長坂町小荒間）

武田氏の軍用道路とされる上の棒道沿いに設けられた口留番所であるが、昭和8年の小海線開通に伴い破壊されて消滅している。現在は、付近に口留番所があったことを示す説明板が設けられている。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「小荒間古戦場小荒間村　信州路大門嶺ヘ出ヅ上棒道ト云本村ニ口留番所ヲ置ク若神子ヨリ二里許村東ニ中屋敷ト云処即本陣ナリ …小荒間ハ大門嶺口ニテ信州小県郡ニ出ヅ」と記される。また甲斐国志巻之十二村里部第十にも「小荒間村　大井森村ノ北、小瀬沢村・上笹尾村ノ東、各一里許ニ在リ上棒道口留番所アリ」と記される。

5-1　下井出墓(大泉町西井出)

下井出集落内に道で囲まれた略方形の区画が見られる。現在は宅地となっていて、住宅裏側の竹林に土塁が残る。天正年間に若神子からこの地に土着したと伝えられる土豪、千野(茅野)氏の屋敷跡と考えられる。

5-2　寺所墓跡(大泉町西井出)

寺所集落内の宅地裏側の竹藪にL字状に土塁が残されている。土塁は幅2m、高さ1mほどが現存している。上豪屋敷を置ったものと推定される。周辺の地割にはさらに大きな方一町の方形区画が認められ、時代的に重層した居館跡とみることもできるかも知れない。

5-3　谷戸氏屋敷跡(大泉町谷戸)

逸見神社東側の水田に御所という地名が残されている。谷戸淡路守の後裔、谷戸八右衛門の屋敷跡とされている。現在は、宅地と水田になっているが、平成5年の水田の圃場整備の際に発掘調査され、水路、空濠、土塁跡、地下式土坑、掘立柱建物跡などが発見されている。第4章に詳細を記す。

5-4　城下方形地割(大泉町谷戸)

国史跡谷戸城跡の南に道路で囲まれた東西65m、南北70mほどの方形の地割があり、宅地と農地になっている。土塁などの遺構は皆無で、土豪屋敷などの伝承も知られていない。昭和56(1981)年に県営圃場整備事業に伴い山梨県教育委員会がこの地割の南に隣接する水田を発掘調査し、平安時代後半から末の集落跡、12世紀から13世紀代の青磁、白磁などを伴う可能性がある掘立柱建物跡などを検出している。また、長坂町大八田の清光寺は、もと谷戸城の南にあった信立寺という天台宗寺院が前身であったと伝えている。

5-5　城下屋敷(大泉町谷戸)

国史跡谷戸城跡の南側に想定される屋敷跡で、宅地となっている。宅地の北辺には土塁状の高まりが残っていて、南辺と東辺は高い石垣となっている。

5-6　城下墓(大泉町谷戸)

城下屋敷跡から西へ200mほど、谷戸城跡の真南に土塁跡らしい土手がある。現在は宅地と畑地になっていて、住宅の北裏には宝篋印塔と五輪塔、石祠がある。谷戸氏など土豪とのつながりを示唆する伝承もない。

5-7　谷戸城(大泉町谷戸)

甲斐源氏逸見清光の居城で吾妻鏡の「逸見山」に比定される城郭である。国史跡に指定されている。第3章に詳述する。

5-8　谷戸淡路守宅跡(大泉町谷戸)

谷戸城跡の西側、現在は道真院という寺の境内になっている。屋敷跡を窺わせる遺構は残っていないが、一部に土塁跡と思われる長方形の畑がみられる。甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「谷戸淡路守宅跡　谷戸村　道真院ト云仏寺ノ境内長サ凡壱一町横二町即神子モアリ」とあるが、甲斐国志が記す規模はむしろ字御所に比定される屋敷跡に近い。

6-1　島氏屋敷(小淵沢町上笹尾)

上笹尾島屋敷集落内に比定される。南に広がる水田から集落北側の親教八ヶ岳分院が建っている丘陵にかけての斜面が宅地に造成されていて、その西端には島屋敷集落の公民館がある。屋敷跡を窺わせる遺構は確認できない。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「島屋敷上笹尾村　長廿五間横廿間島備前ナル者ノ宅迹ト云」とある。

6-2　茅野氏屋敷(小淵沢町上笹尾)

上笹尾新井集落内に比定される。比定地は水田に囲まれた小高い丘で、屋敷跡は宅地と雑地となっている。廃屋となっている宅地の東と北辺には土塁が残るが、それ以外には遺構はみられない。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「茅野越後宅址同村久禰　長三十間横十八間」とある。

6-3 今井氏屋敷(小淵沢町上笹尾)

県道茅野小淵沢韮崎線バイパス道沿いの上笹尾宇福間田に比定される。一帯は昭和50年代以降に圃場整備された水田で遺構は消滅していると思われる。甲斐国志巻之四十七　古跡部第十に「今井加賀宅址同村福間田　長三十間横廿五間当国界警固ノ上ナルベシ」と記される。

6-4　笹見岩見守屋敷(小淵沢町上笹尾)

県道長沢小淵沢線がJR中央本線を跨ぐ滝ノ前跨線橋の東側の畑地が比定地であるが、遺構は確認できない。

6-5　笹見遠見番所(小淵沢町上笹尾)

甲斐国志巻之四十七古跡部第十、笹尾屋敷の項に「篠尾屋敷　下笹尾村　本村ハ片蔵ノ北半里ニ在リ小淵沢・小荒間両道ノ番所ヘ各一里上笹尾村ニ遠見番所アリ」とある。また甲斐国志巻之十二村里部第十に「上笹尾村　下笹尾村ノ北十町ニ在リ従是小淵沢村・小荒間村・武川筋ノ教来石宿等ヘ各一里許大井森村ヘ十四五町此路ニ遠見番所アリ上下二村衛之」とある。笹見岩見守屋敷付近と思われるが、はっきりしない。

6-6　笹尾屋跡(小淵沢町下笹尾)

諏訪上社、下社を巻き込んで、武田信虎と有力国人衆が争った舞台となり、文献資料から正確な築城時期が推測できる稀有な城郭である。第3章に詳述する。

6-7　御所屋敷(小淵沢町上笹尾)

上笹尾字堰進の円通寺周辺が比定地である。現在は円通寺境内と畑地、宅地となっているが、屋敷跡の遺構は確認できない。

6-8　西屋敷(小淵沢町小淵沢)

小淵沢小学校の南西に字西屋敷の地名が残る。現状は広い尾根上の宅地と農地で、屋敷跡の遺構は確認できない。公図上でも屋敷跡らしい地割を見出すことはできない。

6-9　小淵沢口留番所(小淵沢町小淵沢)

JR小淵沢駅前の商店街の一角、小淵沢町商工会館付近に比定される。商店街の宅地となっていて、遺構は確認できない。商店街を通る道路は下の棒道あるいは甲州街道原路にあたる。甲斐国志巻之十二村里部第十には「小淵沢村　上笹尾村ノ西ナリ信州ノ界下ノ棒道口留番所アリ」とある。

6-10　殿平屋敷(小淵沢町小淵沢)

現在、小淵沢自動車教習所となっている一帯が比定地で字名は殿平である。現在は、自動車教習所、帝京第三高校グラウンド、工場敷地、水田となっていて、屋敷跡を窺わせる遺構は確認できない。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「殿平　小淵沢村　里人伝ヘテ馬場美濃守本村番所ヲ護リシ時ノ居址ナリト云」とみえる。

6-11　平井氏屋敷(小淵沢町小淵沢)

小淵沢中学校の北東、平井出貯水池西側の山林が比定地である。貯水池の水源は平井出湧水で屋敷跡は湧水の西側となる。山林はごく緩い斜面であるが、土塁などの遺構は確認できない。甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「平井出同村　湧泉アリ其西ニ方二百歩許ノ屋敷跡存セリ里人ハ平井四郎清隆ノ居跡ト云池名ニ因リテ附会セルカ大石刑部平井村ニ清隆ノ事アリ」とある。

7-1　山口口留番所跡(白州町上教来石)

甲州街道旧道沿いの山口集落の北端に敷地がある。現在は荒廃した宅地と公園になっていて、番所の遺構は残っていない。天文十年(1546)の武田氏による伊那侵攻の際に設けられたと伝えられているという。甲斐国志巻之十三村里部第十一には「上教来石村　山口下教来石村ノ続キニテ官道ニ係レリ口ロト云処ニロ留番所アリ北十町許ニシテ甲信ノ堺ナリ釜無川ヲ限ル本村ニモ教化石ト云アリ」と記される。

7-2　教来石氏屋敷(白州町下教来石)

甲斐国志巻之四十八古跡部第十一に「教来石氏宅迹　下教来石村　上屋敷・中屋敷・裏門ナドノ名存セリ其地ニ磐井モアリ　上教来石村ニモ同氏ノ居迹トテ内杭根・外杭根・裏門ト云地名アリ　又古碑アリ明応三年庚寅ノ字ヲ見ル古事ヲ知ラズ馬場氏ノ事ハ士庶部ニ

出ヅ」とあるが、現在の下教来石集落に屋敷跡の痕跡を見出すことはできない。

7-3　教来石民部館跡(白州町鳥原)

鳥原集落北東の扇状地形の台地上に殿畑の地名が残る。昭和63年と平成元年に桑畑の転作に伴い館跡の分布状況を確認するために部分的な発掘調査が実施され、空堀等が検出されている。平成9年度から平成14年度にかけて、周囲の畑地で区画整理が施工され、これに伴い発掘調査が実施されている。調査の詳細は第4章に記す。

区画整理の折、居館跡の南半分は農村公園として市有地化され、遺構の保存が図られ、現在、土橋、空堀などが確認される。北半分は農村活性化施設が建設されている。平成21年度には農道整備工事の残土仮置場として利用された農村公園内で、残土処分のために部分的に館跡が掘削、破壊される事案が生じた。

館跡からは、西側の鳥原城山、万燈火山を遠望することができる。

馬場美濃守信春は、甲斐国志巻之九十六人物部第五に「軍鑑云天文十五年武河衆教来石民部ヲ擢デ五十騎ノ士隊将トシ改馬場氏民部少輔ト称ス　馬場民部少輔　中略　馬場氏本州ニ旧有之　中略　教来石・白須・台原・三次・逸見小淵沢等伝領ス民部信春ナル者ヲ擢出シテ命軍将ノミ元来ノ馬場氏ト見エタリ」とある。

7-4　鳥原城山(白州町鳥原)

鳥原集落の西端、石尊神社裏山の頂部にあたる。甲斐国志巻之四十八古跡部第十一には「鳥原塁　鳥原村　嶺烽火台ナリ逸見筋笹尾ノ塁ニ坑衝シテ国境ニ備フト云」とある。

山腹にある石尊神社本殿の南の細い尾根筋をたどって登ると一つ目の山頂に至る。ここが城山である。ここには土塁状の高まりと平場があり、山頂手前には二段ほどの小さな平場も確認され、石祠がある。

さらに尾根をたどると万燈火山に至る。二級三角点周辺には土塁状の高まり、平場が確認される。石尊神社からここに至る尾根筋は侵食された痩せ尾根で、各所に尾根切り状の凹地がある。万燈火山からさらに尾根筋を数十メートル進むと広い平坦な地形が広がる。城山と万燈火と呼ぶ山の位置に混乱があるようだが(白州町1986、宮坂2006)、双方ともに一体の施設として機能していたと思われる。

甲斐国志には、笹尾塁址で鐘を衝けば鳥原で太鼓で応えると記されているが、実際、万燈火山頂からは笹尾塁址が遠望できる。

7-5　馬場氏屋敷(白州町白須)

教来石氏あるいは後の馬場氏の居館跡の伝承地は、鳥原屋敷(教来石民部館跡)、教来石氏屋敷を含め4ヶ所があり、白須集落の東にある白元寺境内も馬場氏屋敷跡と伝承されている。境内と墓地が整備された現状では居館跡の遺構が皆無であるが、北端に走る小さな谷地形沿いの墓地には土塁の名残のような地形が観察される。白元寺記によると天正三年馬場美濃守信房の開基という(白州町1986)。

白須地内のもう一つの比定地は、現在、北杜市立白州保育所となっている。居館跡の遺

構は皆無である。

甲斐国志巻之四十八古跡部第十一には「馬場氏宅迹　白須村　字ヲ大庭ト云其下ニ殿町ト云処アリ梨樹ノ老樹アルヲ圍樹ナリト云伝フ」とある。現在でも国道20号線の西側、白州保育所付近に大庭、殿町の小字名が残っているほか、白須地内に十屋敷の地名もあるという(白州町1986)。

7-6　根古屋(白州町台ヶ原)

釜無川の支流、尾白川右岸の河岸段丘上の字名が根古屋という。昭和59年度に一帯が圃場整備され、縄文時代中期の集落跡が発掘調査されているが、中世戦国期の遺構は一切確認されない。現在は水田と畑地になっていて、南西には中山砦跡のある中山がそびえる。

7-7　曲淵氏屋敷(白州町花水)

曲淵氏は武田氏家臣とされる。甲斐国志巻之百十二古蹟部第十一に「曲淵助之丞吉重　片蔵村　曲淵ト云地名ハ本郡中郡筋ニアリ軍鑑云曲淵荘左衛門ハ初鳥若ト云坂垣信方ノ僕ナリ幼ヨリ心トナシ後ハ山県氏ニ属シ勇功世ニ顕ハレタリ天正壬午年幕府ニ謁シ武川衆並ニ召出サル編年集成云天正十八年秋州中村筋ニテ荘左衛門吉景ニ五百石賜ハル本村清泰寺ニ位牌ヲ置ク広略院良墨玄張居士文禄三午年十一月廿二日終ス」とある。

その居館について甲斐国志巻之四十七古跡部第十には、「曲淵氏古跡　片蔵村　堅石間横六十間許、東ヲ端門トス西南ハ釜無川ノ瞼ニ臨ミ北ニ小渓沢ト云河アリ二水ノ会スル所彎曲シテ深潭トナル曲淵ノ名由此トス曲淵氏ノ事ハ士庶部ニアリ」と記される。

比定地には、小渓沢川右岸の若宮八幡社境内とする説と、小渓沢川左岸の住宅地とする説とがあるが、ともに土塁、堀などの遺構は明瞭ではない。左岸の宅地と畑地には土塁跡かと思われる竹藪が残り、屋敷跡の規模も甲斐国志に近い。

集落内の霊長山清泰寺には曲淵氏菩所とされる石祠、宝篋印塔、五輪塔がある。当地は、甲州街道と甲州街道原路あるいは下の棒道をつなぐ花水坂沿いである。

7-8　深沢砦(白州町花水)

甲州街道と甲州街道原路あるいは下の棒道をつなぐ花水坂沿いにある。八ヶ岳南麓の台地が釜無川と大深沢川によって侵食されて、張り出した岬状の地形になっていて、砦跡はその突端に設けられている。現在は荒廃したアカマツ林となっているが、数段の平場と土塁が残っている。ここからは、花水坂から釜無川を渡り甲州街道へと至る路筋、中山砦跡と鎧の根古谷が一望できる。

7-9　横手の関(白州町横手)

横手本村集落に「本村の関のサクラ」と呼ばれるエドヒガンザクラの古木がある。この「関」の地名から関所などが置かれたと推測されている(白州町1986)。横手は甲州街道(逸見路)の枝道が中山砦跡の西側を迂回するルートにあたるが、遺構は確認されない。

7-10　横手氏屋敷（白州町横手）

横手集落内にあり、宅地と畑地となっている。一条氏屋敷跡に良く似た堀が屋敷跡の南辺に設けられている。東辺と北辺にも農業用水があり、かつては三方を堀がめぐっていたらしい。土塁は確認されない。南東隅には小さく張り出した石垣がある。

甲斐国志巻之四十八古跡部第十一には、「御殿原　横手村　芝地東西七町南北十六町許リ又殿屋敷・故御所・馬場ト云アリ皆古事ヲ伝ヘズ横手氏ノ居址ナルベシ」と記される。

8-1　中山砦跡（武川町・白州町）

釜無川右岸、支流の大武川と尾白川に挟まれた中山の山頂に築かれた城郭である。第3章に詳述する。

8-2　一条氏屋敷（武川町柳沢）

大武川右岸の柳沢集落内にあり、宅地となっている。屋敷跡と思われる宅地の東辺には堀があり、北側には農業用水が通っている。土塁はみられない。

8-3　柳沢氏屋敷（武川町柳沢）

武田氏家臣から徳川幕臣となった武川衆柳沢氏の屋敷跡には、二ヶ所の伝承地がある。そのひとつは、柳沢集落の東に広がる水田地帯にある。圃場整備されており屋敷跡を窺わせる地形は失われている。もうひとつは、柳沢集落内の柳沢寺周辺である。宅地と畑地となっているが、やはり屋敷跡の遺構は確認されない。北側を流れる大武川を渡ると中山砦跡に至る。甲斐国志巻之四十八古跡部第十一には、「柳沢氏宅址　柳沢村　中原ト云処ニアリ」とのみ記されるが、中原の地名は残っていない。

8-4　星山古城（武川町山高）

甲斐国志巻之四十八古跡部第十一に「星山故濃　同村　城沢ト云ニ在リ何人濃ナルヲ不知又半候一所アリ峡中紀行平柳沢村ニ有星山故城・・・」とある。甲斐国志では「何人壘ナルヲ不知」とあるが、餓鬼嗌とともに柳沢氏の小屋とみる説がある（畑 1999）。城跡は大武川の支流、石室川の右岸の巨摩山地が真原集落の緩斜面に接する先端部に築かれていて、真原集落からよくみえる。ガレ場が間近に迫る山頂部には平坦地があり、奥山へとつながる尾根筋の鞍部には尾根切の堀がある。

8-5　餓鬼嗌（武川町山高）

甲斐国志巻之四十八古跡部第十一が「餓鬼嗌　同村　村ノ西少シ高山中ニ在リ柳沢兵部ガ氏戈ヲ避ケシ処ト云・・・天正壬午織田勢乱入ノ時ニ及テ泰山忽崩レ江河ノ溢スル如ク恐レ慄キ東西ニ分散シテ深山岩陰ニ潜匿ル軍艦吉都・真都・北帯那ノ人皆自焼シテ山小屋ニ入ト有ハ是ナリ・・・武士ドモ妻子足弱ヲバ皆山中ニ隠匿クコトナリ必ズ柳沢氏ニハ限ルベカラズ避乱テ里人ノ匿レシ小屋場ナドト云処他ノ山中ニモ間々有之類ニナルベシ」と記す餓鬼嗌は、柳沢氏が武田氏を滅ぼした織田軍から逃れるために籠ったところという。

現地は黒山古城からさらに山中に分け入った先にあり接近するにも困難である。大きな岩の岩陰が比定地とされている。

8-6　実相寺墓(武川町山高)

実相寺は、武川衆として武田氏に属した山高氏の居館跡と伝えられ、甲斐国志巻之八十四仏寺部第十二には、「大津山実相寺　山高村　…山高五郎左衛門ノ宅跡ニテ其鎮守稲荷並老木柳樫アリ…」と記される。

境内の西側には土塁の一部が残存し、本堂西側にも土塁状の高まりが確認されるが、そのほかの遺構はみられない。北側と西側には農業用水が流れ、かつて堀が巡っていたことを感じさせる。実相寺白緒には、山高氏荏の一条氏居城跡と伝えられるという。

8-7　山高氏屋敷(武川町山高)

実相寺に比定される山高氏居館跡であるが、甲斐国志巻之四十八古跡部第十一には、「山高氏宅址　山高村　今ニ殿屋布ト云産神社地内ヘ入ル候中紀行山高墨処名標平トアリ」とあり、産神社地内に比定する。山高集落の西端にある幸魂社周辺か、もしくはその西側にある方形地割かと思われるが、現在、神社境内、宅地、畑地となっており、居館跡の遺構は皆無である。山高集落が展開する河岸段丘面の最上部にあたり、山高氏菩提寺高龍寺も至近である。

8-8　牧ノ原氏屋敷(武川町牧原)

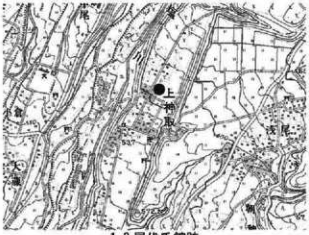
比定地不詳ある。大武川と釜無川の合流点にあたる牧原と下三吹付近は、たびたび洪水の被害を蒙ってきた。記録に詳しい昭和34年の相次ぐ台風水害でも壊災しているため遺構は消滅したものと思われる。武川村誌は、ほかに牧原の武田家遺臣風間氏の名も挙げている。

8-9　米倉左太夫宅跡(武川町宮脇)

現在の国道20号線の東側、宮脇集落内に比定されるが、全体が宅地化され、屋敷跡の遺構は全く確認できない。甲斐国志巻之四十八古跡部第十一には、「米倉左太夫宅址　宮脇村　今尽ク畠トナレリ…」と記される。

1-1 小笠原氏屋敷

1-2 三井氏屋敷



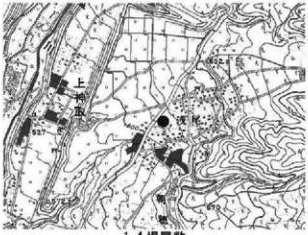
1-3 屋代氏館跡

1-3 寺前遺跡の配石墓

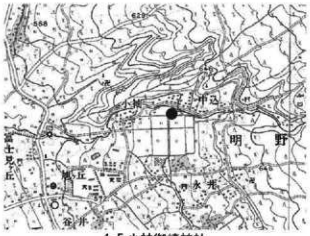
1-3 屋代氏館跡の堀と土塁基底部

1-3 諏訪原遺跡の溝とイヌ形土製品

1-3 諏訪原遺跡の溝と陶器出土状況



1-4 堤塁敷



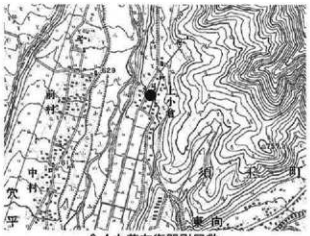
1-5 小袖御崎神社

1-6 御領平の墓

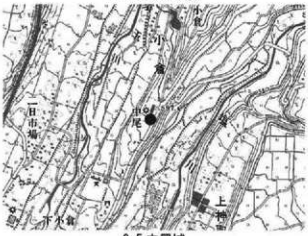
2-1 大豆生田砦

2-2 藤巻氏屋敷

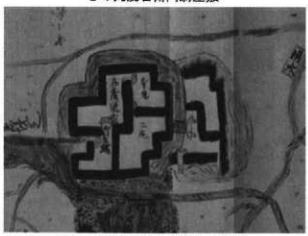
2-3 真田氏屋敷

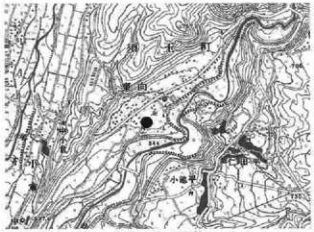


2-4 丸茂右衛門尉屋敷



2-5 中尾城

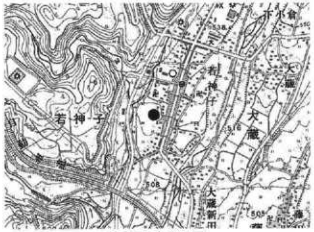

2-5 中尾城古絵図（部分・拡大）



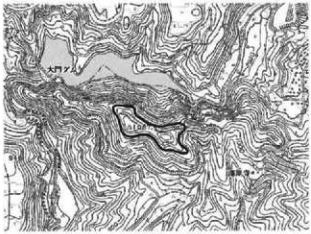
2-7 三枝氏屋敷

2-8 岩下弥三郎屋敷

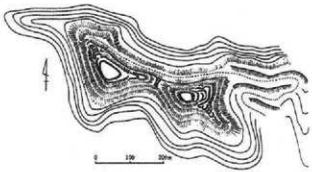
2-9 若神子城跡(古城)(上) 2-10 北城(中) 2-11 南城(下)



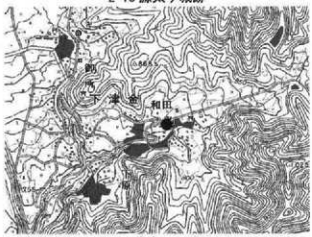
2-12 長泉寺の塁



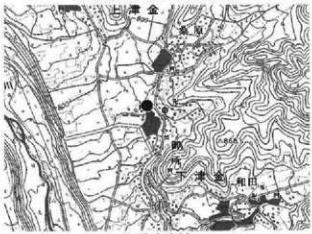
2-13 源太ヶ城跡



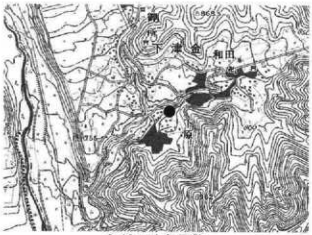
2-13 源太ヶ城跡　須玉町史



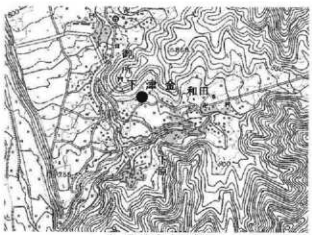
2-14 津金口留番所



2-15 古宮城

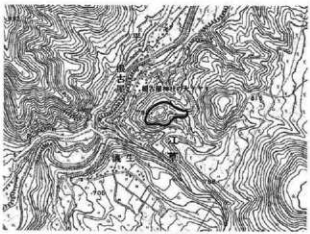


2-16 又十郎屋敷



2-17 清水氏屋敷

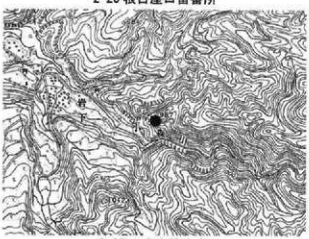
2-18 馬場口留番所



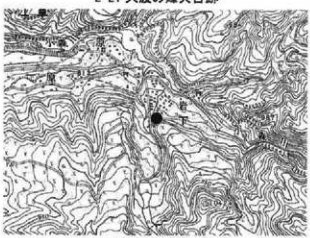
2-19 獅子吼城跡

2-20 根古屋口留番所

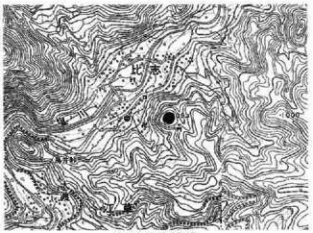
2-21 大渡の烽火台跡



2-22 小森山烽火台



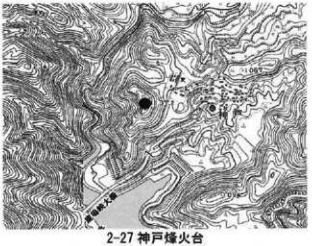
2-23 岩下口留番所

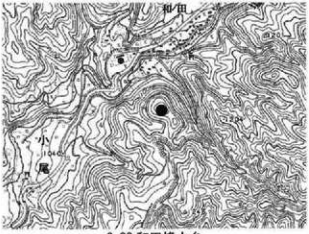


2-24 比志城跡

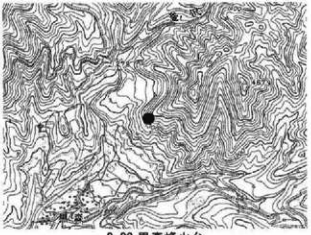
2-25 五軒屋番屋跡

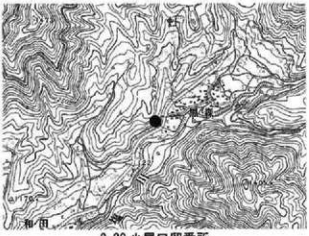
2-26 前の山烽火台


2-27 神戸烽火台

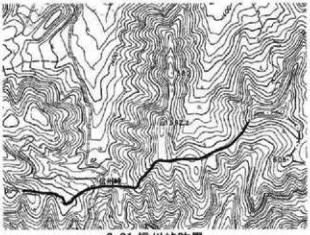


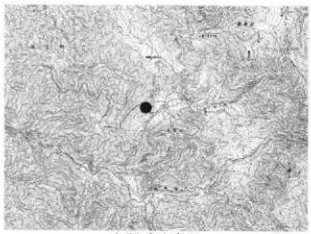
2-28 和田烽火台


2-29 黒森烽火台

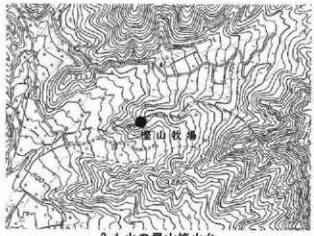


2-30 小尾口留番所

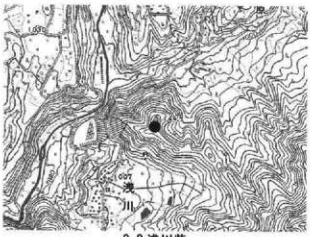

2-31 信州峠防塁



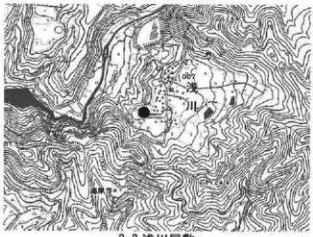
2-32 金山金山



3-1 火の見山烽火台



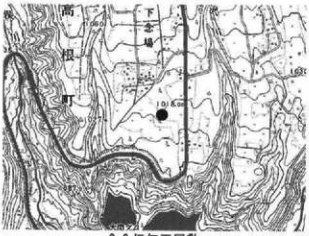
3-2 浅川砦



3-3 浅川屋敷

3-4 浅川口留番所

3-5 樫山口留番所



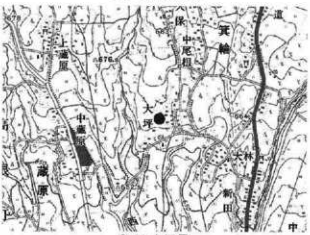
3-6 伝仁王屋敷

3-7 大坪砦

3-8 大林屋敷

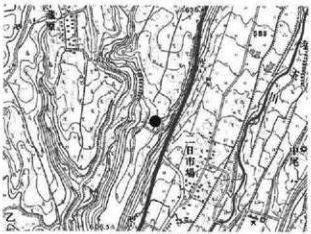
3-9 中尾根屋敷

3-10 梅ノ木屋敷



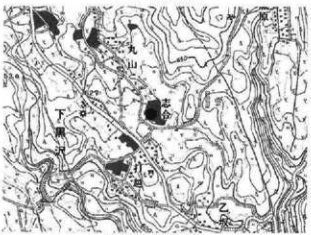
3-11 大坪塁

3-12 清水氏屋敷



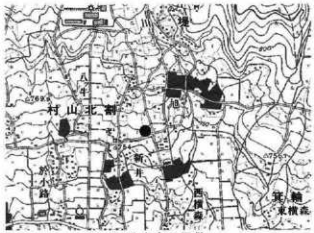
3-13 十騎屋敷

3-14 上蔵原塁



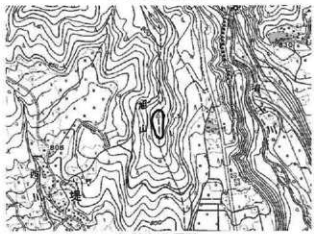
3-15 米倉氏屋敷

3-16 新井館

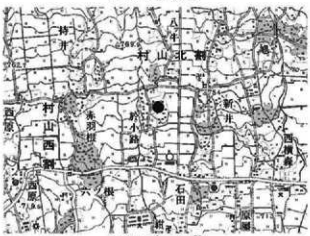


3-17 白倉氏屋敷

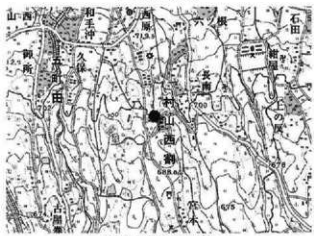
3-18 西横森塁



3-19 旭山塁跡



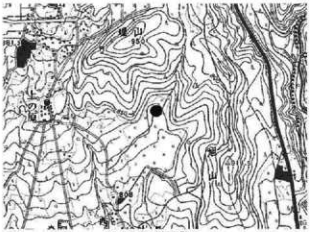
3-20 日向氏屋敷



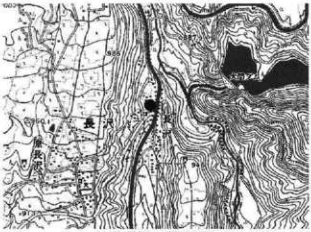
3-21 小宮山氏屋敷

3-22 大柴氏屋敷

3-23 五町田御所

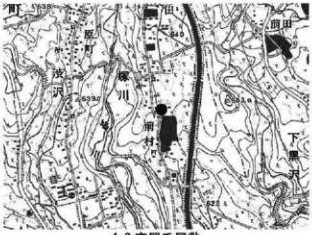


3-24 長者屋敷

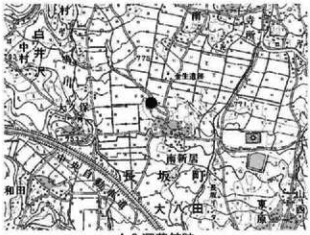


3-25 長沢口留番所跡

4-1 塚川墓



4-2 守屋氏屋敷



4-3 深草館跡

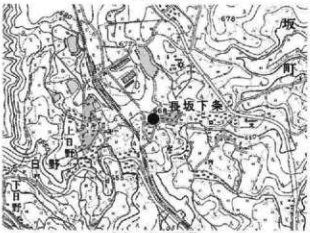
4-4 東原墓

4-5 南新居屋敷

4-6 田中氏屋敷

4-7 向井氏屋敷

4-8 植松氏屋敷



4-9 三井氏屋敷

4-10 相吉氏屋敷

4-11 長関屋敷跡

4-12 井出氏屋敷

4-13 中丸砦

4-14 天白砦

4-15 菅沼氏屋敷

4-16 大井ヶ森口留番所

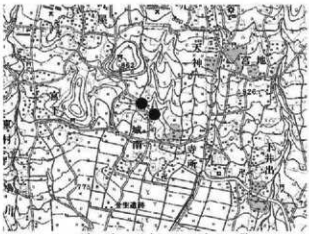
4-17 小荒間口留番所

4-18 小和田館

5-1 下井出墓

5-2 寺所墓

5-3 谷戸氏屋敷



5-4 城下方形地割・5-5 城下屋敷

5-6 城下墓

5-7 谷戸城

5-8 谷戸淡路守宅跡

6-1 島氏屋敷

6-2 茅野氏屋敷

6-3 今井氏屋敷

6-4 笹尾岩見守屋敷

6-6 笹尾墓跡

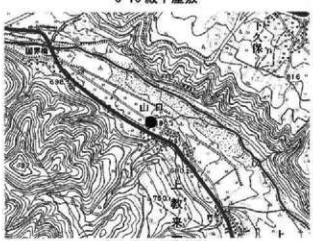
6-7 御所屋敷

6-8 西屋敷

6-9 小淵沢口留番所

6-10 殿平屋敷

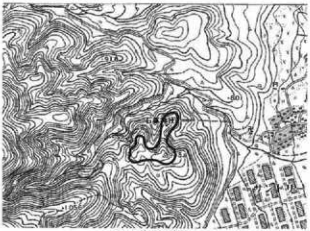
6-11 平井氏屋敷



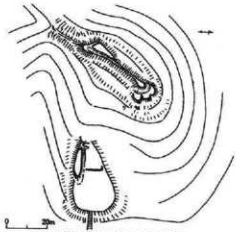
7-1 山口口番留所

7-2 教来石氏屋敷

7-3 教来石民部館跡

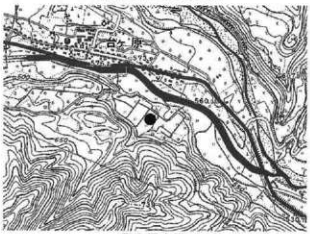


7-4 鳥原城山

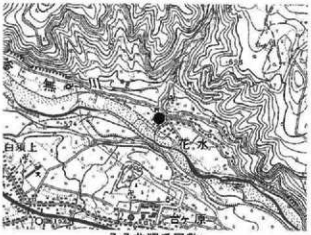


7-4 鳥原城山（山梨の城）

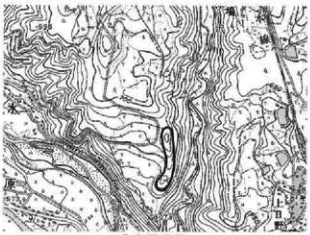
7-5 馬場氏屋敷　保育所地点（左）白元寺地点（右）



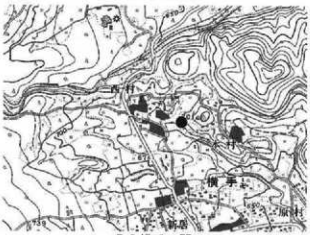
7-6 根古屋



7-7 曲淵氏屋敷



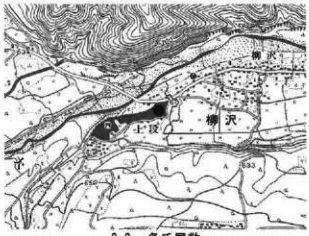
7-8 深沢砦



7-9 横手の関

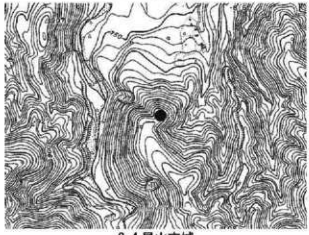
7-10 横手氏屋敷

8-1 中山砦跡

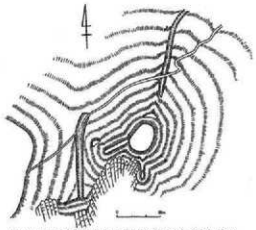


8-2 一条氏屋敷

8-3 柳沢氏屋敷



8-4 星山古城



8-4 星山古城（武川村分布調査報告書）

8-6 寒相寺墓

8-7 山高氏屋敷

8-9 米倉左太夫宅跡

第３章　主要な城館跡

市内に分布する城館跡のうち、史跡に指定されている城館跡、特に規模が大きく、歴史上重要な位置を占める、あるいは遺構の保存状況が良好な城館跡を本章で報告する。

第１節　獅子吼城跡（須玉町江草）

獅子吼城跡は、須玉町江草地内、塩川左岸に位置する。標高788mの小山上に築かれた城郭で、城山の小字名がある。麓には根古屋集落があり、主郭付近には駒ヶ入集落がある。昭和63年に旧須玉町が主郭部分のみを史跡指定し、現在、北杜市指定史跡に引き継がれている。平成になって後、獅子吼城跡周辺の圃場整備に伴い新たに道路が新築され、主郭西側と北側の山裾が造成されている。また平成17年には駒ヶ入湯戸集落間の集落道が拡幅改良され、東側と南側の山裾が造成されている。

獅子吼城跡は、甲斐国志巻之四十七古跡部第十に「獅子吼城墟　江草村根古屋　武田系図ニ安芸守信満ノ三男江草兵庫助信泰アリ蔵シ本村ニ拠ル応永中ノ人ナリ見性寺ニ牌子ヲ置ク墟ハ塩川ノ東涯上ニアリ険阻ノ孤山ナリ麓ヲ湟ト云塩川西ニモ人戸多シ東向・小倉・大倉等ヲ原テ岩神子ニ達ス墟所ヨリ一里許凡テ斑山ノ尾サキ岩路ナリ里談ニ昔山上ニ怪物アリ城陥ル時吼声如獅子飛デ塩河ノ深潭ニ没ス因テ今ノ名アリ後世獅子舞ト云者里中ニ入コトヲ禁ズ獅子頭ハ児童ノ翫物ニモ為サズ若犯ストキハ必ズ疾風暴雨ストゝ云伝フ北山筋阿寺村獅子岩ノ辺ニテモ亦此里談アリ蓋是東ニ連ル山内ニシテ遠カラズ壬午時ハ北条ノ奇兵小尾口ヨリ入者此墟ニ拠テ若神子本陣ニ羽翼ス後ニ本州ノ先手乗取レリ諸録ニ江草小屋トアルハ是ナリ」と記され、14世紀末から15世紀初頃の応永年間には武田一族の居城となっていたと伝えられている。

このように、室町期には築城されていた可能性がある獅子吼城跡であるが、天正壬午の乱では徳川北条両勢力が城を争っており、この折に双方によって大きく改築された可能性も考えられる。また、烽火台としての機能も有しており、山頂の主郭からは、北に大渡の烽火台など塩川沿いの烽火台群、南は中尾城跡から若神子城跡、遠く新府城跡を望むことができる。

獅子吼城跡の特徴は、城が築かれた小山が、東にそびえる茅ヶ岳、金ヶ岳に連続する黒富士火山の活動により形成された安山岩類を基盤としている点にある。この安山岩類は獅子吼城跡周辺では板状節理が発達し、いわゆる鉄平石状を呈する。この石材を用いて石垣が築かれ、獅子吼城跡独特の景観を醸し出している。

駒ヶ入集落から主郭に向かうと、まず自然地形による土橋状の細い尾根筋を通り、出構えのような3段の平坦地(図①～③)に入る。この平坦地は自然地形をいくらか人工的に削平して作出しているようである。平成17年に駒ヶ入集落道の拡幅改良工事の際に、この最初の出構え①の南端でトレンチ調査を実施した。遺物は出土せず年代観ははっきりしないが、上層観察から人工的な削平を窺うことができた。②、③には土塁と思われる低い高まりが認められ、両者の間には南北に堀切が設けられている。

道を遮るように短い土塁が設けられた④地点から主郭に向けて勾配が徐々にきつくなる。ここから北に向かって帯郭がのびる。さらに土塁に沿った堀の底を進むと⑤から主郭

に向かって小さな平坦面が連続する。

主郭の東端には虎口の切れ目がある土塁があり、石碑などが建てられている。西端は土塁の痕跡かと思われる低い高まりがある。主郭の西側の尾根筋は湯戸集落へと延びるが、ここにも4段ほどの平坦面が認められる。主郭の南側には帯郭が発達している。

④から主郭に向けて堀の底をたどると⑥に延びる土塁が分岐する。また北へ延びる土塁状の高まりが山裾へと下っている(⑦)。この先には井戸か炭焼き窯か、その機能がよく分からない石積みの施設がある。城に伴うのか、後代のものかも不明である。

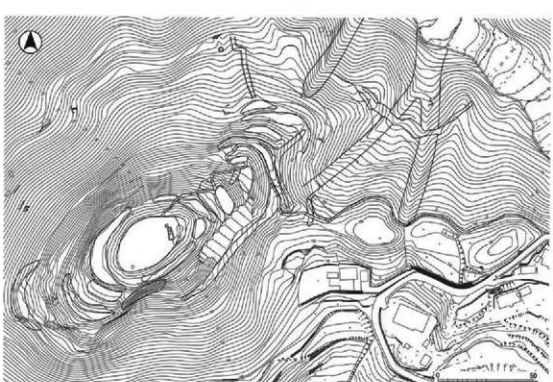
おそらく自然地形を利用した堀切が特に主郭の北東側の山肌にみられる。斜面の途中には堀切どうしを連結する通路状の平坦面が認められ、特に⑧地点では尾根切状の施設がみられる。

④地点の南側、現在、廃屋となった宅地との間にも数段の平坦面がある。これは荒廃した農地なのか、城の施設なのか判断がつかない。

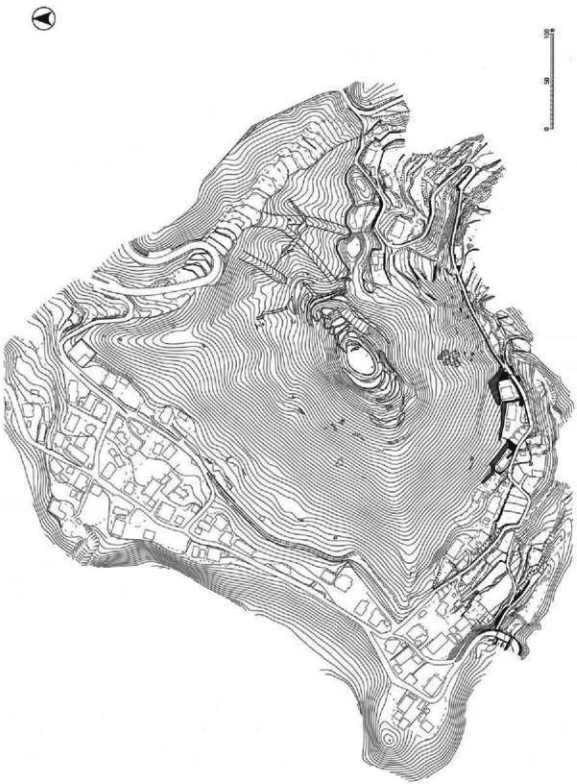
獅子吼城跡は全体的に東側への防御が充実している。駒ヶ入集落がここに位置していることも興味深い。獅子吼城跡の東側には、現在の甲府市と信州峠とを結ぶ古道、穂坂路あるいは小尾街道の枝道が通り、中世の板碑も残っている。天正壬午の乱では、徳川側についた津金衆などの旧武田遺臣が茅ヶ岳山麓の北側を回り込んで獅子吼城を守る北条方を攻めている(平山 2011)。

獅子吼城跡要図(1/2000)

獅子吼城跡要図（1/2000）



獅子吼城跡現況平面図（主要部 1/2000）



獅子吼城跡現況平面図(主要部 1/4000)

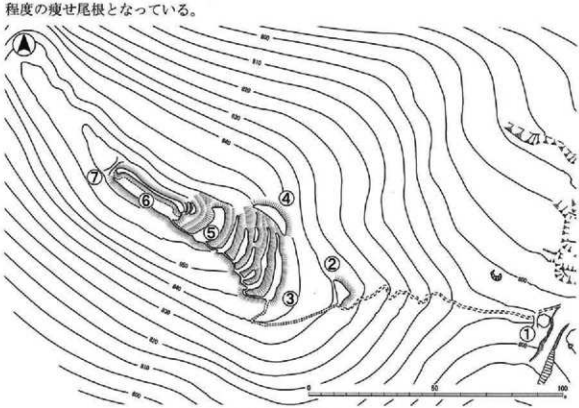
第２節　大渡の烽火台跡（須玉町江草）

大渡の烽火台跡は、塩川左岸の、塩川の浸食によって山並みから切り離された独立峰に設けられている。烽火台跡の裾には信州峠へとつづく小尾街道が通り、鳥居峠の切通しになっている。南東に大渡集落が広がり、北、西、南の三方は塩川に続く急峻な山裾に囲まれている。昭和63年に旧須玉町が山頂部分のみを史跡指定し、北杜市指定史跡に引き継がれている。平成に入って県道須玉増富線の改良工事により烽火台がある山をトンネルが貫いているが、烽火台の保存に大きな影響はなかった。

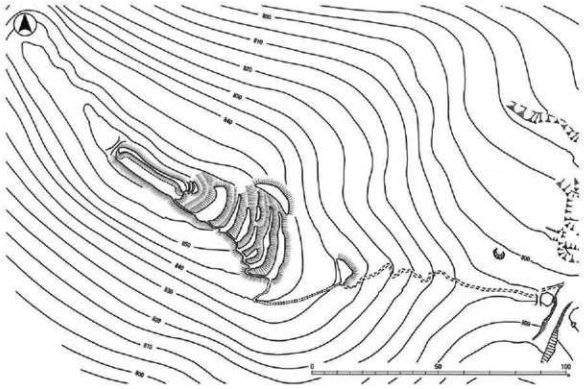
大渡の烽火台跡は、甲斐国志巻之二十九山川部第十には、「鳥居嶺　比志・江草ニ村ノ界ニ在リ金峯山ノ第一華表ヲ立ツ又此辺峡間屈曲シテ峯巒ノ隔テアルユエ烽火台数所ヲ置ク」とみえ、また甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「烽火台　比志村　二所江草村界ニ一所アリ皆穂坂路ナリ」と記されている。前節の獅子吼城跡付近から北の塩川上流は、谷筋が深く眺望が限定されることから、烽火台跡が点在する。大渡の烽火台は獅子吼城跡から北へ延びる最初の烽火台にあたり、またここから北は大字比志となる。

古道の鳥居峠から山頂に向かう山道に入るとまず尾根切状の凹地①にぶつかる。この凹地は不明瞭である。幾筋にも分かれる獣道のような山道をたどると狭い平坦面②があり、さらに③から主郭に向けて数段の細長い平坦面が連続する。これらの平坦面の奥には平坦面④がある。

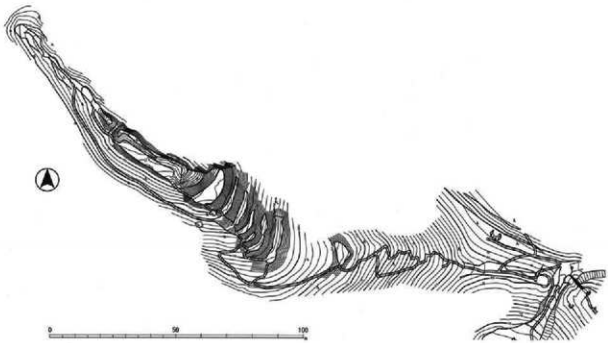
主郭直下のやや広い平坦面⑤を過ぎると主郭⑥に至る。細長い痩せ尾根を削平した主郭部の北端には低い土塁があり、その先は塩川へと落ちる絶壁となっている。秋葉山の石祠と御神燈が祀られている。尾根筋を奥へ進むと尾根切⑦があり、その先の尾根は山道の幅程度の痩せ尾根となっている。



大渡の烽火台跡要図（1/1500）



大渡の烽火台跡要図（1/1500）



大渡の烽火台跡現況平面図（主要部 1/1500）

大渡の烽火台跡現況平面図（1/4000）

第３節　信州峠の防塁（須玉町小尾）

北杜市須玉町から塩川に沿って穂坂路（小尾街道）を北上し、口留番所のある黒森集落を過ぎると、増穂山と横尾山の間の信州峠を経て長野県川上村へと至る。標高1500mあまりの信州峠は11月から４月頃までは降雪に見舞われ、一帯は笹と針葉樹に覆われている。

信州峠の東西の甲信国境にほぼ沿うようにして長大な土塁が延びていることが以前から知られ（山梨県教育委員会1986）、標高1592mの三角点がある地点に烽火台を想定して、国境を守備する施設と推測されている（三梨県2004）。一方、甲斐国志にはこの防塁についての記載は一切認められない。また延享二年（1745）の小尾村明細帳等にも触れられておらず、地元の伝承もないようである。

長さ３kmにも及ぶ防塁の性格は不明といわざるを得ない。獅子垣とするには守るべき農地が近隣に見いだせない。長野県側には現在、高原野菜の広大な畑地が広がるが、これは戦後の開発によるものであるし、山梨県側は黒森集落までの間に2kmの隔たりがある。小尾村明細帳写によると、小尾村には８か所の御巣鷹山がある。御用のための薪などを伐り出していたが近年は伐採により山内が荒廃して鷹の営巣は確認できないとしているから、御巣鷹山を保護する観点から長大な防塁が築かれたものとも思えない。

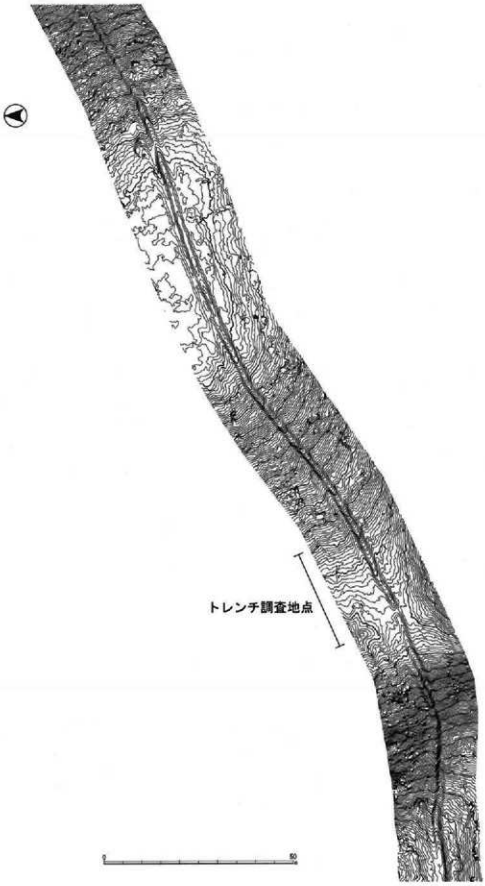
平成21年の現況測量の結果、現在の県境と厳密に一致するものではないが、概ね県境に沿って防塁が延びていることが改めて確認された。その分布は、信州峠から西、横尾山に向かっては約１km延び、横尾山山頂に至る尾根筋の勾配が急になる手前までおぼろげながらも確認できる。信州峠から東には約２km続き、尾根筋に岩場が山立つ付近で途切れている。途中、防塁が途切れて平坦地が広がる地点があり、ここから北へ尾根筋をたどると烽火台と目される三角点が設置された小峰に至る。

平成22年には、この平坦地で試掘調査を実施した。山梨県中北林務事務所へ県有林入山許可を申請して許可され、また国立公園の普通地域に該当することから山梨県森林環境部と協議のうえ、平成22年10月12日から10月14日までの３日間に実施した。

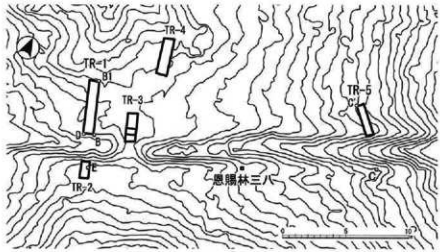
試掘調査は、平坦地に試掘溝２本、土塁に沿った堀跡とみられる凹地に２本、堀跡と反対側の土塁沿いに１本、計５本を発掘して、土塁等の形状、遺物の有無を確認した。土塁は遺構保護の観点から発掘しなかった。

試掘調査の結果、縄文時代前期と思われる土器破片、近世以降とみられるキセル吸口１点が出土し、遺構は検出されなかった。堀跡とみられる凹地には顕著な掘り込みが認められなかった。平坦地は周囲から土砂が流れ込んで複雑な堆積状況を示しているが、人為的な盛り上などの造成は確認できなかった。縄文時代の土器破片が出土した試掘溝で炭化材３点が出土したためC14年代測定法による年代推定を行ったところ、暦年較正年代で1691-1617calBC、1740-1666calBC、5485-5381calBCという値を得た。いずれも中世、戦国時代とはかけ離れた縄文時代に相当する値である。

調査地点は入山した際に休憩するにはちょうどよい平坦地で、現代の狩猟用散弾銃の薬莢、空き缶なども落ちているから、近世以後、継続的に人が入山しているのは確かであるが、調査で防塁の年代観、性格を明らかにすることはできなかった。なお、現況平面図は長大であるためその一部を図示するにとどめ、付録CDに測量データを収録した。



信州峠防塁現況平面図（主要部 1/1000）



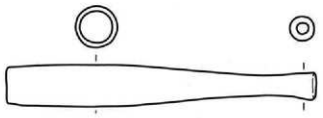
トレンチ配置図（1/300）

1層　10YR1.7/1(黒)。黒色の腐食土。しまりなし。
1-1層　10YR2/1(黒)。腐食土。1層よりやや灰色がかって砂ぼい。2層との漸移層のよう。しまりなし。
2層　2.5Y6/3(にぶい黄)。細粒砂。1-1層が30%混じる。しまりなし。
3層　10YR3/1(黒褐)。黒褐色粘質土。しまる。
4層　2.5Y5/4(黄褐)。黄褐色のシルト粒土。やや粘質でしまる。
5層　3層に同じ。粘質土。しまる。
6層　4層に同じ。
7層　3層に同じ。
7-1層　7層より褐色ぼい。
8層　粘質化しつつある4層。しまる。ほぼ粘土。
9層　10YR2/1(黒)。黒色細粒土。粘土化していない。ややしまる。
10層　10YR4/3(にぶい黄褐)に10YR3/2(黒褐)の細粒土が20%混じる。粘土化しておらず小礫粒が混じる。ややしまる。
11層　10YR3/2(黒褐)。細粒土。小礫粒が混じる。ややしまる。

1号トレンチセクション図（1/60）

1層　10YR1.7/1(黒)。腐食土。
2層　10YR3/2(黒褐)。やや暗め。小礫粒が多く混じる。細粒土。
3層　10YR3/2(黒褐)。拳大の角礫が混じる細粒土。土塁に沿う小溝の埋土。
地山　10YR3/3(暗褐)。小礫粒が多く混じる細粒土。全体にややしまる。ローム地山のように固くしまっていないのは、風化岩起源の土壌に腐食土が混じるからと思われる。

5号トレンチセクション図（1/60）



4号トレンチ出土遺物（1/1）

第４節　若神子北城（須玉町若神子）

武田氏による信州攻略の際、たびたび軍勢の拠点となった若神子の西側に接する城跡である。八ヶ岳南麓の丘陵が西川、須玉川の流れにより浸食されて比較的平坦で幅広い舌状台地が形成され、ここに天正壬午の乱の際、北条氏直が本陣を構えて新府城の徳川勢に対峙したとされる。若神子北城の名称は、この南にある若神子古城、若神子南城と区別するための便宜的な呼称で歴史的名称ではない。

スポーツ施設建設工事に先立ち発掘調査が実施され、尾根筋方向に掘列と溝が検出されたようだが、調査結果が報告されておらず詳細は不明である。また、いつ頃のことか不明だが、城域の一部は平坦に造成されていて旧地形が分からなくなっている。

甲斐国志巻之四十七古蹟部第十には「若神子　若神子村　多麻庄ニ属ス天正壬午八月ヨリ北条氏直本陣ヲ屯シ処ナリ南ニ柄樹川東ニ玉川各深渓断岸ヲ帯ビ西北ハ大八幡庄・熟馬庄ニ界ヒテ岡巒ヲ負ヘリ藤井庄ニモ接ス四達要枢今モ此筋ノ都会ナリ・・・天正壬午時北条氏旧塁ニ拠テ陣取増築セシコトナルベシ・・・」とあり、天正壬午の以前から城郭があったことを想定している。

若神子北城からみると、東側は若神子集落と水田が広がる平地で、須玉川と塩川を挟んで茅ヶ岳山麓の徳川勢が布陣した浅尾原を遠望できる。北側は八ヶ岳南麓の緩斜面の蔵原集落へと連なる。西側は急傾斜の山裾が西川へと落ち込み、南側は舌状台地の先端でやはり西川へと落ち込んでいる。

平成20年に現況平面図を作成するために踏査と測量を実施した。城域の北限はスポーツ施設の北側、現在は圃場整備された水田となっている地点で、ここに尾根切の大規模な堀が想定される(①)。ここの東端には土塁屋敷と称される屋敷が伝えられている。

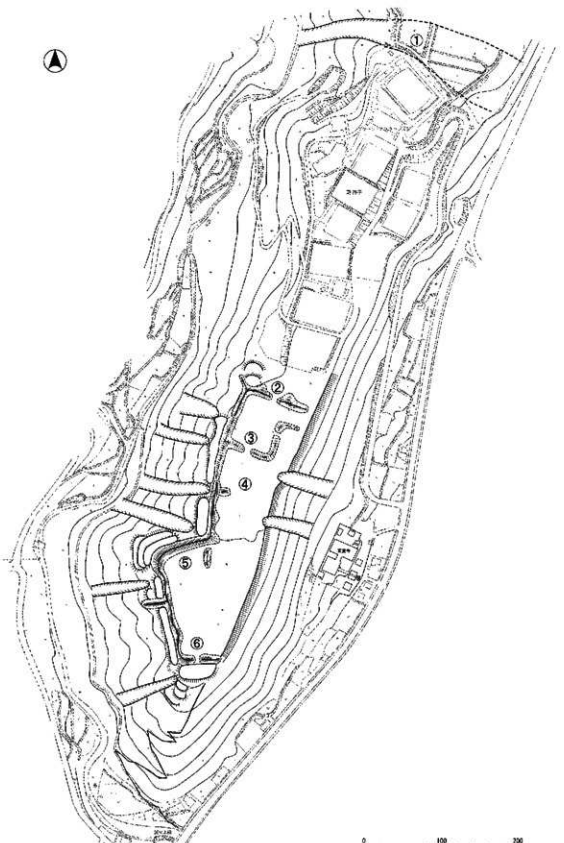
現存する遺構は、スポーツ施設の南側の土塁と平場である。比較的規模が大きく保存状態がよい土塁は縄張り図に示した通り、主に西側の西川に面した丘陵端に沿って延びている。北端と南端で土塁は尾根を直交するように東西方向に延びていて、虎口を設けている(②、③、⑥)。部分的に張出部が認められる。北端の土塁②には空堀が沿う可能性もあるが、不明瞭である。

土塁の内側(主に東側)は広い平坦面が広がり、現在はヒノキの植林地となっている。地表面には遺構が判然としない低い凹凸があるが、これは図示しなかった。

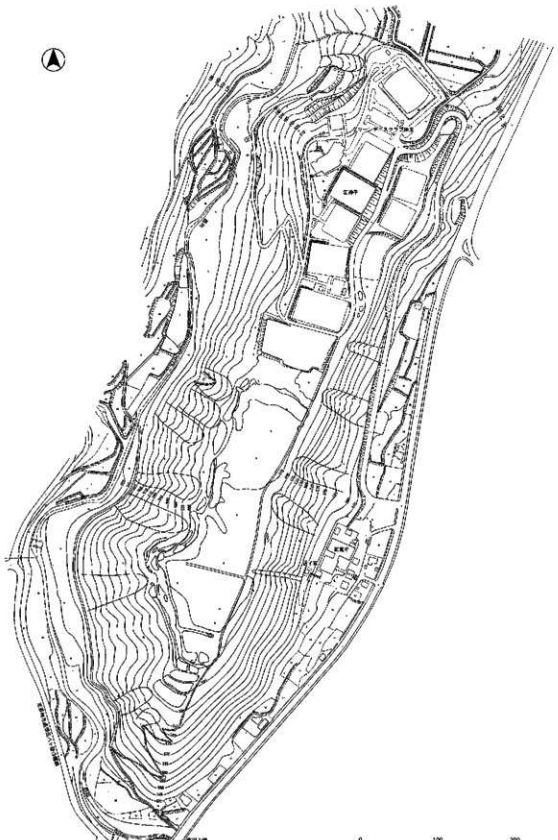
測量と並行して地中レーダー探査を実施した。これによると最北端の大規模な堀①のさらに北側に土塁が想定されること、土塁②の北側に空堀が想定されること、区画③と区画④の間の土塁の南側に堀が想定されること、区画⑤の土塁は、後代に土塁を崩して堀を埋め立てた際の高まりである可能性があること、などが報告されている。これらの点については発掘調査により確認を要する。

土塁の主に西側には帯郭状の平坦地が認められる。また土塁⑥の南側にも３段ほどの平坦地が想定される。

山裾にはいくつもの竪堀が想定されるが、自然地形か崩落によるものか、あるいは人工的なものか判然としない。



若神子北城要図（1/5000）



若神子北城現況平面図（1/5000）

第５節　旭山塁跡（高根町村山北割）

天正壬午の乱の折に北条氏直本陣が置かれた若神子北城から佐久往還を北へ６kmほどで旭山塁跡に至る。戦況の悪化を受けて徳川勢と和睦した北条軍は信州佐久へと撤退を開始し、背後に不安を感じて旭山に塁を築いたが、徳川勢に不信感を与えたため苑びて、塁を放棄し撤退を続けたといわれる（平山 2011）。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「朝日山塁跡　村山北ノ割村　高十余町ノ突峯ナリ頂ニ塁郭ノ脉存セリ遠ク四方ヲ眺ムベシ壬午ノ時北条氏直ノ所築ト云伝フ北ハ長沢南ハ若神子ニ当ル東麓ニ平沢ニ出ル路亘ンリ古時ノ烽火台ト見エタリ武田ノ軍法ニ飛脚筭トテ四方ノ道筋ニ烽火台ヲ置キ相照シ伝ヘテ遠境ニ変アレバ即時ニ告ゲ知ラシム此筋ニハ信州ヘ田ル路多キ故烽火台モ数所アンベシ今モ其照含ヒタル場所頂ジメニハ知ルル事ナリト云」と記されていて、北条勢の塁というにとどまらず、武田氏の烽火台ともみている。

頂上が標高 910m ほどの旭山は佐久往還からの比高差が 100m 程度で、山肌もさほどに急勾配ではない。頂上部から東には須玉町津金の源太ヶ城がよくみえる。北側は八ヶ岳南麓の丘陵へと続き、佐久往還の長沢集落に至る。守備に適した要害の地とは言い難い地形である。縄張図に示した通り、城の構えも南側に施設が充実するが、内部施設ははっきりせず、いかにも急拵えの感を呈する。

平成 20 年に踏査と地形測量を実施し、現況平面図を作成した。現在の旭山塁跡は、アカマツの植林地、あるいは笹原となっていて、土塁と堀は林道により分断されている。

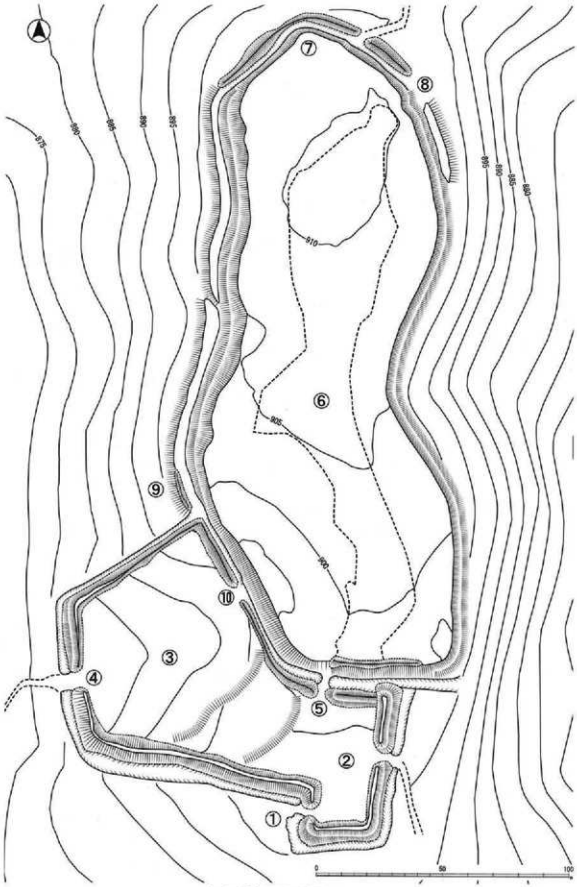
まず最南端に虎口①が設けられ、土塁と堀に囲まれた区画②がある。ここは比較的平坦であるが、近年、桜の植樹などのために多少の造成があったようである。ここから西側に斜面が下り、区画③に入る。ここは土塁と堀にしっかりと囲まれていながらも平場とは言い難い斜面で、西端に虎口④がある。この虎口④は築城当時のものか、後代の林道取り付けに際して設けられたものか不明である。

区画②から林道により分断された⑤地点を経て、山頂部の平坦地⑥に至る。この平坦地は人工的に造成されたものかはっきりしない。築城途上で放棄されたためか。⑤地点にも区画②と平坦地⑥をつなぐ通路があったものと思われるが林道のためにはっきりしない。

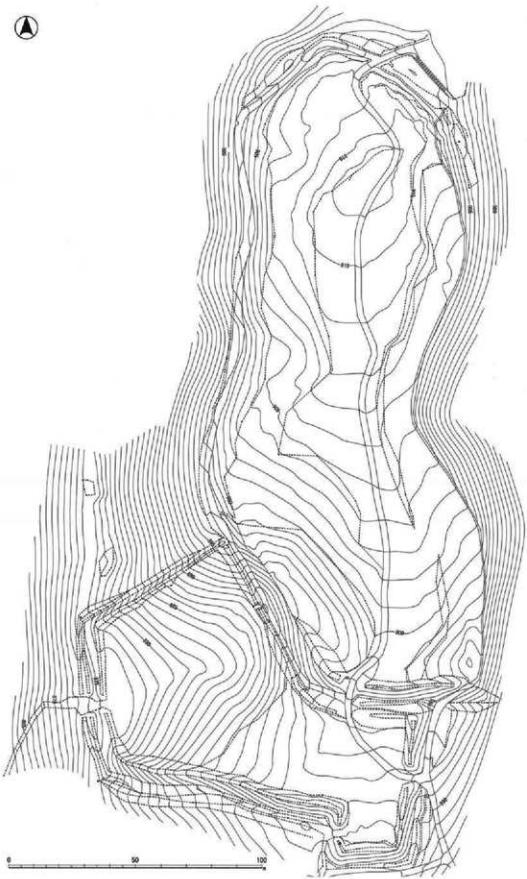
北端は⑦地点で現在の林道が土塁と堀を分断している。本来の通路であったかは疑わしい。⑦地点にある空堀が帯郭へと変化しながら連続する⑧地点付近が本来の搦め手であったようにも思われる。

山頂部東側の山裾は幾分急勾配で施設はみられないが、西側には帯郭が連続している。通路状の帯郭の東端には土塁状の高まり⑨があり、区画③を囲む堀と土塁につながっていく。区画④と平坦地⑥の間にも低いながらも土塁と堀が残り、⑩地点で土塁と堀が途切れるようにみえる。連絡通路であろうか。

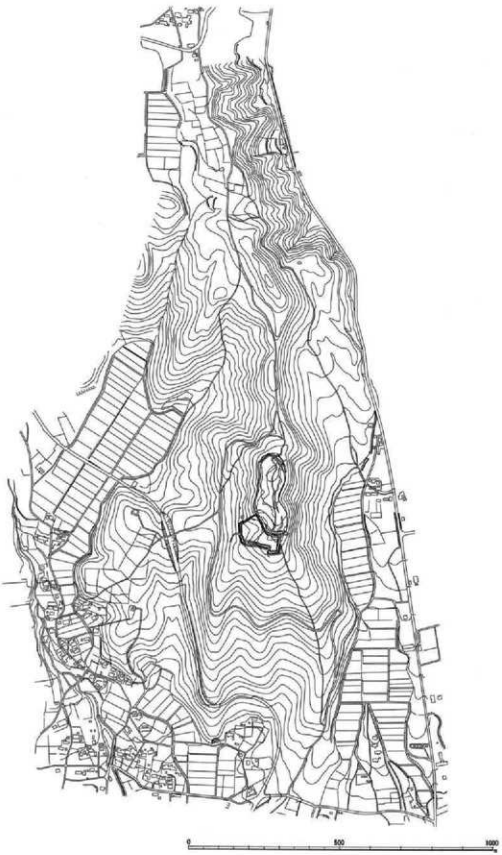
地形測量と並行して地中レーダー探査を実施した。⑤地点の凹地が堀であるなどを確認した反面、平坦地⑥にも複数の堀跡が想定されるなど、現状では確認できない結果も報告されている。旭山塁跡は、⑦地点の北側が公園風に造成され旧地形が分からなくなっており、最近も平坦地⑥にアカマツ伐採のために重機等の建設機械が入ったものの、比較的よく保存されている。



旭山墓跡要図（1/1500）



旭山墓跡現況平面図（主要部 1/1500）



旭山墾跡現況平面図(1/12500)

第６節　史跡谷戸城跡（大泉町谷戸字城山）

谷戸城跡は甲斐源氏の祖、逸見清光（1110 ～ 1168 ？）の居城と伝えられる。城は天然の堀である東衣川・西衣川に挟まれた、周囲との比高差 30m の眺望に優れた独立丘に築かれている。城内は大まかに６つの郭と帯郭に分けられ、一の郭を中心に北・東・西に郭を配する「輪郭式」の縄張りを持つ。北西から西斜面には帯郭を、急斜面となる南側には狭い通路をそれぞれ数段設けているほか、北～東に空堀と土塁を巡らせて防御を固めている。

『甲斐国志』には「・・・本丸方五六十歩　ニノ丸・三ノ丸曲折アリ　溝塁粗存ス　逸見郷ノ中ニ最モ高キ処ニテ数里ヲ下視スベシ　遠ク望メバ茶臼ノ形ニ似タリトテ茶臼山トモ名ツク・・・牙城ノ土中ニハ米麦粟ノ焦ゲタルヲ得ル　古伝ニ逸見源太清光此ノ城ニテ建久六年六月ヨリ病ミ正治元年六月十九日逝ス・・・東鑑ニ治承四年九月十五日武田太郎信義・一条次郎忠頼已下信濃ノ国中ノ凶徒ヲ討チ得テ去ル夜甲斐ノ国ニ帰リ于逸見山ニ宿ス　而ルニ今日北条殿其ノ所ニ到着シ給ヒ仰ノ趣ヲ於客等ニ示被ト云々　廿四日北条殿并ニ甲斐ノ国ノ源氏等逸見山ヲ去リ于石禾御厨ニ来リ宿スル之処トアリ　今特ニ逸見山ト唱フル処ハ無シ地ノ惣名ヲ指シテ云フナリ・・・殊ニ本州ハ信玄ノ時ニ逮ンデ州中ニ城壁ノ設ケナキヲ以テ相誇リ他ニ武威ヲ示スノ一端トナス風俗ナレバ今時塁湟ノ屹トシテ存シタルハ大氐壬午以来ニ修理ヲ加フル所ナリト云フ　左レバ逸見山ノ館モ谷戸ハ本城ナレドモ地僻ナル故若神子ノ通衢ニ居館ヲ構ヘシナラン・・・」とあり、治承４年（1180）９月 15 日条に武田信義・一条忠頼が「逸見山」で北条時政と会見した記録に触れるが、逸見山は交通の要衝である須玉町若神子にあったとしている。また、土塁・堀の残りが良いことから、天正 10 年（1582）の天正壬午の戦いの際に修築されたものと推測している。

谷戸城は平成５年に史跡指定を受け、平成 10 年から史跡整備に伴う発掘調査に着手した。その結果、大手は北側、搦め手は南西側にあると考えられるようになった。主導線は、北側の堀切にある土橋から入る→西側の帯郭を通って南に回り込み、喰い違い虎口から三の郭に入る→そのまま北へ進み、一の郭の北側を東に回って二の郭に入り、一の郭の東虎口に至る、というルートが考えられた。一の郭ではピット 23 基を確認したが、建物跡を想定できるような配列は見られず、直線的に並ぶものが多かった。二の郭では柱穴を 35 個確認した。芯々距離は南北 140cm 前後、東西 170cm 前後を測るものが多く、３～４棟の掘建柱建物跡が想定される。その軸はいずれもほぼ同一方向にあり、郭を囲む土塁の東側のラインを基準としているように見える。一～三の郭は高い土塁・深い空堀に囲まれ、二の郭外側には帯郭を回すなど、城の中心部は防御が厳重であるが、その外側の四の郭・五の郭は土塁も低く、削平も十分ではないため、中心部とは対照的である。

出土遺物はカワラケ、内耳土器、卸皿、石臼、茶臼、硯などがあり、一～三の郭からの出土が多い傾向があった。陶器の製作年代は 14 世紀後半～ 15 世紀前半とされ、炭化材の年代測定結果も 14 ～ 15 世紀代に集中している。

これらの結果からは、武田信虎による甲斐国統一以前の内乱時代に使用されたことは間違いなく、その立地から逸見氏とその後の今井氏（今井流逸見氏または浦氏）の勢力下にあったものと考えられる。『甲斐国志』で推測された天正壬午の戦いによる使用は、発掘調査から確実な証拠は確認できなかった。

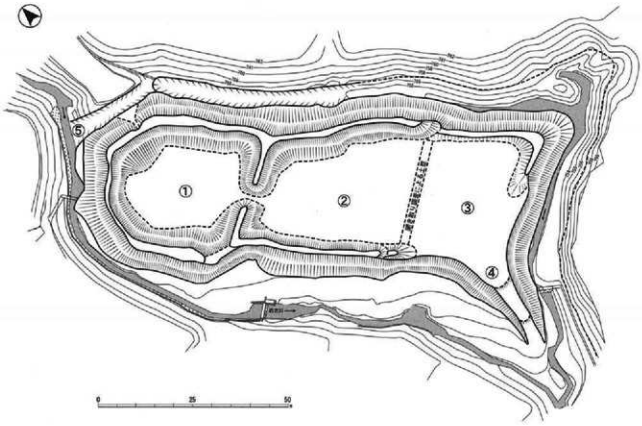
谷戸城現況平面図(1/3000)

第７節　深草館跡（長坂町大八田）

鎌倉時代からの大八田荘の中心に位置する居館跡であるが、その建設時期は15世紀以前にはさかのぼらないという（萩原1991）。現在は、水田に囲まれた山林となっているが、山梨県史跡に指定され良好に保護管理されている。周囲の水田開発と深草館跡との関係は、前掲書に詳しい。

深草館跡について甲斐国志巻之四十七古跡部第十は「深草塁址　大八田村南新居　相伝フ清光ノ臣堀内某居之子孫堀内下総守ノ子主税助ノ時城陥落槻セシト云々塁湮全ク存セリ」と記している。城主とされる堀内下総守については、「堀内下総守　大八田村　深草城墟ト云処アリ相伝テ城主下総守某次ハ主税助、宮内左衛門ナリト云今里長其氏冒ス」（甲斐国志巻之百十二士庶部第十一）としている。

現存する遺構は、西衣川左岸に土塁と堀が明瞭に保存されている。館内は①、②、③の三区画に分かれ、区画①と②の間は土塁で区画されている。昭和初期頃には区画②と③の間にも土塁があったというが、現在はすっかり削平されている。館内への通路は④地点に想定されるという（萩原前掲）。館の北端は空堀⑤で区画されている。現状では、④地点付近に土塁は確認されないが、虎口としてはやや防備が手薄のように感じられ、かつては土塁などが備わっていたものと推測される。



深草館跡要図（1/1000）

深草鍋跡現況平面図（1/700）

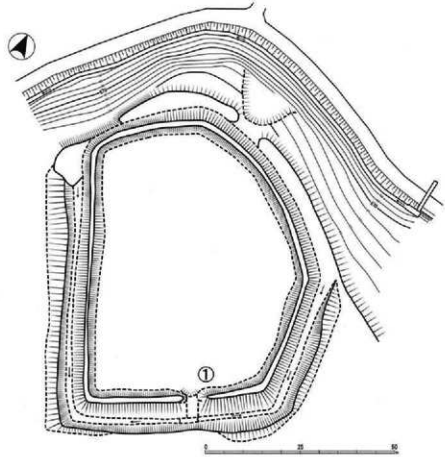
第８節　長閑屋敷跡（長坂町長坂上条）

八ヶ岳南麓の流山地形の丘陵上に立地する居館跡で、昭和45年に居館跡全体を旧長坂町が史跡に指定し、現在、北杜市指定史跡となっている。この間、アカマツ林であったが平成21年に伐採し、現在は草地となっている。

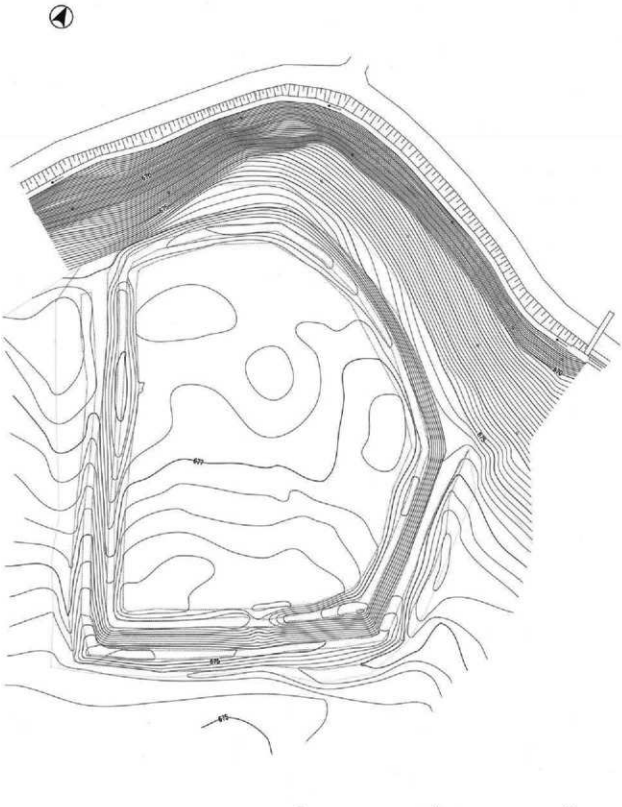
居館跡は、武田氏家臣の長坂長閑斎屋敷跡と伝承されていて、甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「長閑屋敷　長坂上条村　村東曠原中ニ在リ東西百間、南北七十間許、土塁乾濕等存ス里人之ヲ長坂長閑斎ノ宅跡ナリト云其原中ニテ遺鐵ヲ拾フコトアリ此モ北条勢ノ修シテ砦トナセシナルベシ」と記している。現状で認識される居館跡の規模とは大分異なるが、江戸時代後期に長閑屋敷と呼称されていたことが分かる。長坂氏は、甲斐国志巻之九十七人物部第六に「長坂左衛門尉　軍鑑ニ云左衛門尉除髪シテ号長坂長閑足軽隊将騎馬四十、足軽四十五人ナリ」「長坂左十衛門 … 長坂氏ハ栗原ノ支流ナリト云衣紋ニ圏内割菱ヲ用ユ系譜未分明ト雖長坂上条竜岸寺ニ竜岩俊公居士ノ牌子アリ」などと記されている。

居館跡は、①に虎口が想定される。居館南辺中央にあたる土塁が途切れたように低くなり、かつ空堀の底も土橋状に高くなっている。土塁は居館を囲むように全周し、東から西辺にかけて空堀がめぐる。空堀は北東から北辺で帯郭状の平坦面に変化する。南東辺と西辺の空堀のさらに外側には低い土塁状の高まりがあるが、これが二重の土塁か現状では判然としない。

地中レーダー探査では、土塁は一重で、現存する堀の外側の高まりは、古い堀を埋め立てた可能性が示唆されているが、詳細は未確認である。虎口正面にも土塁状の反応がみられ、居館内部には地下式土坑らしい空間も探知されている。



長閑屋敷跡要図（1/1000）



長閑屋敷跡現況平面図（1/700）

第９節　笹尾塁跡

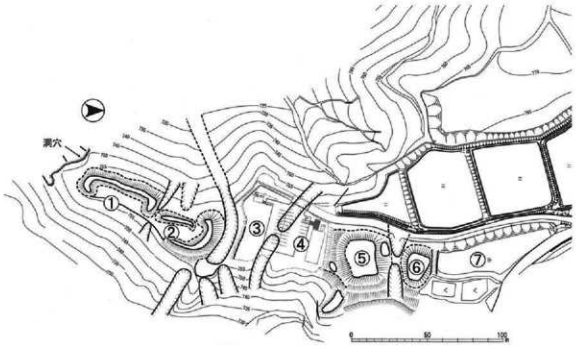
釜無川右岸の八ヶ岳泥流、通称「七里ヶ岩」上に築かれた城跡である。昭和41年に旧小淵沢町が主郭を史跡に指定し、北杜市指定史跡に引き継がれている。これまでに昭和50年頃と平成18年の二度にわたり城山公園として遊歩道、四阿などが整備されたが、残念ながら史跡に配慮した整備とはいいがたい。郭の一部は農地に改変されていたが、昭和50年代の県営圃場整備事業でも調査されず、史跡の保全が図られなかったのは遺憾である。しかし、昭和53年には小淵沢町教育委員会と笹尾塁跡発掘調査団により測量と一部の発掘調査が実施され、報告書が刊行されている。

甲斐国志巻之四十七古跡部第十には「篠尾塁跡　下笹尾村　本村ハ片蔵ノ北半里ニ在リ小淵沢・小荒間両道ノ番所ヘ各一里上笹尾村ニ遠観番所アリ大井森番所ト抗衡ス西方ハ武川筋鳥原ノ亭候ニ相並ンデ教来石ノ番所ヘモ一里余皆諏訪口・大門嶺口ノ警衛八岳ノ西ナリ此墟ハ七里岩上ニ在リ東西ハ深山峨々ト峙チ南モ高岩壁立シ下ニ釜無川アリ北方僅ニ平地ニ接ス湟塁二三重ニシテ甚広カラズ左右ノ山腹ニモ塁形存ス本城高処五六十歩南ニ下ルコト十五六歩ニシテ洞穴アリ数十人ヲ容ルベシ鐘ツリ穴ト名ヅク此ニテ鳴鐘セバ鳥原ニテ太鼓ヲ打テ相応ズト云伝フ又加賀美遠光造立ノ薬師如来ト云ヘルハ墟ノ北三町許ニ存リ墟ノ上ヨリ西南ニ望メバ駒岳・鳳凰諸山神秀霊区尾白河・濁川雲端ヨリ流下ル白砂如雪白須・鳥原ノ松林布地テ青ク駅路ハ迤邐トシテ其中ニ亘レリ実ニ北辺ニ最タル佳境ナリ」と記され、釜無川沿いに甲信を結ぶ甲州街道の国境を守る要害としている。

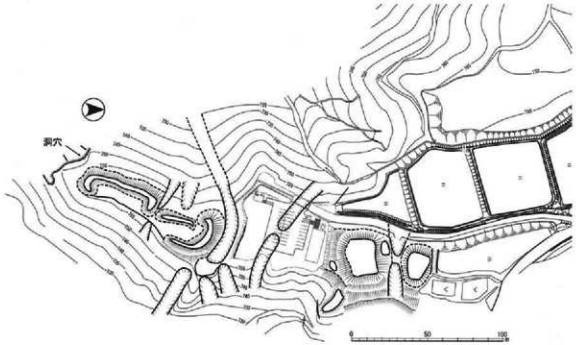
笹尾塁跡は、史料からその築城の目的、年代が跡付けられる稀有な城郭でもある。『妙法寺記』によると、享禄四年（1531）、甲斐国内を平定した武田信虎に有力国人衆が反旗を翻したため、信虎は諏訪下社と結んで笹尾塁跡を築き対抗したが、笹尾は自落したという。周辺は天正壬午の乱の折にも北条勢と徳川勢が争うところとなり、地理的にも北条勢が抑えるところとなったと思われるが、北条勢による改築の有無は不明である。北条勢の大軍が駐留する城郭としては規模が小さいため、あるいは大規模に改築されることはなかったのかもしれない。

笹尾塁跡の現況は以下のとおりである。主郭とされる区画①と②には、土塁が良好に保存されている。昭和53年の発掘調査では区画①に4本、②に3本、計7本のトレンチが発掘され、土塁基底部の石列、ピットが検出され、かわらけ、石臼片などが出土している。区画①の南側は釜無川に落ちる断崖となっているが、ここに洞穴があり甲斐国志のいう「鐘ツリ穴」と思われる。区画③、④は平成18年の公園整備の際にアスファルト舗装の駐車場にされたが、本来空堀で分断されていたらしく、平成18年の測量と並行して実施した地中レーダー探査でも空堀らしい遺構が推定され、また部分的な発掘調査でも薬研堀が検出されている。区画⑤、⑥は植林地となっていて、郭間を空堀が分断している。⑦地点は荒廃農地となっていて城郭に含まれるか不明である。北条勢が布陣、築城したとされる若神子北城、旭山塁跡でみられる大規模な土塁は認められない。

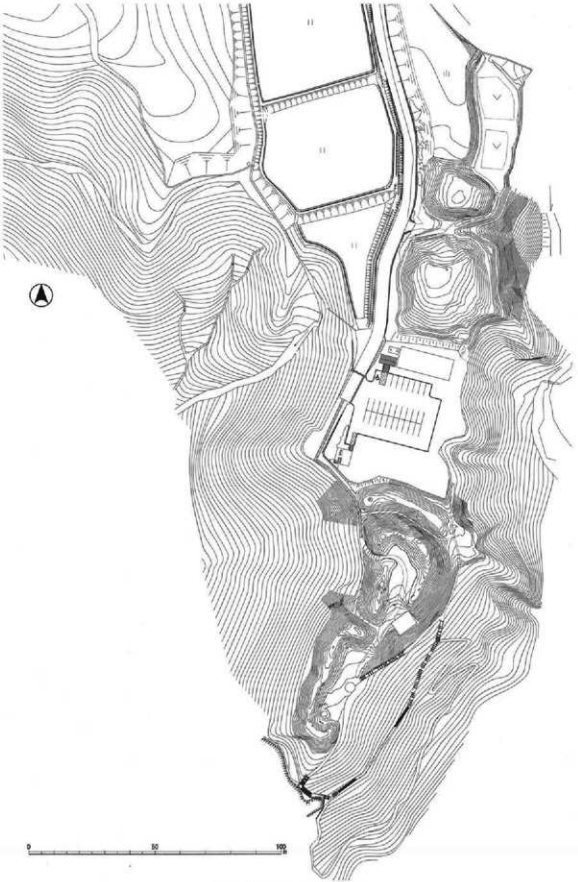
甲斐国志に記されたとおり、笹尾塁跡から釜無川の対岸、西方には白州町鳥原塁跡、教来石民部館跡などが遠望され、鐘と太鼓で通信したことが納得される。ともに甲信国境を防備する要害として機能したものであろう。



笹尾塁跡要図（1/2500）



笹尾塁跡要図（1/2500）



笹尾墓跡現況平面図（1/1500）

第１０節　中山砦跡（白州町・武川町）

中山砦跡は、釜無川右岸の中山山頂に築かれた城跡である。中山は標高887mで、白州町と武川町の行政区境にある独立峰で、北に笛無川とその支流尾白川が流れ、南は大武川に画される。砦跡は昭和62年に旧武川村が山頂の主郭部を史跡に指定し、現在、北杜市史跡に引き継がれている。昭和50年代に白州町が主郭から中山峠に下る尾根上に展望台を設置し、登山道を整備した。昭和56年には武川村誌編纂室と中山砦発掘調査団が主郭でトレンチ調査を実施している。現在は、全山が山林になっている。

甲斐国志巻之四十八古跡部第十一には、「中山塁　二吹・台原二村ノ西ニ在リ其裏ハ横手村ナリ北ニ尾白川南ニ大武川ヲ帯タル孤山巓ニ方四五十歩塁形存セリ半腹ニ陣平ト云平地又水汲場ト云処モアリ麓ヨリ凡三十町許ノ阪路ナリ　中略　根古屋・古町・古屋布・花水ナド云地名アリ　中略　天正壬午御対陣ノ時ハ武川衆警固之」と記される。

中山砦は、甲信国境の警備にあたった辺境武士団武川衆が築いたとされる。天正壬午の乱でも中山砦に陣取った武川衆が花水坂で北条勢を破っている。

中山は主に三方に主要な尾根が延びている。山頂から南へ向かい東に屈曲する長い尾根筋は武川町三吹に至る。ここには武田氏家臣馬場美濃守信房の屋敷と伝えられる曹洞宗万休院があり、付近には柳沢氏、山寄氏などの屋敷跡がある。山頂から東北東に延びる尾根筋は白州町台ケ原へ向かい、尾白川右岸の段丘面に至る。この段丘面は根古屋の地名が残り、中山砦の根小屋が想定されている。山頂から北へ向かう尾根筋は中山峠に至り、峠から東進すると白州町台ケ原、西進すると白州町横手の集落に至る。このように中山砦は武川衆が集結するには好適な立地条件を備える。

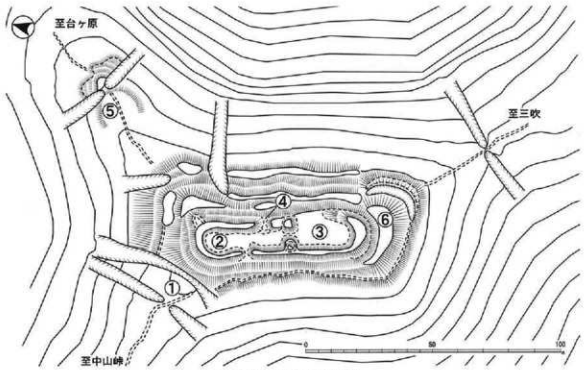
中山砦跡の現況を報告する。中山峠から山頂に急斜面を登りつめると緩斜面に至る。ここで上ってきた尾根筋とは別に台ケ原方向に延びる尾根筋に分かれる。この分岐した尾根筋に尾根切の堀がある。さらに山頂に向かうと尾根切の堀に当たり、展望台が設置されている小ピークに至る。甲斐国志のいう半腹の陣平とはこの小ピークを指すのであろうか。

さらに進むと①地点の堀切を経て主郭②、③に至る。区画②を囲む土塁は現在の登山道が主郭に進入する部分で途切れている。これが本来の虎口にあたるのか不明であるが、反対側にも虎口らしき④がある。区画②と③の間には土塁がある。区画③は西側に土塁が設けられ、東側には認められない。

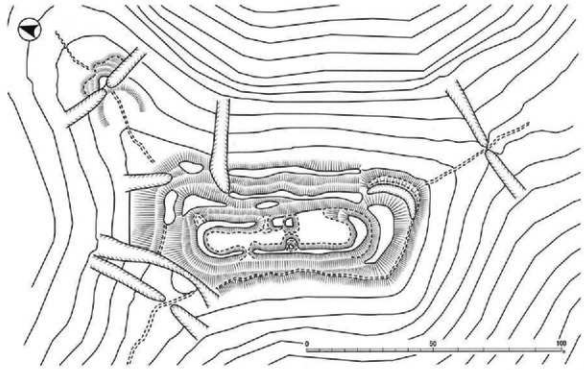
区画②から台ケ原方面に延びる尾根筋をたどると平場⑤、竪堀、尾根切が複雑に重層していて、主郭から300mほど下ると狭い平坦地に至る。ここも陣平の候補地である。主郭の東側には二段の帯郭と竪堀がある。主郭の西側には登山道らしき道がある。

区画③から二吹方向に進むと平場⑥と二日月状の堀があり、尾根筋には尾根切が掘られている。この先にも平坦な小ピークがあり、陣平の候補地である。昭和56年の発掘調査では、区画③にT字状にトレンチを発掘している。ピット、礎石らしい平石、かわらけが検出され、土塁には修築跡が確認されたという。

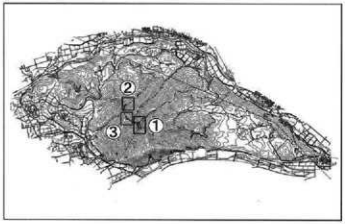
中山砦跡は、笹尾塁跡と同様、天正壬午の乱の折には徳川勢についた武川衆が陣取ったと思われるが、土塁、堀の規模は若神子北城、旭山塁跡と比較すると小規模で、主郭の構造は笹尾塁跡によく似ているように思われる。



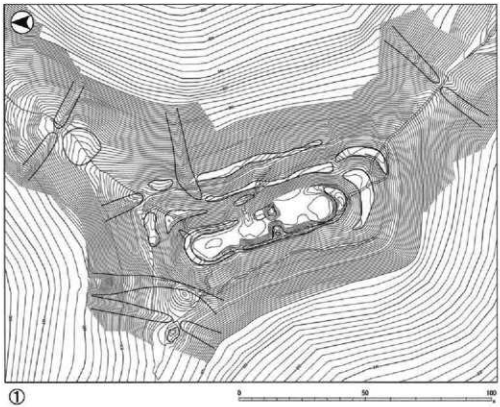
中山砦跡要図（1/1500）

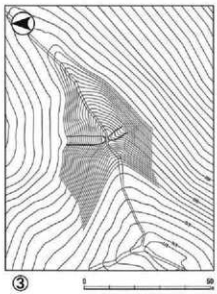


中山砦跡要図（1/1500）



中山磐跡現況平面図（1/25000）





中山砦跡現況平面図（部分 1/1500）

第４章　調査された城館跡

第１節　中尾城跡（須玉町小倉字中尾）

秩父山系の斑山（1115.1m）から南に延びる尾根は、東を流れる塩川と西を流れる須玉川により形成されたもので、尾根の両側には河岸段丘が発達している。中尾城はこの尾根の中間部（597m）の山地から段丘へ地形が変化する境に築かれている。

『甲斐国志』には「方二十二歩半迄ニ墨アリ　高サ二間許リ　里人清光時代ノ墨ナリト云フ　村名ニ因ルニ昔シ此会ヲ置キシ処カ　又天正壬午ノ時ニ増築セシナラン　小笠原ノ支流小倉氏アリ」と書かれ、当時は高さ二間（3.6m）ほどの土塁が残り、逸見清光の伝承もあったことを紹介している。また、小倉氏との関係を推測しているが、城主に関するはっきりした伝承は、この時代には残っていなかったようである。

『北巨摩郡誌』には「中小倉にあり、武田信光の居城にして後信玄の時に至り、小幡山城守虎盛の子主計頭又兵衛、信玄に随ひ川中島の戦いに参加し、功によって中尾城を賜はるを、上五六年前迄は濠塁外部等を存せしが、今は田畑と化して、附近に町田、籠田、女郎田、番殿の名称残れり。」とある。こちらは逸見清光の孫武田信光の城とし、その後武田家臣主税頭又兵衛の手に渡ったとしている。また、現在のような田圃になったのも明治であったことがわかる。

地元に残る絵図からは、複雑に折りをつけた土塁とその周りを囲む空堀、虎口全てに描かれた門と思われる建物、北側の外郭部へ行くための空堀を渡る橋などを読み取ることができ、非常に守りの堅い城の姿がうかがえる。城内には「丸茂弾正殿御在城」と記されている。『甲斐国志』巻之百十二に小倉村に縁のある人物として丸茂右衛門尉を挙げ、小笠原長清の子孫であると記しているが、丸茂弾正がこの丸茂氏の一族であるのか、どのような人物であったのかは不明である。

また、国人領主今井（浦）信元が武田信虎に抵抗する拠点とした「浦の城」をこの中尾城に比定する説もある。

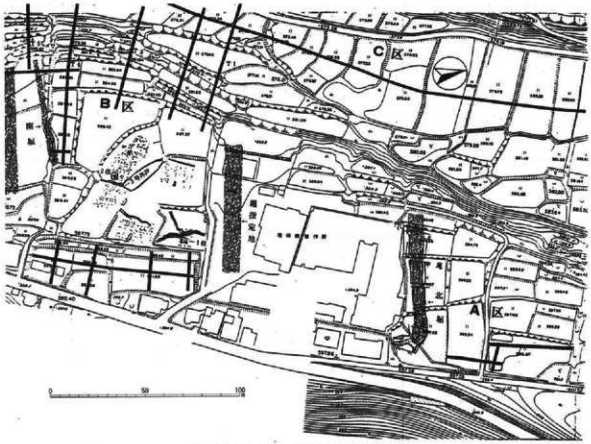
圃場整備事業に伴う発掘調査が昭和58年に行われている。この時までに城域の半分以上が工場、宅地、道路となっていた。調査対象地は水田で、北巨摩郡誌に記されたとおり土塁などの構造物はなくなっていた。調査区外に２箇所の湿地帯があり、堀跡と推測されている。

堀は、発掘調査で２本確認された。このうち北側で見つかったものは、城の北側を区画するものと考えられ、平面確認で東西75m、最大幅9m、深さは２～４mであった。この堀は東側に緩やかに高くなって途絶える。堀の終点の掘り込みは1.4mほどの深さになり、断面形からは堀底を通路にするための入り口のようには見えない。最後は南と東に延びる溝状の遺構となる。形状は堀底が幅1mほど平らとなる鍬底に近い形で、勾配は約10°と緩い。

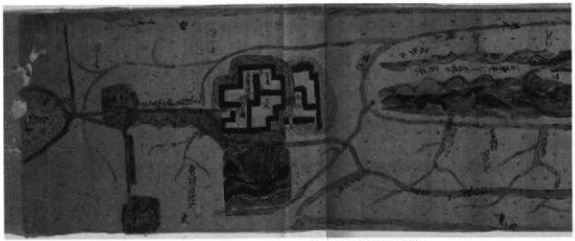
このほか城に関係しそうなものとして掘立柱建物跡９棟、井戸跡３基とそれに付随する溝、西側の堀が見つかっている。掘立柱建物跡は桁行き５間×梁行き３間のものが、推測されるものも含めて４棟と多い。主軸は東西方向のもの６棟、南北方向のもの３棟で、全体的に軸は揃えられているように見える。遺構に伴う遺物の出土がほとんどなかったため、

建物の年代は不明である。南側の堀は北側に比べ規模も小さく、さらに南側で堀跡と推測される湿地帯との関係が不明であるが、絵図との位置関係からは、湿地帯は用水路跡とも考えられる。

建物跡が確認されない範囲が絵図に描かれた土塁跡と仮定すると、南側虎口から入った郭に建物はなく、そこから西に入る郭に5棟の建物と井戸、本丸に建物1棟と井戸2基、二丸に建物3棟という配置になるだろうか。



昭和58年調査の遺構全体図（1/2000）



中尾城跡を描いた古絵図（一部、篠原祐雄氏蔵）

第２節　屋代氏館跡（明野町上神取）

明野町上神取に所在する屋代氏館跡は、第2章で詳述したとおり慶長年間にこの地に知行地を得た屋代越中守勝永の居館跡である。居館跡は、現存する土塁が北杜市史跡に指定されているが、大部分は未指定で水田、畑地、宅地となっている。

西側に隣接する市道はこれまでにも改良工事が実施されたが、堀跡などの調査は行われていない。また農地転用の後に住宅が建設された地点はいわゆる「無届」工事で、文化財保護の措置が講じられていない。平成21年度に居館跡を含む上神取字諏訪原一帯の農地が中山間地域総合整備事業による区画整理事業の計画地となり、居館跡の内部と外周部も工区に含まれることから北杜市教育委員会が試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、北辺土塁の外側に堀がめぐっていることを確認した。堀はこれまでにも想定されていたところである。堀幅、深さは試掘調査であること、堀の規模は比較的大きいことから調査では確認できていない。居館内部には溝跡、ピットが検出され、近世初頭頃の陶磁器類が少数だが出土している。わずかな面積の試掘調査結果からの推測だが、居館内部の施設配置は比較的単純、簡素なようである。居館がわずか20年ほどの経営期間で廃絶し農地化した経緯とも合致する。

居館のある小字「諏訪原」は、勝永が夢告により勧請した諏訪神社があったことに由来するが、旧社地では遺構、遺物が検出されなかった。小字「諏訪原」には縄文時代中期の大集落遺跡「諏訪原遺跡」があり、これまでに複数次の発掘調査が実施されている。この調査において近世初頭の溝跡と遺物が検出されている。

平成7年度の発掘調査では、縄文時代の遺構を切って、東西に延びる幅30㎝ほどの小溝が検出され、溝内から鼠志野碗、素焼きの犬形、鳥形、かわらけが出土している。これらから17世紀初頭から前半期と判断してよく、まさしく居館の経営時期に合致するものである。ほかにも東西、南北方向に延びる溝跡が諏訪原一帯で検出されており、屋代氏の入植に伴い小字「諏訪原」の地の開発が進んだことを窺わせる。原野から一気に水田化したのか、もともと畠地であったものが水田化したのかなどは、今のところ不明であるが、諏訪原の北端に流れる鰻沢川からの引水が容易な土地であるため、水田開発が行われた可能性が高い。屋代氏の失脚、移封後直ちに諏訪原には農業用水「両村堰」が引かれ、江戸時代前期の新田開発が大々的に実施されている。

居館の南には菩提寺勝永寺がある。現在の寺は新田開発に伴い移転しており、旧寺地は水田中にあり小字「寺前」の地名がある。この「寺前」で平成11年度と12年度に県営圃場整備事業に伴い大規模な発掘調査が実施された。旧寺地は工区外であったが、周辺から掘立柱建物、土坑墓、配石墓が検出されている。屋代勝永の菩提寺でありながらその墓所は不明で、現在、墓とされているのは後裔による供養塔である。配石墓は本来の墓所である可能性もあろう。

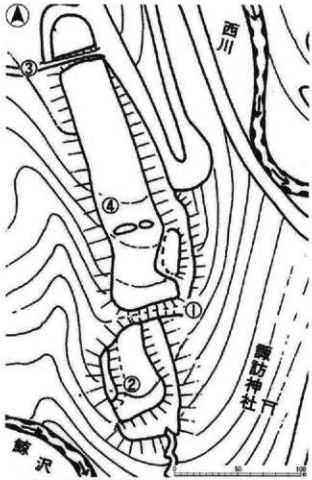
屋代氏の居館跡一帯の発掘調査は平成23年度に実施される予定である。

第３節　若神子城跡（古城）（須玉町若神子古城・小林）

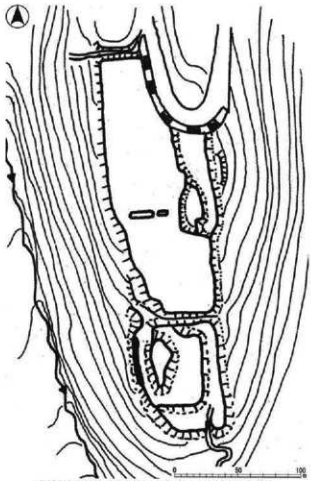
八ヶ岳南麓台地が西川と甲川により解析されてできた三つの尾根上にそれぞれ城跡があり、北から北城・古城・南城といわれている。このうち、北城は遺構の規模から天正壬午の戦いの際に北条氏直が本陣を構えた城と考えられ、中央の古城が甲斐国志に記された大城に相当すると考えられている。『甲斐国志』には「・・・天正壬午八月ヨリ北条氏直本陣ヲ居ヱシ処ナリ・・・四達ノ要枢今モ此ノ筋ノ都会ナリ　相伝ヘテ新羅三郎義光ノ城跡ナリト云フ・・・村西ノ山上ニ旧塁三所アリ　中央ヲ大城ト称ス・・・又西河ノ北正覚寺ノ後山ニ一所アリ・・・湯渓ノ南鯨河ノ北ニモ一所、下村ノ上ニモ一所アリ・・・何レモ山上広ク険ニ倚リ湟塁処々ニ存シタリ・・・義清・清光逸見ヲ以テ氏号トシ太郎信義ノ時ニ及ンデ東鑑ニ逸見山ノ館ト記スルモ居城ノ趣キニ聞エタリ・・・箕輪村大坪組ノ下籠手指坂ノ上ニモ一構ヘノ塁アリ　若神子ノ塁ニ続キ間ニ雲雀渓ヲ隔ツルノミ・・・天正壬午ノ時北条氏旧塁ニ拠リテ陣取増築セシコトナルベシ・・・」とあり、新羅三郎義光の城との伝承を紹介するとともに『吾妻鑑』に登場する逸見山（甲斐源氏が頼朝の使者北条時政から援軍の要請を受けた場所）について館を若神子古城、要害を谷戸城（大泉町）に推測している。

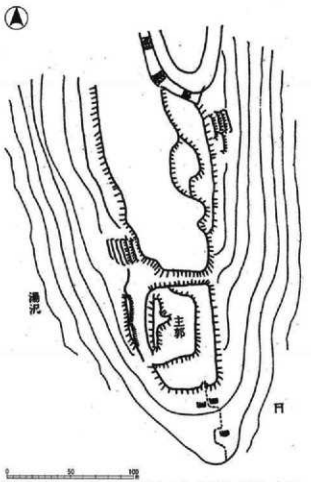
現況の地形観察から確認できる遺構は、城の北限として尾根から城を切り離す堀切であったとされる旧道、城内を南北に分ける空堀、南の郭にある土塁状の高まりである。明治時代に若神子が大火に見舞われた際、壁土の採取が大規模に行われており、城内の施設の評価には慎重さを要する。現在は農村公園として整備されているが、工事に先立ち発掘調査が行われた。北側の郭で東西方向に薬研堀が2本と柱穴群、尾根の先端近くの東斜面辺縁部で櫓跡と考えられる4個の柱穴が確認されている。薬研堀は幅1m・深さ1.2mと小規模で、郭を分けるように東西に直線的に掘られ、2本の間は掘り残されている。これを虎口とする説と、途中で掘削が放棄されたとの説がある。空堀を掘削する手順を考えると、V字形に掘りあがった堀をさらに深く、幅広にしていくとは考えづらく、これが当初に企図した規模であると考えられる。尾根を切断するような幅ではないので、虎口に付属する空堀であったと思われる。出土遺物として布目のついた古瓦、土師器片があり、いずれも平安時代のものである。平安時代において瓦は寺院や官衙で使われるものであり注目されるが、南西に1.5km離れた大小久保遺跡では9世紀後半に土師器や瓦を焼成していたとされる。距離の近さ、特殊な遺物である点で大小久保遺跡との強いつながりを感じるが、時代的に新羅三郎義光とは合わない。

確認された遺構、出土遺物からは伝承どおり新羅三郎義光に関連付けられる要素はない。須玉町史は若神子古城の評価として、八ヶ岳南麓の台地上を含めた地域を基盤とする勢力が築いた城であり、その目的は逸見地域の経済活動の中心として佐久往還沿いに発達した若神子及び二日市場の掌握であったとしている。二日市場がいつから形成されたかの傍証として、人の集まる場所で布教活動を行う傾向のある日蓮宗と時宗寺院の進出を挙げており、日蓮宗の遠照寺が弘安五年（1282）、時宗の長泉寺が延慶元年（1308）であることから、13世紀末には市として賑わっていたと考えられる。とすると、最初の築城は13世紀末～14世紀前半とすることができるだろうか。

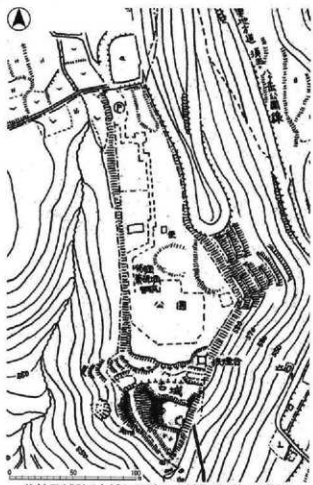


若神子城跡(古城)(須玉町史 通史編 第1巻)


若神子城跡(古城)(定本・山梨県の城)



若神子城跡(古城)(日本城郭大系 第8巻 長野 山梨)


若神子城跡(古城)(図解 山城探訪 第15集)

第４節　長泉寺の墓（須玉町若神子）

時宗湯沢山長泉寺は、時宗本山清浄光寺の末である。甲斐国志巻之八十二仏寺部第十一には「湯沢山長泉寺　若神子村　時宗相州藤沢清浄光寺末御朱印七石二斗境内千七百六十六坪寺記云開山遊行二祖他阿上人元応元年正月廿七日寂ス」とある。寺記に伝える開山他阿真教は時宗二世で二祖上人とも呼ばれた一遍の高弟であった。甲斐国への最初の入国は永仁三年（1295）頃と推測され、信州佐久郡伴野荘から甲斐国巨摩郡北部、現在の北杜市へと入国したらしい（山梨県2007）。甲斐国滞在中には甲斐源氏が帰依し、布教を助けたという。「遊行上人縁起絵」には、甲斐国小笠原での伝道従徒とのいさかいを描き、明野町小笠原にほど近い若神子での出来事として、長泉寺の創建にまつわるものとする説もある（須玉町史編さん委員会2002）。

長泉寺の創建年次は決め手を欠くが、他阿真教の開山と伝える時宗寺院は山梨県内に６ヶ寺あり、山梨県史は正応五年（1292）から正和元年（1312）のこととし、また須玉町史は長泉寺創建を応長元年（1311）としているから、長泉寺も13世紀末から14世紀初頃に創建されたとみてよかろう。これら時宗寺院は開基に一条時信といった甲斐源氏の一族、土豪層を伝えており、当時の若神子にもこれらに準ずる有力者がいたものと思われ、須玉町史では逸見氏を挙げている。長泉寺記は、改宗以前は真言宗とし、常陸から甲斐に流罪となった源義清が若神子湯沢で湯治したためその地に寺院を建立し、これが湯沢山長泉寺となったと伝えている。小字「湯沢」は、長泉寺現在地の北西、若神子古城の南麓に地名が残っている。長泉寺には文和三年（1354）銘の高2.9ｍの大型の板碑が建立されている。若神子郷道俗らが建立したとされ、南北朝期の若神子の繁栄ぶりを窺わせる。

このような寺院としての歴史を伝える長泉寺であるが、平成19年夏に現在の本堂に隣接した土地に入山する副住職の住宅を建設することとなり、発掘調査が実施された。発掘調査では結縁を願った信徒の墓と思われる転石墓が多数検出されたが、調査区の南端で幅2ｍ、深さ1.5ｍの薬研堀が発見された。堀の埋土から15世紀の瀬戸産陶器が出土し、埋没後の堀上には後代の配石墓が営まれていた。わずかな調査範囲であったが、堀は現在の土地境とも概ね合致しており、長泉寺に関連した施設である可能性も窺える。また、埋没後、墓地が営まれ、その後も農業用水として利用された形跡もないことから、その性格が気になるところである。ちなみに堀の内側に想定される土塁は削平されたためか確認されなかった。

ところで、本堂の北側、水田中の農道沿いに奇妙な L 字形の土地があり、ここに土塁らしき土手がある。現存する土手は基底部で幅2ｍ、高さ1ｍとやや小ぶりであるが、薬研堀とともに興味深い施設である。

調査に並行して周辺の地中レーダー探査を実施した。その結果、土塁、堀と思われる反応が得られている。若神子は須玉川、西川の氾濫原であり、自然堤防と旧河道が複雑に入り組んでおり、探査結果の解釈は難しいが、現在の地割から想定されるほぼ方一町の区画とも調和的である。

以上の調査結果と方形区画を、南北朝期後の動乱期に寺が自衛のために備えた施設とみるか、長泉寺創建時に建設地を寄進した有力者の屋敷跡とみるべきか、あるいは全くの誤認であるのか。現時点ではこれ以上の判断材料は得られていない。

第５節　小和田館跡（長坂町大八田字古屋敷）

この館については、記録や伝承が何もなく、圃場整備事業に先立つ発掘調査で初めて存在が知られた遺跡である。

遺跡周辺は南に緩やかに傾斜する地形で、八ヶ岳南麓台地の中でも特に起伏の少ない土地が広がっている。地名から中世の大八幡荘・逸見荘との関連が推測され、逸見清光の伝承がある谷戸城跡、武田家臣堀内下総守の館であったとの伝承がある渓草館、地下式土坑が多数確認された弥生遺跡など中世の遺跡が多く確認される地域でもある。

昭和58～60年、63年の4年次にわたる調査により、堀に囲まれた施設とその周りに広がる集落が発見された。

堀はこの遺跡の中心的な施設を囲んでいたと考えられるが、確認されたのは西側（A区）と南側（F区）である。西側は幅4～5m、深さ1.5～1.7mを測る薬研堀、南側は幅約10m、深さ約5mと西側に比べ規模の大きな堀であった。遺跡の中央を北から南へ蛇行しながら流れる鳩川との位置から、南側の堀は東端が鳩川まで、西端は西の薬研堀との交点までの200mほどの長さと推測されている。北東～東を鳩川で区画し、西と南を約200mの長さの堀で方形に区画したのがこの施設の範囲と考えられている。

この区画内では堀、掘立柱建物跡、地下式土坑、井戸跡、集石遺構などが確認されている。掘立柱建物跡と考えられる柱穴は、南の堀のすぐ内側に集中している。これらの建物跡は北側に接する堀により区画されていたようで、堀と建物群との間には土塁の痕跡が確認されている。この堀については、雨水の排水のためと考えられている。

西の薬研堀の内側では、地下式土坑が集中している。掘立柱建物跡と重複しているものがあり、建物跡の方が新しいことが分かっている。地下式土坑が、この施設の中でどのような役割を担っていたのかは不明である。

全体を見ると、区画する堀のすぐ内側に一定の幅で何もない空白域があり、さらにその内側に遺構の集中箇所があるように見える。区画の中心域は遺構が散在しており、重複も少ないようである。堀の内側に遺構がないことは、土塁や築地塀のような構造物があったことを想定させる。

出土遺物として天目茶碗、硯、水滴、内耳土器、犬や鳥の形をした土製品、刀の鍔などがある。天目茶碗と硯は、天井が崩落した地下式土坑の覆土中から発見され、水滴もその近くの耕作土中から見つかっている。遺物の年代は15世紀代が中心とされるが、16世紀前半まで存続していた可能性も指摘されている。

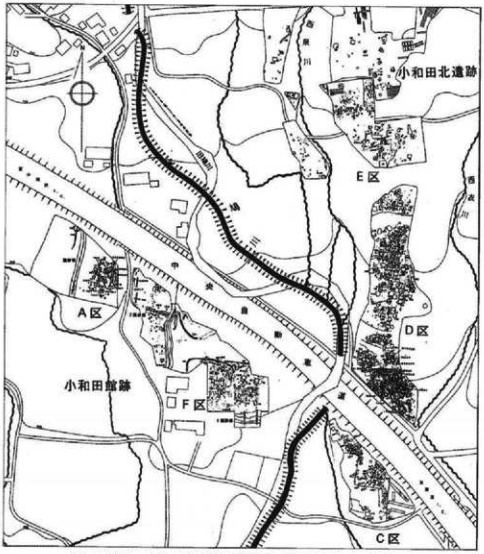
この区画された施設の鳩川を挟んだ東側（C区・D区・E区・小和田北遺跡）には、中世の所産と考えられる遺構が多数確認されている。住居跡と考えられる竪穴状遺構、地下式土坑、石組井戸、掘立柱建物跡、水溜めとされる方形石組遺構、土壙墓、柵列などで、前述の区画された施設の東～南東にかけて特に遺構が集中する。調査区の最も南になるC区には、地下式土坑が大まかに2群に分かれて集中している。中央自動車道を挟んだ北側のD区では南側に墓と考えられる土壙の集中があり、その北側に15世紀前後と考えられる竪穴状遺構が29基確認されている。E区は、D区の北側の調査区で、区画された施設からは北東のやや離れた位置になる。ここも墓と考えられる土壙が多く見つかったが、D区南端

のような密度ではなく、調査区全体の遺構の分布もC・D区に比べ散在的となっている。E区の北に隣接する小和田北遺跡では、遺構の散在化はさらに顕著になる。竪穴状遺構・掘立柱建物跡・地下式土坑・土壙などが見つかっており、土壙がE区に近い南側に偏っているが、その他の遺構は重複することもなく調査区全体に広がっている。

出土遺物として注目されるのは、D区の3箇所から出土した約6000枚に及ぶ埋納銭で、約1000枚は遺構に伴わず置かれた状態で出土し、約2000枚は一辺20cm程度の方形の掘り込みに充填されており、約3000枚は古瀬戸灰釉四耳壺に入れて埋められていた。四耳壺については、その銭種と構成から15世紀初頭頃に埋納されたとされる。

これら調査区全体の遺構の年代として、出土遺物から14～15世紀を中心とする時期が考えられており、17世紀初頭まで存続したとされる。

この区画された施設については当初から館跡との見方が強かったが、館と判断される遺構・遺物が少ないこと、葬送に関連する地下式土坑や土壙が多く見つかっていることなどから、寺院跡ではないかとの指摘もある。調査区の北西にある深草館とその北に広がる金生遺跡の地下式土坑群との関係も含め、より広い視点から検討する必要がある。



小和田城跡・小和田遺跡調査概要図（萩原2000より転載）

第６節　谷戸氏館跡（大泉町谷戸）

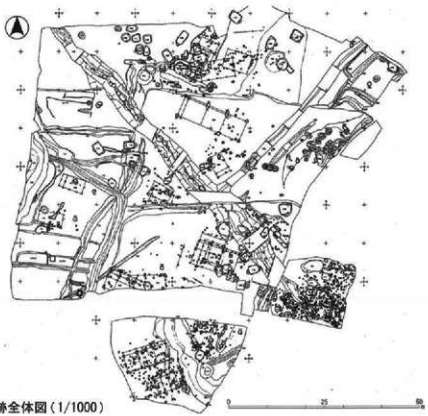
この調査地は、大泉町内に現在も残る湧水「八右衛門出口」に名前が残る谷戸八右衛門の屋敷跡と伝えられる場所であった。湧水の水利権をもつ土豪であったと考えられるが、いつ頃にどのような経緯で水利権を得たかについてはっきりしたことは分かっていない。

標高825ｍあたりの尾根上に屋敷があったとされ、この北約200ｍには谷戸淡路守の館跡と伝えられる道喜院が、東約500ｍには逸見清光の築城との伝承が残る谷戸城がある。この谷戸淡路守という人物についてもよく分かっておらず、八右衛門との関係も不明である。

圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、尾根上に掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、尾根の下の沖積面で堀状遺構、ピット、地下式土坑などを確認した。尾根上で確認された遺構のほとんどは近世のものと考えられており、伝承のとおり屋敷のような建物群が確認された。

一方、沖積面で発見された遺構は中世の所産と考えられている。調査区の北西から南東にかけて最大幅7ｍ、深さ2ｍ以上の用水路が通されており、調査区の東側の新田開発のために掘削されたものと想定されている。この水路が沖積面に達したところに石を組んだ水場ともいえる遺構が確認されており、ここから出土した陶器類から用水路の時期の下限は16世紀代と考えられている。また水場遺構のまわりには、多数のピットが確認され、館あるいは集落に伴う建物跡の存在が想定されているが、具体的な抽出はされていない。用水路の廃絶後、これに直行して堀状遺構が平行して2本掘削されており、この遺構の覆土の観察から、この2本の間には土塁があったと推測されている。また、この堀状遺構から溝が派生しており、虎口状の施設も想定されている。

堀状遺構は用水路の廃絶後に掘削されているので16世紀代かそれ以降のものとすることができるが、建物跡と想定されるピット群との関係に不明な点が多く、中世遺構群の全体像をとらえるまでには至っていない。



谷戸氏館跡全体図（1/1000）

第７節　教来石民部館跡（白州町鳥原字上小用）

館は釜無川によって形成された高位段丘面南端の眺望の開けた場所にある。段丘面は標高710～720mを測り、北は流川、南東側は松ヒ沢川に削られ急崖となる。

館の南を除いた三方を囲む南沢・上小用・東原の３遺跡でも中世の遺物が確認でき、この館のものと考えられている。館の南では遺跡は確認されていない。

この館は教来石民部景政、後の馬場美濃守信房（信春）の館と伝わる。『甲斐国志』ではこの館について「教来石氏宅塹　下教来石村　上屋敷・中屋敷・裏門ナドノ名存セリ　其ノ地ニ雪井モアリ　上教来石村ニモ同氏ノ居跡トテ内杭根・外杭根・裏門トゴフ地名アリ　又古碑アリ　明応三年庚寅ノ字ヲ見ル古事ヲ知ラズ」とあり、同じ白州町内に「馬場氏ノ宅跡　白須村　字ナヲ大庭トゴフ　其ノ下ニ殿町トゴフ処アリ　梨柏ノ老樹アルヲ園樹ナリトゴヒ伝フ」と馬場氏の館のあることを記している。また、小淵沢町の殿見という場所について「里人伝ヘテ馬場美濃守ガ本村ノ番所ヲ護リシ時ノ居址ナリト云フ」という伝承を伝えている。

教来石氏は教来石を本拠とした武川衆の中の一族である。武川衆は武田信光の四男、一条信長の孫の信時（？～1321）を祖とし、信時により現在の北杜市白州町・武川町内に子が分封されたのがはじまりとされる。白須・鳥原・山高などを本拠とし、これら現在も残る地名を名字として名乗った。教来石氏も同様であったが、武田信虎・晴信に仕えた民部景政が、絶えていた馬場家を継いで馬場信房と名乗ってからは、教来石を名乗るものはいなくなった。この教来石民部館跡は、教来石氏が誕生してから民部景政が馬場氏を名乗るまでの間存続したと考えられており、馬場氏となってからは白州町白須にある馬場氏館跡に移ったと推測されている。

教来石民部館の位置として想定されていたのは、南側に埋まりきっていない空堀跡、東側と西側も空堀の痕跡と考えられる南北方向の細長い地割りで囲まれた「殿畑」とよばれる畑の一角で、区画南東隅には川構えのような南側に傾斜した突出部があり、そのまま館外に続く虎口と考えられていた。しかし、北側の区画が確認できないこと、長さ約300mの南側の空堀は殿畑の区画を越えて西側に延びていることから、はっきりした館の範囲は不明となっていた。

発掘調査は、抜根を伴う作物転換の計画が出されたことを契機として、館の範囲確認調査を行うことから始まり、その後の圃場整備に伴う調査が数次にわたって行われている。

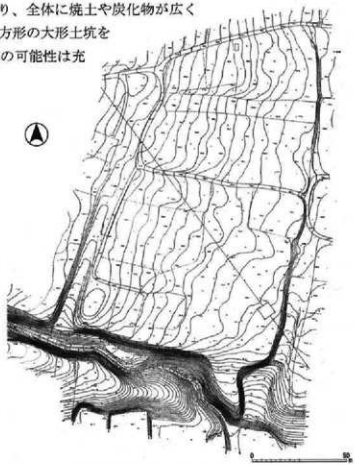
発掘調査から、東と西を区画する地割りが空堀跡であることが確認された。東側は幅5.6m・深さ2.7～2.8m・約45°の傾斜の薬研堀である。底には幅70cm・深さ30cmほどの水路状の溝が掘られている。土層の観察では外側（東側）からの土の流入が顕著に見えるため、盛土を伴った構造物があったのかもしれない。半分ほど自然に埋まったところで、埋められている。空堀と館の敷地の間には幅約1.5mの犬走りともいえる空場が設けられ、その面から約1.2mの段差で館内部の地表面となる。館の敷地と犬走りの境には土塁とも考えられる、硬く締まった黒色土層が確認されたが、断定できなかった。この空堀は、全長約120mで浅い溝のようになって終わっているが、館内部と外側についた段差はその先約50m続いており、空堀がなくても外部との遮蔽効果は維持していたと考えられる。

西側は幅約5m・深さ1.7～1.9mの薬研堀で、館側（東側）が約30°、外側（西側）が約40°の傾斜であった。底には幅40cm・深さ15cmの水路状の溝が掘られ、半分ほど自然に埋まったところで埋土されている点は東側の空堀と共通する。この空堀は全長160mで、東側の空堀より長い。北端で確認された終点の形状は階段状に3段の平場を連ねた形となっており、そこから東西方向に小規模な空堀が出ている。東へ延びるものは、東西の空堀で囲まれた区域の北側を画するものと考えられるが、幅約3m・深さ1.3mと東西の空堀に比べ小規模である。地中探査レーダーの調査から、東の空堀の延長線上まで延びていると推測されている。西側へはトレンチ調査により約50m延びることが確認されたが、はっきりとした終点は見つかっていない。

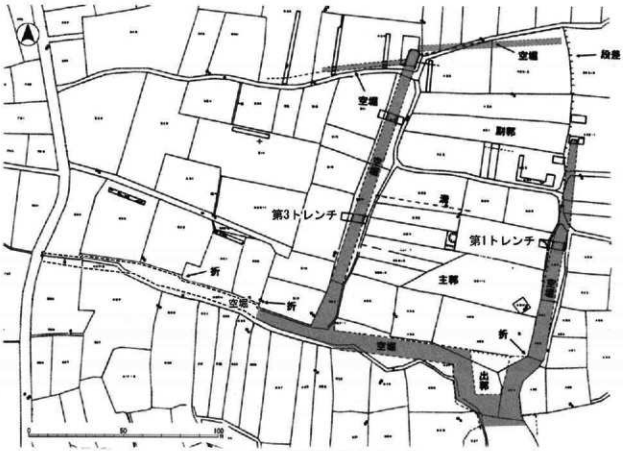
四方を空堀で囲まれた区画のうち、ほぼ中央を東西に延びる溝のデータが地中探査レーダーで検出されており、ここを境に空堀が深く防御が厳重な南側を主郭、北側を副郭と想定している。また、この区画の西側に隣接する土地も北側の一部、東側、南側が空堀で囲まれており、教来石氏に関係する施設が展開していた外郭部と位置付けられている。

副郭と外郭部も部分的に発掘調査が行われている。副郭部では主だったものとして、1間×2間と2間×3間の建物跡、副郭の中をさらに区画するような溝、13世紀代のものと考えられる竪穴状遺構、多数のピットが確認されている。2棟の建物跡は副郭の中でも北と南の離れた位置にあるが、ともに柱間寸法は1.9mと共通している。南にあり、主郭にも近い2間×3間の建物跡は礎石建物であり、全体に焼土や炭化物が広く堆積し、建物内の北側には隅丸長方形の大形土坑を一基伴う。多数のピットも建物跡の可能性は充分考えられる。

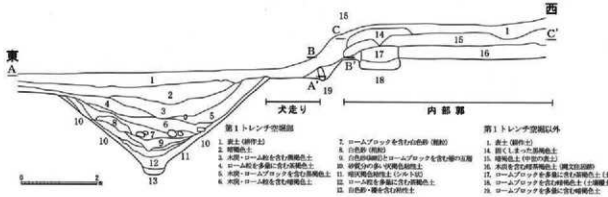
外郭部では西の空堀近くで1間×2間と2間×3間の建物跡、主郭と副郭を分ける溝の延長上に重なる溝が確認された。建物跡は近接しているが、主軸は異なり、柱間寸法も共通しない。溝は主郭と副郭を分ける溝の延長上にあたり、外郭部もこの溝で南北に分けられている可能性もあるが、どこまで続いているのかは分からず、西側の区画施設も見つかっていない。そのため、現況地形の観察から300mの長さと推測される南側の空堀との関係も不明のままである。



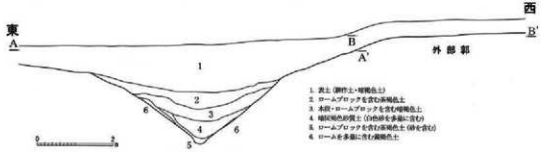
教来石民部館跡地形測量図（1/2000）



教来石民部館跡遺構現況図(1/2000)



教来石民部館跡第1トレンチ断面図(1/100)



教来石民部館跡第3トレンチ断面図(1/100)

第5章　総括

北杜市内の城館跡の体系的な把握を試みた成果は今までにない。甲斐国志古跡部の記述は現在消滅した遺構、伝承地を含めて網羅的に把握されていて、今回の分布調査の基礎文献として非常に貴重な情報であるが、武田晴信と徳川家康の事績を顕彰する傾向が強く、遺漏も認められる。昭和50年代には、谷戸城、笹尾砦、中山砦が相次いで学術調査され、従前把握されていなかった縄張り等を明らかにするとともに、発掘調査により実年代の把握に迫った。昭和55年の『日本城郭大系第8巻　山梨・長野編』において山梨県内の主要な城館跡が把握され、地域の研究者による縄張り図が初めて提示された。昭和62年刊行の『中世城郭事典第2巻　中部近畿一』において八巻孝男氏が県内主要城館跡の縄張図を提示した。さらに、昭和61年には『山梨県の中世城館跡分布調査報告書』が発行された。甲斐国志の記載等を基に北杜市域88ヶ所の城館跡推定地が5万分の1地形図上に分布が示されるとともに、主要な城館跡の縄張図も提示されている。

このように、これまで中世城館跡の調査が繰り返し実施されその分布が把握されるとともに、主要な城館跡が研究され浜草館などは史跡指定を受けて保護されてきたが、一方で地域振興、観光振興の観点から城館跡の歴史性への配慮に欠ける開発が谷戸城跡、若神子城跡、笹尾砦などに及んできた。平成3年刊行の『定本山梨県の城』でも城館跡の危機が訴えられているとおりである。近年、宮坂武男氏が精力的に長野県、山梨県などの城館跡を踏査され、その成果が『図解山城探訪　第15集　山梨・峡北地区資料編』に結実しているが、城館跡の危機はなお止まず、農道整備や公園整備などにより、獅子吼城、笹尾砦の一部が消滅している。

以上のような状況を踏まえ、本分布調査は、町村合併と北杜市発足を機に市内城館跡を網羅的に把握し、将来に備えて計画的な保存施策を構築するために企画したものである。

詳細分布調査は、第1章に記したとおり5ヶ年にわたり実施してきたが、日常の埋蔵文化財保護業務と並行して作業したため、当初の目論見どおりの文字どおり詳細な調査には至らず、なお遺漏も多いことと思う。実際、報告書をまとめる間際になって、全くの偶然から屋敷裏の竹藪中に土塁を見出すこともあった。それでも、市内119ヶ所の城館跡の現状を把握し、主要城館跡の現況平面図を作成し、かつ一部には新発見の知見を加えられたことは一定の成果であったと思う。この成果を今後の市文化財行政に反映させることが次の課題である。

最後に分布調査を通じて調査者が感じた市内城館跡の状況を述べておきたい。

第2章第1節に述べたとおり、市内城館跡は、甲斐源氏出現期に遡る伝承をもつ谷戸城、若神子古城にはじまり、新しい時期では近世初頭の最代氏、真田氏、二枝氏屋敷跡まで500年間にわたる時間幅をもっている。当然のことながら時間をさかのぼるほど文献史料は希薄になり、不確かな伝承に頼る部分が大きくなってくる。また、武田氏とその家臣筋、在地土豪の情報は豊富な反面、鎌倉時代の地頭など地縁の薄い支配層の情報は断片的である。こうした情報の偏りを発掘調査で補強することで城館跡の実態に迫ることができるわけであるが、詳細分布調査ではそこまで力が及ばなかった。以下に述べるのは、あくまでも踏査を通じた感想程度の所見である。

まず甲斐源氏出現期の城館跡の状況は全く不明とするほかない。谷戸城は城跡に隣接する城下遺跡で12世紀代の遺構・遺物が確認されていて当該時期に生活痕跡が認められることは確かであろうが、史跡整備に伴う発掘調査では12世紀とその前後の遺構・遺物は確認されていない。この時期に谷戸城が戦略的な役割が求められていたかも含めて検討すべき課題が多い。このことは、吾妻鏡の「逸見山」の比定地とされている若神子古城についても同様である。

鎌倉時代、12～13世紀代に当地を支配した逸見氏の事績も明らかではない。谷戸城、城下遺跡付近、若神子古城周辺が候補地と考えられる。当時、北杜市域でもっとも人々の活動が顕著であったのは須玉町若神子から穂足にかけての須玉川、塩川低地である。須玉町穂足の腰巻遺跡は古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて連続と大集落が維持されていることが発掘調査で明らかになっている。若神子の時宗長泉寺は13世紀末から14世紀初頃頃に改宗したとされている。当時の時宗の活動の在り方を踏まえると長泉寺周辺が郡内的空間として発展していたことが想定される。こうした点を考えると、逸見氏の拠点は若神子古城とその周辺に想定することがより妥当性が高いように思える。

一方、若神子・穂足地区の南に隣接する韮崎市藤井には、藤井保が想定されている。時代が大分下る史料からの想定であり、鎌倉時代にまで遡り得るのか不明であるが、「保」は一般に国衙領から成立するといわれる。古くから農地が開発され条里制が敷かれた藤井とその北に隣接する若神子・穂足地区は、国衙領であった可能性もあり、逸見氏が国衙領を避けて大八田周辺に拠点を設けたとみることもできよう。

13世紀から南北朝期にかけて鎌倉御家人二階堂氏が上大八田村、下大八田村半分、夏焼村因幡倉の地頭職を足利直義に安堵されている。これらの所領を管理する拠点が、規模はともかくにも現長坂町大八田周辺に想定されてよいが、これもいまだ不明である。長坂町小和田館跡、大泉町寺所屋敷周辺あたりが候補地なのかもしれない。大八田には中世遺跡が多く、今後の調査に期待したい。

同じ13世紀には小笠原牧牧士と奉行人二浦義村代官の「喧嘩」が記録されている。小笠原牧が御家人二浦氏の所領するところであり、かつ「地下の職人」たる牧士、おそらくは在地有力者の存在がうかがわれる。しかし、小笠原牧に比定される明野町には双方に係る居住地、屋敷跡が今のところ確認されていない。伝小笠原氏屋敷跡などが候補に挙げられるが、屋敷跡の実態は全く不明である。茅ヶ岳山麓に知行地を得た伊東氏の事績もまた不明である。

同じ頃の遺構に長泉寺墨とした土塁がある。時宗長泉寺の周囲には略方形の地割が残り、堀跡あるいは土塁が確認される。南北朝期の寺院が防御施設を備えたものとも、長泉寺の檀越が屋敷地を寄進し寺院としたものとも解釈できる。逸見氏との関わりにおいても気になるところである。

南北朝期から戦国前半期にかけて甲斐国内も地侍たちが徒党を組んで対立した。輪宝一揆と日一揆の対立も知られている。日一揆は韮崎市穂坂町の日ノ出砦を拠点としたという。北杜市域にもこれらの一揆に与した勢力があったものと思われるが、14世紀から15世紀代の城館跡がはっきりしない。この点、谷戸城跡の調査で当該時期の遺構と遺物が充実し

ているのは示唆的である。在地勢力が対立し、信濃勢がさかんに甲信国境を越えて甲斐へ侵入したこの時期に築城、利用が始まる山城が市域には多いのではないと思わせる。

戦国時代後半期、武田氏の甲斐国支配が確立し、信濃攻略が始まると市域の城館跡も盛んに利用されるようになる。なかでも甲斐府中と信濃方面を結ぶ烽火台通信網が整備され、多くの烽火台伝承地が確認されている。烽火台伝承地には大渡烽火台のように平場、土塁を伴う明確な遺構と、神戸烽火台のように比定地も遺構も不明確なものとがあり、後者が多い。単に烽火を掲げるだけなら特別の施設も必要ないのであるから、遺構が不明確なのはやむを得ないが、烽火台伝承地の調査の機会を待ちたい。

須玉町小尾の甲信国境にある信州峠防塁もその性格が不明なままである。試掘調査で濠を伴わないことが確認され、土塁の規模も決して大規模ではないが、東西３kmの総延長の土塁は地元集落のみの施設とは思われない。国立公園内での限定された試掘調査では築城、使用年代を明らかにできなかったが、その性格が何であれ遺跡として重視すべきであろう。

天正壬午の乱に関連して若神子北城と旭山墨跡の地形測量を実施した。築城時期が新しいだけに遺構の保存状態も比較的良い。とはいえ本格的城郭としては大雑把な構成であるとの印象を受け、ごく短期間に築城され廃棄された両城の性格をよく反映している。

分布調査を通して市域には小規模な土塁を伴う屋敷跡が多数分布していることが改めて確認された。特に高根町、長坂町、大泉町のいわゆる「台上」地域に多いが、明野町などほかの地域にも認められる。機会をとらえて聞き取り調査も行ったが、防風林とか水害除けのための土手という回答があった。これらの遺構も構築の時期や性格がはっきりしない。武田氏の主要な家臣が天正壬午以後、滅亡した本領地を離れていくなかで、こうした小規模な遺構がどのような役割を果たしたのであろうか。山城を築きやすい塩川、釜無川流域とは異なり、山城適地の少ない台上地域や茅ヶ岳山麓に発達した自衛施設であったのか。

分布調査の過程で城館跡に関連した遺構が破壊されているのを発見することがあった。先述した小規模土塁を伴う屋敷跡は地域の旧家であることが多い。家主が転出して放置された民家が老朽化して取り壊され、あるいは転売されていく過程で、土塁が破壊されたり削平される場合がある。今後、この分布調査の成果を市の「周知の埋蔵文化財包蔵地」に加え、埋蔵文化財として保護措置を講じることが必要である。また開発行為に伴う記録保存のための発掘調査において、これらの遺跡の年代、性格が明らかになっていくことも期待される。

明野町上神取の屋代氏屋敷跡は現存する土塁が市指定史跡になっているが、屋敷跡の主要部分は農地である。平成23年度には屋敷跡を含む農地で土地改良事業が計画され、記録保存のための発掘調査を実施する。この土地改良事業の事前協議で屋代氏屋敷跡の取り扱いが問題となった。現状のまま保存してもらうことが望ましいが、一方で私有財産である農地の改良は農業経営の効率と資産価値を高める大切な営農行為でもある。地権者からは史跡として公有地化が可能であるなら協力したいとの申し出もあったが、逼迫する一方の地方財政はそれを許さない。発掘調査で明らかになる知見は多大であろうが、城館跡の保護全般に係る課題とジレンマに文化財保護行政は常に直面し続けている。

1-1 小笠原氏屋敷

1-2 三井氏屋敷

1-3 屋代氏館跡

1-4 堤屋敷

1-6 御領平の塁

1-6 御領平の塁

2-1 大豆生田砦

2-2 藤巻氏屋敷

2-3 真田氏屋敷

2-4 丸茂右衛門尉屋敷

2-5 中尾城

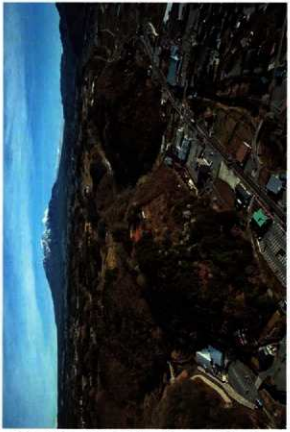
2-7 三枝氏屋敷

2-7 三枝氏屋敷

2-8 岩下弥三郎屋敷

2-9 若神子城跡（古城）

2-9 若神子城跡（古城）



2-10 若神子城跡（古城）（左）　北城（右）

2-11 若神子南城

2-12 長泉寺周辺の堀跡

2-12 長泉寺の塁

2-13 源太ヶ城跡

2-15 古宮城

2-14 津金口留番所

2-16 又十郎屋敷

2-17 清水氏屋敷

2-18 馬場口留番所

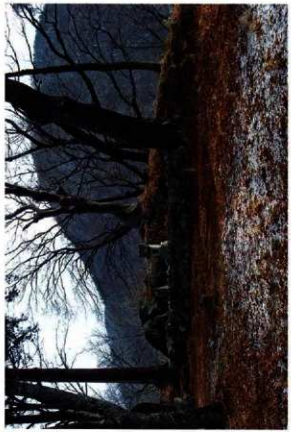
2-18 馬場口留番所の建物

2-20 根古屋口留番所

2-23 岩下口留番所

2-25 五軒屋番屋跡

2-19 獅子吼城跡



2-19 獅子吼城跡

2-21 大渡の烽火台跡

2-21 大渡の烽火台跡

2-22 小森山烽火煙台

2-24 比志城跡

2-27 神戸烽火台

2-27 神戸烽火台

2-26 前の山烽火台

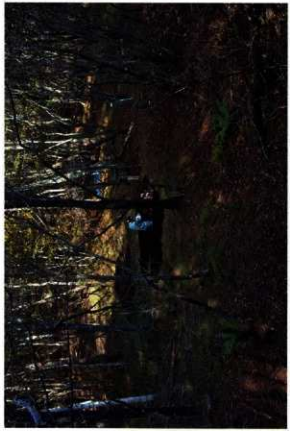
2-28 和田の烽火台

2-29 黒森烽火台

2-30 小尾口留番所

3-1 火の見山烽火台

2-31 信州峠防塁



2-31 信州峠防塁

3-2 浅川集落と浅川砦

3-3 浅川屋敷

3-3 浅川屋敷

3-4 浅川口留番所

3-5 樫山口留番所

3-6 伝仁王屋敷

3-6 伝仁王屋敷

3-7 大坪塙

3-8 大林屋敷

3-8 大林屋敷

3-9 中尾根屋敷

3-10 梅ノ木屋敷

3-10 梅ノ木屋敷

3-11 大坪塁

3-12 清水氏屋敷

3-13 十騎屋敷

3-14 上蔵原塁

3-14 上蔵原塁

3-14 上蔵原塁

3-14 上蔵原塁

3-15 米倉氏屋敷

3-16 新井館

3-16 新井館

3-17 白倉氏屋敷

3-18 西横森塁

3-18 西横森塁

3-18 西横森塁

3-20 日向氏屋敷

3-19 旭山墓跡

3-19 旭山墓跡

3-21 小宮山氏屋敷

3-22 大柴氏屋敷

3-23 五町田御所

3-24 長者屋敷

3-25 長沢口留番所跡

4-1 塚川塁

4-1 塚川塁

4-1 塚川塁

4-3 深草館跡

4-2 守屋氏屋敷

4-4 東原塁

4-4 東原墓

4-5 南新居屋敷

4-5 南新居屋敷

4-6 田中氏屋敷

4-6 田中氏屋敷

4-7 向井氏屋敷

4-8 植松氏屋敷

4-10 相吉氏屋敷

4-9 三井氏屋敷

4-9 三井氏屋敷

4-11 長関屋敷跡

4-12 井出氏屋敷

4-12 井出氏屋敷

4-13 中丸砦

4-14 天白砦

4-15 菅沼氏屋敷

4-16 大井ヶ森口留番所

4-17 小荒間口留番所

5-1 下井出塁

5-1 下井出塁

5-2 寺所塁

5-2 寺所塁

5-5 城下屋敷

5-3 谷戸氏屋敷

5-3 谷戸氏屋敷

5-7 谷戸城

5-7 谷戸城・5-4 城下方形地割

5-6 城下塁

5-6 城下塁

5-8 谷戸淡路守宅跡

6-1 島氏屋敷

6-2 茅野氏屋敷

6-2 茅野氏屋敷

6-3 今井氏屋敷

6-4 笹尾岩見守屋敷

6-6 笹尾塁跡　区画②

6-6 笹尾塁跡区画③・④間の堀断面

6-7 御所屋敷

6-8 西屋敷

6-9 小瀬沢口留番所

6-10 殿平屋敷

6-11 平井氏屋敷

7-1 山口口留番所跡

7-3 牧来石民部館跡

7-4 鳥原城山

7-4 鳥原城山

7-4 鳥原城山

7-4 鳥原城山

7-5 馬場氏屋敷　白元寺地点

7-5 馬場氏屋敷　白州保育所地点

7-6 根古屋

7-7 曲淵氏屋敷

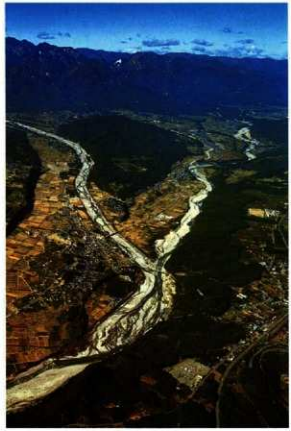
7-7 曲淵氏屋敷

7-7 曲淵氏屋敷

7-9 横手の関

7-10 横手氏屋敷

8-1 旧花水坂から根古屋と中山砦跡を望む



8-1 中山砦

8-4 星山古城

8-4 見返り峠から見た星山古城

8-2 一条氏屋敷

8-3 柳沢氏屋敷

8-3 柳沢氏屋敷（柳沢寺地点）

8-5 餓鬼嗌

8-6 実相寺塁

8-6 実相寺塁

8-7 山高氏屋敷

8-9 米倉左太夫宅跡

報告書抄録

ふりがな	しないじょうかんせきしょうさいぶんぷちょうさほうこくしょ
書名	市内城館跡詳細分布調査報告書
副題	
シリーズ名	北杜市埋蔵文化財調査報告第35集
著者	佐野隆・廣瀬公明・渡辺泰彦
発行機関	北杜市教育委員会
編集機関	北杜市教育委員会
所在地／電話	〒408-0115 山梨県北杜市須玉町大豆生田961-1 0551（42）1375
印刷所	株式会社サンニチ印刷
発行日	平成23年(2011) 3月31日

ふりがな	やまなしけんほくとし
所在地	山梨県北杜市
位置	北緯35° 46′ 35″ 東経138° 25′ 25″
調査原因	詳細分布調査
調査期間	平成18年4月1日～平成23年3月31日
調査機関	北杜市教育委員会学術課文化財担当
調査面積	対象面積660㎢
時期	中世 近世
主な遺構	城館跡・烽火台・墨敷跡・口留番所
主な遺物	
特記事項	北杜市内に分布する中世初頭から近世初頭までの城郭、山城、烽火台、屋敷跡、口留番所等の現状を踏査資料を基に報告。付録CDに位置・推定範囲の地図データを収録。

北杜市埋蔵文化財調査報告第35集
市内城館跡詳細分布調査報告書

2011年3月25日印刷
2011年3月31日印刷

発行　北杜市教育委員会
山梨県北杜市須玉町大豆生田961−1
TEL（0551）42−1375

印刷　株式会社サンニチ印刷
山梨県甲府市宮原町608−1
TEL（055）241−1111